

---

# Only You !

羽衣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Only You!

### 【Nコード】

N6171C

### 【作者名】

羽衣

### 【あらすじ】

八年振りに故郷に帰ってきた柊一を待つものは、美しく成長した幼なじみと素敵な女の子達！！純情乙女の恋心が入り乱れる中、柊一の奮闘は続く！！

## Prologue

俺の名前は皐月 柊一さつき しゅいつ

まあ、俗に言う普通の高校生ってやつだろう。

今俺は車に揺られ、生まれ故郷である木枯町こがらしちやうに向かっている。

俺は小学三年生あたりで引越しをすることになり、俺の親父の親父、つまりじいさんに預けられていた。

それが突然、八年経った今、二年生への進級とともに帰ってきたと言っわけだ。

しかもなんだ、新たな家に移り住むと思えば八年前住んでいた家にまた住むらしい。

新鮮味が無いったらありゃしない。

親父がどんな仕事をしているかは知らないが、単身赴任が多く、とにかく全国各地を飛び回っている。

ちなみに母親は俺が生まれてすぐに病死したらしい。

そんな訳で新しい住居（全然記憶にないんだから新鮮味がないこともなかった）に到着し、屈強な引越屋さんが俺の部屋に荷物を運んでいった。

「おい柊一、昔隣に住んでた、妃奈ちゃんて覚えてるか？」

荷物運びを手伝っていた親父が、何の気なしに聞いてきた。

「妃奈？いや、まあ何となく……」

かなりうる覚えだが、確か隣にそんなやつがいた気がする。

「あゝあ、妃奈ちゃんが聞いたら怒るぞお？昔はあんなに仲良かったのになあ」

「んなこと言っても八年だぜ？忘却の彼方だな」

親父の鼻で笑うような声を聞き流しながら、俺はさっさと部屋に引きこもることにした。

これが俺の予想だにしなかった結果を招く序曲になろうとは、まだ知る由もなかった……………。

## 一話 新たな生活

木枯町立第二高等学校。

それが、俺の新たなる学び舎だ。

俺はこの町の事を全く覚えていないからか、徒歩十五分の道のりを一時間かけて登校するハメになった。

あの時親父に見栄を張って、一人でたどり着けるなんて言わなきゃ良かった。

そのせいでこの町を散々歩き回った末、二高に着いた。

最初は職員室に出向き、教師の方々に挨拶をしに行ったのだが、何分遅刻気味なのだからどうにも視線が痛い。

かなり余裕を持って家を出ていなければ、いきなり指導をくらうところだったな。

そんな訳で、これからクラスメートになる予定の人々の元へ、俺は行進することになった。

はじめに片山とかゆう男子教師、しかも半世紀とちよつとを過ごしたであろうおじいちゃんが、俺の紹介をしてくれた。

こんなじじいが俺の担任とは、神様も酷なことをする。

美人な女性で、若くて、生徒とほとんど見分けがつかないちよつと天然な人を、俺は夢見ていたのに……………。



そんなギャルゲーにしかないような設定はさておき、俺からも自己紹介を手短に話してやった。

こっぴうのは適当なことを淡々と語るに限る。

下手にウケを狙ったりして大惨事になった奴を、俺は数人知っているからな。

で、そのじじいに指定された席に着席し、朝のHRが始まった。

何やら宿題を提出しようと、みんながざわざわして歩き回った時だった。

「よっ、転入生」

軽々しく喋りかけてきたのは、割と顔がかっこいい目の男だった。

俺が今までモテなかったからかもしれないが、イケメンは好きではない。

だから無視していると、そのとなりにいる、今度はかわいい女子が話しかけてきた。

「こんにちは、私水野つてゆうの、よろしくね」

俺は美女は好きなのでこちらには返事をしてやる。

「皋月 柊一だ。よろしく」

水野なる女子は俺に優しく笑いかけている。

「泉 涼太、今日からお前の親友だ。よろしくな」

せっかく俺が初恋に目覚めようとしていたのに、それを邪魔するとは。

だがまた無視するのも可哀想なので、適当に「うん」と言っちゃった。

取りあえず二人、友達ゲッチューだ。

その日は入学式とかもあったので、午後には家に帰宅できた。

校門を出て、今度は無事に家にたどり着けるかと悩んでいた時、後ろからキレイで透き通った声が飛んできた。

「あの~~~~~……」

振り向いてみれば、そこにはとても美しい女の子が立っていた。

一瞬ゾクツとしたね。

神様はまだ俺を見捨ててはいなかったのか！

ギャルゲーというヒロインの登場だ。しかも二人目か!?

「……………なに?」

俺はなんとも思っていないような声で答えた。

動揺すると恥ずいからな。

「柊君……………だよな?覚えてる?昔よく遊んだんだけど……………」

俺の名を気安く呼ぶとは、男子なら殴ってるぞ。  
かわいいからいいけどな。

「悪いけど……どちら様？？」

「もうっ！っ！やっぱり忘れてた！っ！」

その女の子は顔を膨らませ、プンプン怒っている。

「妃奈だよっ、神谷 妃奈！」

ひな？どっかで……って確か幼なじみか………？

「ああ、妃奈か………そっぴや昔よく遊んだな」

俺は親父に言われた事をそのまま言っただけだ。

あまり記憶に自信がなかったからな。

「ありがと……あの約束、覚えてくれたんだね……」

……あの約束とは一体？

俺は約束の事なんかさっぱりだぞ。

覚えてるのは妃奈の家と俺の家がとなりだということぐらいだが。

「せっかくだから一緒に帰る。また同じ家何でしょ？」

なんで知ってるんだ？とか、約束って何だ？とか思ったが、ここは  
すんなり了解しておこう。

帰り道もつろ覚えだしな。

その帰り道での出来事なのだが、俺が

「妃奈」と話しかけると、顔を真っ赤にしなが

「はい……………」と、敬語で答えるのである。

お前は新婚ホヤホヤの大和撫子な俺の理想の妻か、と言いたくなる  
ような態度をとるのである。



まあ、俺には幼なじみ萌とかそういう属性はないからなんとも思わないが。

そんな訳の分からん妄想をしているうちに、マイホームの玄関に着いた。

バイバイみたいな小学校低学年レベルのさよならをしてから、俺はドアを開く。

「おっ、妃奈ちゃんと一緒に下校してきたのか？」

「そうだけど、それが何か？」

俺が答えると、親父は猫のような笑みを浮かべて消えていった。

怪しい…………。

親父は今あんな感じだが、明日の朝、おそらくこの家にはいないだろう。

そんな仕事をしているのだ。

だから俺は今日から一人暮らしも同然だということになるじゃないか。

パラダイス……………！

夢にまで見た一人暮らし！

何をするにしても自由なあの……………

ピンポン

俺が狂喜していると、インターホンが雄叫びをあげた。

モニターを覗いてみると、そこには妃奈が立っていた。

「どうした？ 妃奈」

速攻でドアを開け、立ち尽くしてポカンとしている妃奈に聞いてやった。

「あの……お父さんが、今日一日泊まっていけないかって……あつ、ホラッ、おじさんすぐに仕事行っちゃうから」

それはウチに泊まりに来ないかというお誘いの言葉だった。

まあこれからずっと一人なんだし、一日ぐらいいいか。

妃奈もいるし。

と、言うことで妃奈の家、つまり神谷家に厄介になりに行く事が決定されたのだが、俺と妃奈には多少会話に齟齬そごが発生していたようだ。

俺が考えていた泊まりにいく、というのは夜になったらお邪魔になる事だと思っていた。

だが妃奈は、今すぐ来い、そして一緒にアフタヌーンを過ごそう、  
というものだった。

まあ結論から言うと、俺が今妃奈に連れられて駅前を巡回している  
ということにつながる訳だ。

あれから家に乗り込まれ、引きこもりを決行していた俺の腕にしが  
みつき、無理やり引きずり出されたのだ。

駅前といえば、電車に乗るかショッピングでもするかだ。

別段電車に乗る理由もないので、必然的にショッピングをする事にな  
る。

「ねえ柊君、これから服を見たいんだけど、付き合ってくれない？」

俺の内心、

「はあ？めんどくさっ！！」

しかし俺の口は、

「いいよ、もちろんだ」

そしてやっぱりと言わねば、服を見に行く事になった。

「……………ねえ、柊君」

妃奈がレディースの服を物色しながら、少し寂しそうに呟いた。

「なんか柊君変わったね。なんてゆうか……すごく男の子っぽくな  
った」

そりゃ八年も経てば成長するだろう。

それに、もし俺が女っぽくなったら、目も当てられないような事になるぞ。

「やっぱり昔みたいに……仲良く出来ないのかな……」

妃奈の手が止まる。

「何言ってるんだよ、俺と妃奈は昔から仲良いじゃないか。それは今も変わらないよ」

「……………そうだよ、柊君は私の事妃奈って呼んでくれるし、……………でも」

ん？名前で呼ぶ？確かそんな約束があったようななかったような……………と俺がもう少しで思い出そうとした時、妃奈がヤンキーみたいな目つきで睨んでいるのに気がついた。

「今日水野さんと話してた時ニヤニヤしてたでしょ……………浮気はダメ！」

浮気も何も水野さんと話してたのは一瞬で、ニヤニヤしてたつもりは……………あ、してたかも……………。

でも妃奈とは恋仲ではないから浮気にはならん！



「もう……人の気持ちも知らないで………」

「え？何だって？？」

聞き取れない声で、または周波数で何か呟いたように感じたが、妃奈はこちらを一瞥してからプイツとそっぽを向いて店を出てしまった。

女性の心理とはフェルマーの最終定理より難しいのではと、たまに思う。

まあ家に着く頃には機嫌が直っていたので、良しとしよう。

その後は直接妃奈の家に帰り、そこで二人きりになってしまった。

妃奈の母親も確か昔に病死しているハズだ。

そんなへヴィな話はさておき、何故か妃奈の部屋に連行された。

「柊君はさ、前の学校とかで好きな人できた？もしかして恋人がいたり……………とか」

はっはっはっ、好きな人こそいなかったが、恋人？そんな物、出来るはずがない。

一時人間不信に陥って、山にいた小動物にしか心を開けなかった時期があった事を話してやろうと思ったが、長くなるのでやめておい

た。

「そんな人いないよ、俺は妃奈一筋だからな」

冗談のつもりだったんだが、本気にしてしまったのか顔が燃えるように赤くなってしまった。

「そっか……やっぱり柊君は変わらないね。その優しいことか」

妃奈はにっこりと優しく微笑みかけてきた。

おいおい、そんな顔されたら勘違いしてしまうのではないか。

俺の人間不信はそれが原因だぞ。

軽く話しておくと、昔、クラスでもなかなかカワイイ女子と仲良くなり、結構話したりするようになったのだ。

その女の子は誰にでも優しくて、俺も例外ではなかった。

そして、仲良く話している内に

「コイツ、俺のこと好きなんじゃねえの？」みたいな気分になってきたのだ。

それが悪夢の始まりとも知らずに。

ある日突然、その女の子に話したい事があると呼び出されたのだ。

俺はもちろんスキップしながら待ち合わせ場所に向かったさ。

そして言われたのが、

「君との仲、取り持ってくれない……………」？」

ちなみに の中には俺の親友とも言える人物が入る。

もう狂ったね。

俺への告白かと思いきや、仲を取り持ってくれだと？

半泣き状態で山へと走り、散々山の動物と戯れたり格闘している内に俺は確信した。

コイツらは俺を裏切りはしない、と。

それからというものの、俺の居場所は山だけになった。

程度にすると、近所の人々に『ターザン』とか、『もののけ王子』とか言われたくらいだ。

まあ、時の流れが俺を正常に戻したから良かったが、もしあのままだったらと思うとゾクッとするぜ。

と、俺のくだらない回想はここでストップしておこう。

思い出しているとまた野生の生活が恋しくなるからな。

「今日の夕飯なにが食べたい？」

新婚の夫婦なら、君が食べたいとか言うかもしれないが、俺が言う  
と魔神拳が飛んできそうだな。

「美味しいもん」

抽象的に答えるのは俺の十八番だ。

その夜の夕飯は、俺のリクエストに忠実なとても美味しいもんだった。

何かは言わんぞ、そこら辺は想像に任せるぜ。

無事にお泊まり計画を完遂し、俺がマイホームへの長い帰路（10メートル程）につこうとしたところで。

「柊君……いつでもいつまでも泊まっていいんだよ?」

多分一人暮らしを余儀無くされている俺を心配しての事だろう。

うーん、こういう言葉は心にしみるね。

「ずっと世話になるのは悪いだろ、それに、俺が一人暮らし出来る年齢に達したからこの町に帰ってきたんだぜ?」

妃奈は悲しそうにうつむきながら、さっさと家に戻ってしまった。



おいおい無視かよ、イジメってのはそうゆうのがエスカレートしていくんだぞ。

イジメられた経験はないがな。

ともあれ家に戻ると、案の定親父はいなかった。

寂しいとかゆう有り得ない感覚はないが、やはり妃奈達とガヤガヤ騒いでいるとそれがなくなった時のギャップが激しいな。

しかし、いくら家が隣とはいえ、今から登校とはかなりおっくうだ。

それから二時間ぐらい経ったか、妃奈が呼びに来たので一緒に学校へと向かった。

教室に入ってから分かったが、妃奈は俺と同じクラスだった。

それを口に出すと魔神拳・双牙が地を這うことになるので言うてはないけど。

俺が席に着くと、例に習ってあの二人がやって来た。

美人な水野さんと、あのいけ好かないなんとか君だ。

「おはよう、ヒー君」

俺の耳がイカれているのか、本当に水野さんが俺のことをヒー君と呼んだのか。

どちらにしろ、その呼称に不満があるわけではないが………まあいいか。

「なんだよヒー君で、そんなの嫌だよな、柊」

貴様のような下郎に気安く『しゅっ』と呼ばれるよりは百倍マシだ  
がな。

「かわいいじゃない、柊なんて漢字あんまり見ないし」

やはり純粹な理由からそう呼ばれるなら悪い気はしないな。

「まあ好きに呼んでくれていいけどさ」

思えば俺のこの軽はずみな発言は、なんとか君が提案した『しゅっ』  
も認めることになるな。

どうでもいいが。

「それより柊、俺の名前覚えてるか？言ってみろ」

心の中でお前はなんとか君と呼ばれているのに、本名など知るか。

と、俺がなかなか言い出せないのに業を煮やしたのか、自分から名乗りだした。

「泉 涼太だぞ！ひらがなにすると、いずみ りょうただ！」

ひらがなにされても同じに聞こえるぜよ。

「ああ、泉だな。覚えとくよ」

泉と水野さんは気づいていないと思うが、今までの会話はクラス中の視線の的だった。

見知らぬ転入生の素性を知るため、といったところだろう。

斜め後方に陣を構えている妃奈だけは、さぞかし睨みつけていただろうがな。

それからなんとなく仲が良くなった二人も席につき、俺の夢をことごとく打ち破ったあのじじいが華麗に参上した。

そして事件は、皆が船を浮かべる昼休みに起こった…………。

俺の配属された班は見事にみんなの嫌がるゴミ捨て役に任命され、昼休みに率先してゴミステーションへと向かっていた。

なぜ俺なのかというと、学校内部を素早く把握するためらしい。

だがゴミステーションは外にあるらしいので、単なるパシリだな。

とにかく外に出れば場所ぐらい分かると思っていたが、これが意外にややこしい造りになっており、学校敷地内で迷子になってしまった。

最近迷ってばっかだな、俺。

パンパンに膨らみきったゴミ袋を引っさげ、戻ることも出来ず、道を聞こうにも人っ子一人いないのだから困ったものだ。

妃奈にでも付いてきてもらったら良かったなと後悔の念を周囲の草木にぶつけていたその時、やっとこさ助け舟が現れた。

目の前を悠然と歩く一人の女子。

妃奈は髪を肩よりも少し長いぐらいしか伸ばしていないが、目の前の女子は腰に届こうかというほど長い黒髪だった。

俺の経験上、あんな後ろ姿をした女性は美人だね。

オーラが出ている。

そんな気がする。

「すんませーん」

ちょっと距離があるので聞こえないかもしれない。

そう思いながら叫んでみた。

しかし応答がない。

多分聞こえてないんだろうと思い、今度はさっきよりも大きな声で呼んでみる。

「聞こえますかー？」

またもや応答無し……………こうなれば実力行使しないと判断した俺は、ゴミ袋をその場に置き、そそくさとその女子に歩み寄り肩をつかんだ。

「ちょっと聞きたい事が……………」



肩をつかんだ瞬間、その女子はキツと振り返り、俺を投げ飛ばした。

いや、投げ飛ばしたといえはあまりに無粋すぎる。

俺はキレイな弧を描き、柔道の技の一つである背負い投げを見事に喰らったのである。

ドシーン！と、大きな地響きがあったような錯覚にみまわれ、頭の上をヒヨコが乱舞していたその時だった。

背負い投げだけでは飽きたらず、完全に無防備な俺のボディへと剛・魔神剣を叩き込みやがったのだ、その女は。

おかげで俺は激しい嘔吐感と、キレイな川の方こうで手を振る母親が見えた（気がする）

何とか現世に舞い戻った俺は、やってしまったみたいな顔をしているその女を見据えた。

「な……なにを突然……」

あまりの痛みに、言葉が途切れ途切れになる。

「つい……でも、急に肩をつかむあんたが悪いんだからね!!」

なんだこの女。

残念だが俺の常識では、肩をつかまれただけで人をどついていい理由にはならんな。

俺の殴るぞ、は冗談だからいいがよ。

「だからって普通殴るか!？」

「殴るわよ、あんた夜道で会ってたら痴漢で訴えてるわよ」

な、なんという……。

まあ、今のは確かに俺にも非があったが、多少やりすぎたと思うぞ。

「……俺も悪かったが今のはちょっと……」

そこまで言って、急に言葉を遮られた。

「うっさいわねー。それより何？用があつたんじゃないの？」

もついいさ……………。

それは水に流せつて事だろ……………。

「……………ゴミステーションにはどう行けばいい？」

こんな事を聞くためにボコれたと思うと馬鹿馬鹿しくなるな。

「それならこつちよ、お詫びに案内してあげるわ」

そんな感じでゴミステーションへと向かい、その道すがらに名前も聞いておいた。

彼女の名前は、西園寺 桜というらしい。

聞けばその西園寺、昔から柔道や空手を極めんとしたらしい。

素人に手を出すあたり、人間としてどうかと思うね。

話していれば、先ほどの仕打ちが嘘のようなやつだった。

俺の予想通り顔に関しては文句なしの一言だ。

お近づきになるには良い機会だったろうな。

ファーストコンタクトが最悪でなければな。

西園寺のおかげで無事にゴミを捨て、そのまま我がマイクラスへと帰還することが出来た。

## 二話 魔神の拳

「よう、さつきはお疲れさん」

無事帰還した俺へと放たれた第一声は、泉からのものだった。

果たしてそれは、ゴミ捨てという任務を完了した事だろうか。

それとも暴漢に襲われた事だろうかと考えていた時、泉がニヤニヤと笑っているのに気がついた。

「見てたのか？あの惨劇を」

俺は神妙な面もちでハンサム野郎に問う。

「ああ、一部始終な。昼休みに一人でいる西園寺に話しかけるとは、かなり腕の立つ猛者だと思ったが違ったみたいだな」

西園寺は昼休みに一人していると不機嫌だという法則でもあるのだろうか、と俺は気楽に考えていたがあることに気づいた。

「泉、俺が話しかけるとこから見てたのか……………」

「そうだな、じゃないと一部始終見たとは言えないな」

こいつ…………西園寺の習性を知っていながら俺の愚行を見物してやがったのか。

なんて非情で冷酷なヤツ。

俺を救おうとはこれっぽっちも考えなかったに違いない。

「はは、そう睨むなよ。この学校のタブーを身を持って知った方がいいと思ったんだ。許せ、愛の鞭だ」



なあにが愛の鞭だ。

貴様の愛などドラキーにマダンテを使うくらいに無意味だ。

それにタブーなら身を持って知らなくても、言えは済む事だろうがよ。

泉の言葉に今にも狂いそうになっていたが、ここで昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴り響いた。

泉の事を別に嫌っているわけではないので、このまま許してやった。

感謝して欲しいものだ。

5、6時限目も済ませ、習慣となろうとしている妃奈との下校の寸前に、朗報が飛び込んだ。

「今度の週末、みんなで遊びに行かない？」

提案してくれたのは水野だ。

「柊が転入したのに歓迎会がまだだもんな」

これは泉。

つまり泉も同行するし、妃奈と一緒にいる所で提案するということ  
はもちろん妃奈も誘っているのだろう。

まあ確かに交流を深めるにはいいかもしれないと思い、快く了解し  
た。

俺が行くと聞いて、水野を一瞥してから妃奈も行くと聞いた。

やはり人数は多い方が楽しいし、妃奈の同行には大賛成だ。

そして週末。

実のところ、俺はまだどこに行くかを聞いていない。

それは妃奈も一緒に、集合時間と場所しか聞いていない。

駅前集合だから電車に乗るのだろうな、きっと。

俺と妃奈は予定通りの時間に駅前へ着いた。

予定通りと言ってもまだ少し時間が余っているので、水野も泉もまだ来ていない。

その間、妃奈とこんな話を話していた。

「なんか、デートみたいだね」

デートとは主に恋仲の2人が一緒にどこかへ遊びに行く事を指す。

人数はケースバイケースだが。

「デートって、泉と水野は付き合ってたりするの？」

「ううん、泉君も沙樹ちゃんも誰とも付き合ってないよ。ただ楽しいから一緒にいるって感じ」

ちなみに沙樹とは水野の下の名だ。

なるほど。

なんとなく喜びを感じた。

別に水野を意識している訳ではなく、泉に彼女とかいう想像上の産物を取り憑いていないとわかったからだ。

少なくとも水野は。

やがて泉と水野がやって来て、予想通り電車に乗った。

かれこれ十分ぐらい経っただろう。

電車に揺られ、着いたのはデートの定番とも言える場所だ。

そこからはキャーキャーと喜びに近い悲鳴が聞こえ、遠くの方には幾つもの箱がクルクル回っている。

まあ気づいてくれたとは思うが、敢えて言おう。

遊園地。

中には野生の獣をかたどったバイトのおっさんが徘徊し、（いわゆるマスコットだ）高速で走り回る乗り物に喜んで乗り込む。

正直に言おう、俺はこの場所が大嫌いだ。

何と言ってもやはりジェットコースター。

遊園地がではなく、俺はアイツが嫌いなのだ。

なんで人はあんな娯楽を開発するかね、あれはただの拷問でしかない。

アイアンメイデンの方が即死出来る分良い拷問具だ。

「楽しみだねっ！早く行こうよ！」

水野の号令のもと、地獄へと突入した俺達。

ああ、気が乗らん。

そんな俺の気も知らないで微笑んでいる泉が憎たらしいが、もう諦めよう。

ここまで来てしまつては後戻りは出来んのだ。

「やっぱり最初はアレでしょ！」

そう言つて指を指した方を見ると、俺は泣きそうになつてしまつた。

水野が指定したソレは、見事にジェットコースターだったのだ。

なんと！！まさかいきなりそいつを選ぶとは！！

や、やるな水野。

いや、今はそんな事を考えている場合ではない。

何とかこの危機を回避せねば！

「俺のど乾いたからさ、なんかジュース買ってくるわ。みんな何がいい？」

そう言って俺は、着々と作戦を練っていた。

この状況から脱出するための作戦を。

まあ泉が『俺はテキーラしか呑まん』なぞとほざいているが、あい



つはそこらの泥水を汲んできてやればいいだろう。

「私はお茶かなんかでいいよ」

「俺はテキーラかウイスキーだ」

OK、お茶とそこらの工業廃水だな。

あとは妃奈……………。

「私はついて行くからそこで選ぶ」

待て待て、なんで来るんだよ。

せつかく何だからみんなと親睦でも深めとけよ。

工業廃水飲んでのたうち回る予定の男でもさ。

「いや大丈夫だって。すぐそこに自販機あったし、ささっと行ってくればいいだろ」

なんとかここで制止せねば、俺の作戦が打ち切りになってしまう。

「むう……。……分かった……」

案外素直に納得してくれたな。

まあこちらとしては都合がいいので、小走りでその場を離れさせてもらった。

当然そちらに自販機などない。

俺は結構離れた所にあるベンチに腰掛け、大きくため息をついた。

次は作戦の第二段階だな。

とりあえず

「迷った、先に乗ってきてくれ」とでもメールして、あとは時間を見計らってまた合流するか。

いや待てよ、あいつらがそんな簡単に合意しては……………。

「こんな所でなにしてるの？ 柊君」

突然斜め後方から声がしたと思うと俺の首に腕が回され、ヘッドロックスを決められた。

「ま、待て妃奈！！話せば解る！！」

俺のセリフは聞いたはずだが、ヘッドロックは続行された。

「ジューズ買いに行つたんじゃないけ？こんな所で何してるのかなあ？」

それは俺が聞きたい。

何故妃奈がこんな所にいるんだ？

水野達とジェットコースターに乗るはずでは？

「妃奈、どうしてここが分かったんだ？」

ヘッドロックは冗談の域から少し飛び出ていたが、ボディタッチだと思えばまだ耐えられる。

「柊君の後をつけてきたの。様子がおかしかったから」

そう言って腕に込められる力が増した。

「わかったから………！この腕を離してくれ！」

しかし俺の要望にこたえる気がないらしく、ヘッドロックはさらに激しさを増していく。

これはもはや、

「頭が胸に当たってて超ヤバいんですけど」の範疇ではない。

首が鉄製のベンチに押し付けられゴリゴリと音をたてている上に、妃奈の細い腕が俺の首にめり込んでいるのだ。

これ以上は俺のHPに関わる。

「いかん………！人の首は……取れやすいんだ！！も、もげる………！！！」

俺の悲痛な叫びを聞いてか、妃奈は腕の力を抜いた。

まだ首に巻きついてるのが気になる。

「沙樹ちゃん達には先に乗ってもらってるから、私たちも少し遊んでから合流しようよ」

俺は快く快諾し、近くのコーヒークップへと歩みを進めた。

それから本当に遊び回った。

コーヒークップでベイブレードのごとく高速回転し、メリーゴーランドではクツチャケツチャにも引けを取らない見事な騎乗を見せてやった。

そして遊び疲れ、観覧車に乗り込んだ直後にやっと気づく事が出来た。

「あ……泉と水野、どうしてるだろ……………」

妃奈も口をポカンと開けている所を見ると、すっかり忘れていたんだろう。

慌ててケータイを確認してみると、電話がかかりまくっていた。

「柊君、電話とメールの合計いくら？」

「ざっと1000弱だな」

「勝った。私130だもん」

そんな勘定をしている場合でもないと思うが、そういうちょっとお茶目なところは嫌いでないな。

太陽はもう朱く染まり、今から合流してもすることがないのは明らかだった。

だからこそ諦めがつきやすかったのかもしれないな。

「でも久し振りだね、2人つきりでこんなに遊んだの」

だから俺にはそんな昔のコト記憶するようなハイテク機能は持っていないと言っているだろう。

マイクロチップでも用意して俺の頭に埋め込めるんだな。

抵抗するけど。



その後観覧車を降り、水野達と合流した。

本日の件は後日埋め合わせをすることで不問となった。

そして翌日。

「よし、では埋め合わせといくか」

……なあ泉、お前の第一声はいつも俺を不愉快にさせるとは、俺の  
思い過ごしか？

「そうだな、最初はメイド服着て校内を徘徊してもらおうと思った  
が、素人には可哀想だから、全裸でブリッジしながらグラウンドを  
全力疾走しろ」

ははは、そろそろ殺して良いか？

「そんな冗談はさて置いて……………よし！オタクデビューしろ！」

お前の眼が本気と書いてマジなのは判ったが、なぜそうなる？

と、ここで説明しよう！！

泉 涼太とは、割とチャラチャラした服装や顔からは想像出来ない程オタクなのだ！！

その名は業界でもかなり有名で、『夢幻の泉』や、『涼の名を継ぐ者』などと持て囃されているらしい！！

説明終了……………。

「今度俺の行き着けのメイド喫茶がさ、10周年記念を迎えるんだ。

そのパーティーに招待してやろう。そしてそれを機に、お前もオタクとして生きてゆくのだ！！先ずは二次元を極め、次に三次元だ！！そうだ！！お前を俺の弟子にしてやろう！！お前は見込みがある！！そして俺の元で修行すれば、必ずや名を残すことが出来る！！」

ハアハアと荒い息づかいをするなら最初からそんな饒舌はよすんだな。

残念ながら俺の鼓膜は、貴様のその演説を全て弾いたぜ。

それから周りの視線にも気を配れ。

今の演説は、俺たちを哀れみの眼差しで見つめているクラスメートたちにまる聞こえだぞ。

俺は泉のみぞおちに飛燕連脚をぶち込み、昼休みの散歩に行くことにした。

今や散歩は俺の日課だ。

散歩、ではないかもしれないが。

「よう、こんな所にいたのか」

俺は校内や校庭、今のように屋上に来たりもする。

「なに？もしかしてあんたストーカー？」

俺が行く先々にはいつも何故か西園寺がおり、二人で他愛もない会話をするのが多分俺の日課。

「西園寺が先に来てるだけだ。なんでいつも会っただろうな」

最初の頃はしょっちゅう手刀とか肘うちを喰らったが、今はそれも無くなった。

それに不機嫌の法則もあまりアテにはならないらしい。

最近の西園寺はそんな感じじゃないからな。

「ホントに偶然なの？わざと会いに来てるんじゃないでしょうね」

西園寺の俺を見る目はいつも冷たい。

コイツもこんなに怒りっぽくなければ可愛いはずなのに。

泉はこういうのを『シンデレ』と呼んでいたな。

俺にはツンの部分しか見せないが。

「西園寺がもう少し女の子っぽかったら会いに来てたかもしれないけど……………なあ」

西園寺は俺に、『殺すぞ』と言わんばかりの睨みをくれた。

どうもありがとう。

ごちそうさまです。

「俺の好みは女の子っぽいとかそんなじゃないけど、やっぱりそ  
うちの方がみんなにウケはいいぜ。男子の俺が言っんだから信じる  
よ」

西園寺は『殺すぞ』から『痛めつけてから殺してやる』の目つきに  
変わり、プイとそっぽを向いてしまった。

「そんなの分かってるわよ。でも、ありのままの自分を変えてまで  
他人のご機嫌をとるのがそんなに大事なの？」

なんか初めて会話らしい会話をした気がするな。

「今の西園寺がりのままなら、変わる必要はないよ。俺はそのありのままが嫌いじゃないしさ」

すると西園寺は、一度こちらをチラッと見て、またそっぽを向いてしまった。

それから何も話すことはなく、気まずくもなく、ただ時間が過ぎていった。

やがて昼休みの終了を告げる鐘が鳴り、何も言わないまま屋上のドアを開いた。

「なあ、西園寺…」

俺の三步程前を歩いている黒髪美人は、突然歩くのを止めた。

「……………桜でいい」

振り向きもせずポツリと呟き、かつてないスピードで走り出した。

置いてけぼりを喰らった俺は、立ち尽くす以外にする事が無かった。

どういう意味か教えて欲しいぜよ。

そんな事は気にも止めず、俺は教室へと帰った。

しかし西園寺の態度はその日を境に急変した。

次の日の、昼休み。

「あ、また会っ……………」



中庭で西園寺を発見し足繁く歩み寄った俺だが、目にも止まらぬ早さで撲殺されてしまった。

その次の日、昼休み。

背後からバレないように近づいたのに、何故かバレて蹴りを喰らった。

しかもとっても大事な所に。

その次の次の日、昼休み。

もはや西園寺を人間扱いしてない俺は、またもや背後から襲いかかった。

変な意味ではなく、俺の持てる力を全て使いヤツを殺しにいったのだ。

しかしながら、アイツは鬼か？

ボコボコにされダウンした俺に、馬乗りになりながら顔面殴打を続けるとは。

結局なんの接触も出来なかった俺は、妃奈に相談してみた。

すると妃奈は快く相談に乗ってくれ、こう提案した。

『私がついていくから、一人で逢っちゃダメ』

何故かは判らんが、やけに真剣な顔だった。

決行は昼休み、どこにいるかは謎に包まれているものの、しゅっちゅっ会っつので問題なからう。

そして昼休み。

妃奈と一緒に西園寺のもとへと向かった。

「本当に西園寺さんのいる場所が分かるの？」

「ああ、いつも同じ場所で会うんだ。気が合うんだろうな」

ホントなんでいつも会うんだろ。

気が合っていれば殴られはしないと思うんだがなあ。

ま、そんなわけで俺たちは屋上に向かった。

俺の気分が屋上だったからな。

ガチャリ

屋上への扉を開くと、案の定西園寺はいた。

「西園寺、話が……」

柵に突っ伏していた西園寺が振り返り、音速の拳が視界を奪った。

とりあえず一撃。

残念だな西園寺、俺は顔面パンチの一発や二発ではひるまんよ。

「さ、西園寺さんっ！落ち着いてっ！」

西園寺は妃奈の姿を確認すると、少しおとなしくなったようだ。

「神谷さん……………」？」

「西園寺さん、柊君の話を聞いてあげてくれないかな？」

よし！いい調子だ。

「……………神谷さん」

西園寺はファイティングポーズを解き、静かになった。

「西園寺……………俺お前の気に障る事したか？」

「……………してない」

「じゃあなんで俺を避けるんだ？」

お前のパンチは強烈なんだぞ。

何度お花畑を目撃したか解りやしねえ。

「別に避けてなんか……」

「避けてるだろ」

その時俺は、信じられないものを見た。

西園寺がうつむき、今にも逃げ出したそうな表情をしている。

「……ねえ柊君、西園寺さんと二人で話をさせてもらえないかな？」

何を言い出すかと思えばそんな事か。

もともと妃奈には仲立ちのために来てもらったんだ。

俺が邪魔ならさっさと消えよう。

妃奈に後を頼み、俺は屋上の扉から出た。

そして数十分後、妃奈だけが出てきた。

「で、どうだった？機嫌直ってそうか？」

「むっ……っ！柊君が悪いっ！」

獲物を狙う獣のような目つきで俺を睨んでいるが……俺が悪いの

か？

「……桜ちゃんの所に行つてあげて。やさしくしてあげなきゃダメだよ、桜ちゃんも女の子なんだから」

俺はふと、ライオンはメスが狩りをするなあ〜と思った。

妃奈はそれだけ言つとさっさと帰つてしまった。

仕方なく屋上に戻ると、隅っこで佇んでいる西園寺を発見した。

殴られないように警戒しつつ、接近する俺。

「…………殴らないわよ」

そう言われたら警戒出来んではないか。



「……私がこの前言った事覚えてる？」

はて、覚えるような事は言われた記憶がないな。

「んー、地獄の業火で焼いてやる！ぐらいしか……」

「ばかつ！」

ばかは非道いな、この俺が折角覚えてるのに。

「さっきね、妃奈と話してたの。私がして欲しい事は何かって……結局自分でも解らなかったから、私は私の気持ちを言う」

ほう、それは良きことかな。

俺にはお前の気持ちがさっぱりだからな。

「あんた、これから私のコト桜って呼びなさい。私もあんたのコト桜一って呼ぶから」

なあ西園寺……気持ちを言ってくれるのは有り難いが、命令口調なのは何故だ？

そしてそれがもはや決定事項になったような顔をしているのは何故だ？

いや、もう聞かないでおう。

それがお前のありのままなもん。

「でもさ西園寺、それってそんなに……」

俺が話している途中、西園寺の姿が消えた。

同時に腹部に走る激痛。

西園寺が俺のみぞおちに魔神拳・竜牙を放っていた。

そのまま後ろに倒れてしまい、仰向けになってしまった。

「桜と呼びなさい」

まるで女王だな。

マゾなら泣いて喜ぶぞ。

俺は違うがな。

「ぐふう！あ……相変わらず……いいパンチだ……」

もうそのまま永眠したいほど痛かった。

思わず血を吐きそうになったからな。

「とにかく！私のコトはこれから桜と呼びなさいっ！じゃないと殺すわよ！」

もう死にそうだよ……。

西園…いや、桜はそのまま出て行ってしまった。

おかしいな、ここで親密な関係になるのが定番だろう。

まあいいか……どうやら俺が西園寺と呼ばない限り殴ってこないみたいだし。

にしてももう少しアフターケアが必要だな。

てゆうかなんで妃奈怒ってたんだ？

### 三話 正義の奉仕者

その後、俺と桜の仲は急接近………とはいかなかった。

俺が間違つて西園寺とでも呼ばうものなら、コンパスやハサミといった殺傷能力の極めて高い物を投げつけて来るのだ。

これはもはや罪だぞ？

そしてそんなある日。

「おい柊、お前今度の休日空けとけ。てゆうかどうせヒマなんだろう？」

俺は泉を殴ろうとする拳を制しながら聞いてやった。

聞けばその休日、とうとう埋め合わせの日らしい。

確かあいつ、アブナイ事言ってた気がするんだが……。

まあどうせくだらない事だろうし、忘れるか。

しかし時が流れるのは意外と早く、遂に埋め合わせ当日になってしまった。

「よし、着いたぞ」

泉は腰に手を当て、高らかに宣言した。

そこは駅前の駅から六つほど離れた、俺にとっては未開拓の土地だった。

周囲にはメイドや半獣人（頭部にケモノの耳を装着している超獣だ）がうろつき、一般人かと思いきや手にしているカバンに何かのキラがプリントされている。

そう、ここが泉の縄張り、オタクのメッカだ。

「では早速、例の場所へ向かおうか」

泉の後を追いかけて、謎の土地を開拓していった。

泉が指定したメイド喫茶とやらはそう遠くなく、五分ほどで到着した。

道すがらの会話に困ったものだ。

やれバーサーカーは命持ちすぎだとか、葛木は手に強化かけるとセイバー超えるとか、話に付いて行けん。

それはともかく、カランという喫茶店らしい音を鳴らして入店する俺と泉。

だが俺は見逃さなかった。

店名が

「喫茶じゃすていす」だった事を。

「お帰りなさいませ、御主人様」

店内に入った途端、一列に並びかしまっているメイドさん。

どのメイドさんも美人であるのは、店内に客が充満している事と深い関係があるに違いない。

「あつ、涼様だ〜〜！」

奥から小さなメイドさんが現れ、パタパタと駆け寄ってきた。

「来てくれたんですねっ、涼様」

「ああ、この店が心配だね。みんなは奥かい？」



「はいっ！みんな涼様のお歸りを待っていましたっ！それで……となりのカワイイ男の子は？」

それは俺のコトか……。

ぬう、自分より背の低い娘にカワイイなどと……。

何たる屈辱。

「こつちは俺の親友、柊一だ。コイツなら危機を救ってくれるに違いない」

お前と親友になった覚えは無いがな。

「臯月 柊一です。どうも」

「はーい、柊様ですね」

柊様と名付けられた俺は、泉と共に喫茶店の奥、裏方の方へ案内さ

れた。

案内された部屋にはまた新たなメイドさんが4人もおり、どれもみな美人さんである。

「じゃあみんな、まずは自己紹介から」

泉はそう言うとなかなかの広さを誇るこの部屋で自己紹介が行われた。

最初は案内してくれたあの女性だ。

「アリスです。ちなみに年齢はヒ・ミ・ツ」

別に聞いてねえよ。

「イリスです。お見知り置きを」

おお、今度はマジのメイドさんだ。

清楚な感じの黒髪ロング。

「ハリス、同じく年齢は言えん」

ついお前はメイドか？と聞きたくなるような切れ目の女性。

桜を見てるようだ。

「……………マリス」

……………って終わりかい。

えらく簡潔だなおい。

「ユリスですわ。期待しておりましてよ、柊」  
金髪カールのクルクルだ。

まさに西洋的だな。

「では、柊に来てもらったワケを話そう」

そうだ、俺はまだ何故ここにいるかを知らないんだ。

「実はここ最近、メイド狩りというのが問題になっていてな。柊にはそれを解決して貰いたい。作戦内容や、解らない事があつたらイリスに聞いてくれ。俺は情報収集に行ってくる」

そう言つて、泉はまたどこかへ消えてしまった。

一人にしないでくれよ、不安なんだから。

「では、作戦内容をご説明致します」

黒髪美人さん（イリスだっけ？）が一步前に出てきた。

「私たちにはメイドを派遣し、御主人様のお好きな場所で御奉仕させていただくシステムがございます。そしてそのシステムを利用したメイド狩りが、最近問題になっているのです」

「それでその……メイド狩りって何ですか？」

恐る恐る問いかけてみた。

「メイド狩りっていうのは、メイドを派遣させて、エッチなコトしたりする事なんですよ。最悪この業界から消えちゃう娘もいるんですから」

これにはアリス（？）が答えてくれた。

「早い話が、そのメイド狩りをしている者達を、お前を囿にして炙り出そうというワケだ」

なるほど……ってちょっと待て。

何故俺がそんな犯罪ギリギリな事件に首を突っ込まねばならんだ。

「メイド狩りは本格的な捜査が必要な為、警察も動いてはくれません。そこで、柊様と涼太様に摘発をお願いしたいのです」

イリスさんは仰々しく頭を下げ、お願いしてきた。

あのメイドとは思えん女性ならともかく、こんなか弱い人に（予想）頭を下げられてはな。

「……別に引き受けてもいいですが、具体的にはどうするんですか？」

パツと頭を上げたイリスさんは、ひまわりのような笑顔を向けてくれた。

「柊様に女装していただき、その者達に近寄ります。不埒な狼藉を働かれた瞬間、その者達をひっ捕らえる。それだけでございます」

わあ、この人簡単に言うやあ。

疑問1 俺が女装してバレないとも思ってるのか？

疑問2 俺、かなり危険じゃないか？

疑問3 あの切れ目の女（名前何だっけ？）にやらせればいい。

疑問4 何故、泉が動かない？

疑問5 俺にコスプレの趣味はない。断じてない。

以上が俺の気の進まない理由だ。

疑問5についてはあくまで俺の意見だがな。

「あのですね、イリスさん」

俺が諭すような口調で喋り出すと、イリスさんは目をまん丸にした。

「百歩譲って俺がバレずに接近出来たとしても、確実にその相手を捕獲する保障は何処にあるんです？一度バレたら、同じ策は使えないですよ？」

「変装については問題ありません。柊様は中性的な顔つきですので、何とかあります」

なるほど、問題が一つ解決という訳だ。

にしても俺は中性的な顔つきなのか？

それに、いくら中性的だからといって完璧な女装をするなどメチャ困難だろう。

「涼太様から、『柊には武に優れ、容姿も端麗という最強の友人がいる』と聞いていますか？」

……なるほど、そういう事か。



泉よ、貴様は俺が思っていた以上に下郎のようだ。

俺だけに危険があるならまだいい。

だが、あいつに危険が迫るのはいただけない。

「それは俺の一存で決めれる事じゃない。場合によってはこの件から手を引くかもしれない。一度その友人に聞いてみます」

「では、表で涼太様をお待ちになられては如何ですか？出来る限りのお持て成しを致しますので」

俺は半強制的にイリスさんに連行されていった。

向かう場所はもちろん、今現在客の充満している店内だ。

カウンター席に案内された俺は、心細さに堪え忍びつつひっそりと座っていた。

「御注文をお伺いしてもよろしいですか？」

いきなりのオーダーに驚いてビクついてしまう俺。

「そ、それじゃあ、何か適当に持ってきて下さい……………」

メニューに目を通せばほとんどの料理に『萌え萌え』という単語が引っ付いていたので、選ぶ気になれなかった。

「おまかせですね。ただいまお持ちいたしますう」

軽やかに去っていったその女性は、数分後に帰ってきた。

「お待ちいたしました。『萌え萌え夢卵のオムライス ドリンク付』になります」

その女性が持っているトレイにはケチャップとドリンク。

普通ケチャップなんてのは最初から乗っかってるモンだろ。

それに何故ストローが二本？

「私『まりあ』っていいます。ご主人様のお名前は？」

「あつ、皐月っていいます……………」

トレイをカウンターに置いた後も居座り続けたその女性、まりあは、いきなりケチャップを握りオムライスにグニグニと文字を描き始めた。

さ……………っ…？

ああ、『さつき』と描きたいのか。

最後の『き』がかなりいびつだ。

「はいっ！完成です！後はここに萌え萌えパワーを……………」

言い終わらない内にその文字をスプーンで混ぜまくってやった。

当然文字は薄く引き伸ばされ、原型を保っていない。

「で、でわっ！一緒にこのドリンクを仲良く……………」

ストローの封を開けようとするメイドよりも早く、ドリンクを一気に飲み干してやった。

残念だったな、メイドさん。

俺にメイド属性が無い事を見極める目と、客よりも早く動く素早さが、キミには足りなかったのさ。

火中天津甘栗券でも会得する事だ。

「で、ではごゆっくり……………」

すぐごと下がっていくメイドを尻目にかけてつつ、オムライスを切り崩ししにかかった。

全て食べ終わり、それから五分ほどで泉が帰還した。

とりあえず店を出てブラブラ歩きながら話をしていった。

「お前……桜を利用するつもり何だろう？」

「おつ、話が早いな。お前を助っ人にした理由の大部分が、それだ」

俺は、深くため息をついた。

「桜に話を持ちかけるのも大変だし、もしも桜が危なくなったらどうするんだ？」

「そのためにも柊がいるんじゃないか。西園寺を導き、時には盾になる。言うなればナイトだ」

ああそうかい。

桜のための捨て駒になれと。

俺が身を削れば万事丸く収まる、と。

これが埋め合わせか。

俺と妃奈の仕出かした事はそんなに重罪なのか。

いや待てよ？

桜は尋常ならざる強さを持ち合わせた身。

当然俺の守護は必要無く、俺は桜をその気にさせるだけでいい訳だ。

一肌……………脱ぐか。

翌日……………。

昼休みに桜と遭遇した俺は、体育館裏でこれまでの経緯を話した。

先ずは遊園地の事を話し、そこから埋め合わせに付き合わされた今の事…。

途中で不機嫌そうな顔になったが、鉄拳を繰り出すわけでもなく最後まで聞いてくれた。

「なるほどね……話はだいたい分かったわ」

諭すように口を開く桜。

「泉君の友達を助ければいいんでしょう？女の子に悪さするなんて許せないし、私が懲らしめてやるわ」

拳を前に突き出し瞳が爛々と輝いてはいるが、手加減を忘れずにな。

お前の拳は人を殺めかねん。

「当然、あんたはは私にお礼の一つでもしてくれるんでしょうね？」

おいおい、最近埋め合わせやらお礼やらが多いな、俺。

「泉に頼まれた事だけ……よし、礼の一つはしよう。一つだがな」

それを聞いた桜は何やら不敵に笑った。

ああ、何か企んでるな……。

「明後日くらいに祝日があったろ？その日に作戦決行だ。ちゃんと覚えといてくれよ」

「分かってるわよ。それよりあんたこそ、途中で逃げ出したりしないだよ」

俺は男だし、森で鍛えた超自然的武術を会得している。

背丈が同じくらいの仔熊なら互角に戦えるぜ。

それに何より、変態共に臆さぬ勇氣がある。

これも野生の中で手に入れた経験の一つだ。

人間相手にボコボコにされたのはお前が初めてだからな。

お前との戦闘だけは未だに怖い。



そんなわけで無事桜に話をつけた俺は、次に泉の所に向かった。

奴には説明してもらいたい事が山ほどある。

教室に戻ると、やっぱり奴は居た。

「おい、泉」

机に突っ伏している泉をたたき起こす。

「ん、柊か……。どうだ、西園寺は説得出来たか？」

「もちろんだ。それより泉、問題が一つある。場合によっては作戦は失敗するし、俺とお前は命を落としかねん」

すると泉は首を傾げ、何の事が分からんような顔をした。

すでに対策があるのか、それともただの馬鹿なのか。

その答えを求めるように俺は恐る恐る聞いてみた。

「……………西園寺 桜に、メイド服を着させるつもりか？」

泉は口を大きく開き、目を二、三度パチパチとまばたいた。

「俺はメイド関係の事は一切話してないし、ただ不埒な狼藉を働く変態を痛めつけてくれて頼んだだけだ。あいつが素直にコスプレしてくれるとは思えん」

「……………西園寺に関する事は全て柊に一任する」

それだけ言つと、そそくさと教室から出て行つた。

なるほど、ノープランか。

まあいいさ。

俺も女装するらしいし、桜も我慢してくれるだろ。

そして時は経ち、とうとう作戦決行当日となつてしまった。

泉は先にあの喫茶店に行つていて、今は桜と二人で電車の中だ。

桜はオシャレな格好をしているものの、やはり戦闘を考慮してか動きやすい服装になっている。

こうして黙って大人しくしていれば見とれてやってもいいものを。

電車は例の場所に停車し、俺と桜はワンダーランドに足をつけた。

「こ、ここは………？」

目をまん丸にしている桜の目線の先には、魔法のステッキにネコミミの女の子。

やっぱり最初の反応はこんなもんだよな、普通は。

「メイドや魔法使いは無視してくれ。泉から地図もらってるから、早く行こう」

桜はコクコクと頷き、俺と一緒に不思議の国の猛者共の群れへと突入した。

俺もこの場所にはなかなか馴染めず、早足で目的地に向かう。

「……やっぱり男って、こういうの好きなんだ……」

桜が目の前をよぎるゴシックさんを見ながら呟いた。

「それは違つぞ桜。これらは一部の男の趣味であつて、男子全般の好みではない」

これだけは訂正してもらわんな。

俺の知る限りここを住処にしているのは泉だけだ。

「へえ……。じゃああのメイド、どう思う？」

桜が少し遠くにいるメイドさんを指差した。

「メイド衣装は可愛いと思うぞ。でも、だからといって『萌え』の意味は分らん。似合ってたならそれはそれで良いもんだろ？」

ちなみにこれは、恐らく世間一般の意見だ。

正直、もし彼女にネコのミミでも生えていようものならば俺は、確実にそのミミを引きちぎるだろう。

引きちぎった後シュレッダーにかけ、燃やし尽くしてから地下に埋蔵してやる。

そんなもんだ。

「似合ってたか……か………」

桜は意味ありげな顔をしている。

出来ればメイド服は気に入って欲しいものだな。

後で俺が殴られる可能性やボコボコレベルに大きく関わるからな。

そんな感じで足を進めたせいか、割と早く喫茶

「じゃすていす」に到着した。

集合場所を見てまたキョトンとする桜を横目に、一度来ている俺は扉を開いた。

カランとベルの音がして、やはりと言うべきかあの洗礼を受けた。

「お帰りなさいませ　！ご主人様　！！」

一斉にしゃちほこばるメイドの群れに、桜は一段と驚いた。

こんな桜を見る事が出来るのなら、ここを集合場所にしたのは正解だったかもな。

初々しい桜もこれはこれでよろしい。

「あ、あのー……泉さんはどちらに………？」

一列に並ぶメイドさんに聞いてみたが、どれもみな分からないようだ。

「……………こつち」

奥で手招きをしている少女が、そう呟いた。

もちろんメイドさんだ。

確か、あの五人組の内の一人だな。

名前はナントカリスに違いない。

俺と桜はそのちっこい少女について行つた。

案内されたのは見覚えのある、あのただっ広い部屋だった。

やはりあのメイド一族は勢揃いしている。

そして少し離れた所で悠々とイスに腰掛けている

。

「ご足労感謝する、我らが救世主」

総司令官のごとくふんぞり返っている泉の姿があった。

「では早速西園寺には作戦内容の説明を、柊にはメイクを」

泉の一言であの金髪カールが俺の腕をつかみ、またさらに奥の部屋へと連行された。

「フフツ、メイクのしがいがありますわ」

ああ、そうか……。

今から女装するんだな、俺……………。

しかもメイドに……………。

どうせならあの清楚メイドさんにメイクして欲しかった気もするが、それだと桜に悪いな。

大きな化粧台に座らされ、鮮やかな手つきで俺を女へと変換していく金髪カールは、終始真顔だった。

その間に、作戦の最終確認を行っていた。

メイドに扮した俺と桜で変態をおびき出し、即座にどつき回す。

この手の奴らは一度ボコにされると、周りの奴らも手を出しにくくなるらしいし、要は最初が肝心だ。

戦力に関しては問題ない。

俺は一応常人よりは武芸に秀でているし、桜に至っては真剣に武術を学んだリアルな武人だ。

俺は兎も角、桜に対抗出来る人材などそうそう居はしないだろ。

ま、普通に戦えばの話だけど。

そんなこんなで割と女寄りな顔へとモシヤスした俺は、次に衣装を借り受けた。

当たり前なのだが、メイド服だ。

まさかこんなに近くでお目にかかるとはな。

全然嬉しくないけど。

メイド装束とカツラを片手に、俺は更衣室へと向かった。

更衣室と言っても、試着室のような個室が二つ並んだ簡易だが。

俺とは違う方向から、桜もやって来た。

どうやら説明は済んだようだな。

俺の顔を見るなり急に笑い出したが、そこは気にせず速やかに更衣室へと入室した。



更衣室は二つピッタリと並んでいるワケで、壁の向こうは早ければ私服、グッドタイミングなら裸、遅ければメイド服の桜がいるんだな。

「柊一、覗いたら殺すから」

誰が貴様の裸なぞ見たがるか。

桜の裸を見たまでにはいいが、その後目に映るのはお花畑と死んだお袋だ。

さすがにそれは切ないだろ。

でも、隣でゴソゴソと音をたてるのは止めていただきたい。何かと気になる。

俺は着ていた衣服を剥ぎ取り、メイド服に目をやる。

「……………桜」

俺は視線を動かさず、手も動かさないまま呟いた。

「桜はこの仕事、嫌じゃないのか……？」

「うーん、メイドになれって聞いた時はびっくりしたけど、今は別に嫌じゃないわよ」

俺が聞きたいのはそんなコトじゃないんだがな。

「そうじゃなくて、もしかしたら危険な目に遭うかもしれないんだぞ？当然相手は男だろうし」

それを聞いた桜は、フンと鼻で笑った。

「私はそこの男に負ける程弱くないわよ。それはあんたが一番知ってるでしょ？」

ま、そりゃそうだけだな。

でも俺はどうも引つかかるんだ。

あの時の妃奈の言葉

（桜も女の子……か）

俺はメイド服に手をかけ、上からすっぽりと被った。

「……もし怖くなったりしたら迷わず俺の後ろに隠れるよ。俺の出来る限り守ってやる。俺だって盾にぐらいはなれるからな。ま、そんなコトは万に一つもないのかもしれないけど」

桜の手が、ピタリと止まったようだ。

今まで聞こえていたゴソゴソという音が消え失せている。

「勝手に桜を巻き込んだのは俺達だし、桜にはケガとか怖い思いはさせたくない。これは俺の義務だからな、拒否すんなよ」

俺が話し終わると同時に、またゴソゴソと音が聞こえてきた。

「……わ、私だって格闘技やってるんだから、素人のあんた一人くらい守ってみせるわよっ！拒否なんかしたら殴るからねっ！」

「……果てしなく矛盾してるとは思うが、その言葉はありがたく受け取っとくよ」

メイド服を完全に着用した俺は仕上げにカツラを装着し、扉を開いた。

同時に桜も姿を現した。

完全なメイド姿で。

情けないことに俺は、桜のメイド姿に見とれてしまった。

「あ、あんまりジロジロ見ないでよっ！」

桜はそう言っているが、コレばかりは致し方ない。

頭の両サイドで束ねられている黒髪。

リボンでそれぞれくくっているのが可愛いカンペキなツインテール。

ロングスカートの下にガーターベルトが着用されていることを切に願う俺だが、あまりジロジロみるのはやっぱりよそう。

今殴られてHPを削っては、今後身が持たない。

それに今桜はハイヒールだ。

かかとを使った蹴りでも喰らったりしたら……………。

あの世逝きだね。

「かなり似合ってるぞ。こんなに可愛いメイドがいるなら、メイド狩りをしようと思う変態の気持ちも分からんでもないな」

ねぎらいの言葉をかけた俺は、あのメイド一族の元へと戻る。

「……………似合ってる……………」

「おーい、桜。ボーっとしてたら放っていくぞ」

俺が歩き出したのに石化している桜を呼ぶと、キッとこちらを向いた。

「ちょ…待ちなさいよっ！」

桜は少し笑いながら走り寄ってきた。

慣れないハイヒールに苦戦しつつも必死に走っている。

### 三話 正義の奉仕者（後書き）

みなさん、初めまして。毎回後書きを書こうと意気込んでいるものの、何故かいつも忘れてしまう今日この頃。さて、初めての後書きということなので、まずお伝えしたい事が一つあるのです。お気づきの方もいるとは思いますが、この小説には多々某RPGの技が出現致します。大抵のキャラクターが一番最初に覚えてる、アレですね。まあ他にも幾つか登場しますが、挙げていてはキリがないのでこのあたりにします。この技、何かと桜が使用していますが、正直一部無理がありました。例えば剛・魔神剣。いくら魔神の技だといっても、剣はマズかった……。普通に考えれば魔神拳自体不可能ですがね。と、残念ながら文字数超過のため、この続きはまた次回！

#### 四話 乱心の奉仕者

「よしっ！見た目はほとんど女性に化けたし、後は口調と動作だけだな」

泉は感嘆か、それとも馬鹿にしているのか分からない笑みで俺を迎えた。

桜は桜で仏頂面をしているらしい俺を見ては大爆笑だ。

どうもメイド服との組み合わせがツボにはまったらしいな。

先ほど鏡で俺のツラを拝見したが、まあ……女に見えなくも……ないかな？といった程度である。

あの金髪娘のメイク技術には目を見張るものがある。

接客に関しては桜に任せるし、俺はただの戦闘員だからな。

出会った瞬間殴りかからなければいいが、桜ならやりそうだ。

俺はそんな不安を抱えながらメイドの基本動作を教育させられていた。

桜はかなり真面目に聞いているようだが、殺る……いや、やる気になったのだろうか。

一通りメイドの動きを叩き込まれた俺と桜は、泉やメイドレンジャーズと休憩を兼ねた雑談を楽しんでいた。

俺がメイド殺法を教えてくださいってみると、何故か桜の瞳が異様に輝いたのを覚えている。

それから約20分ぐらい経ち、部屋に電話の呼び出し音が鳴り響いた。

速やかに電話にでる清楚メイドさん。

ハイ、ハイ、と応答している清楚メイドさんは、用件が済んだのか電話を切った。

「ご指名、入りました。可愛いメイドを数人回して欲しいとのことです。十中八九、敵部隊と思われます」

どうやら変態さんがご注文のようだな。

遂に俺たちの出番らしい。

しかし出前感覚とはナメたマネをしてくれる。

戦闘準備が整った今電話してしまった自らの運命を嘆き、挑発的行動をとったことを後悔するがいい。

不吉を届けてやるぜ……！



「ふふ……。どうやら久々に、私の禁じ手を解放する時が来たようね……。闇の炎に抱かれて消える……。！」

俺以上に背後からどす黒い殺気を放出している桜は、妙に殺る気だ。

しかし心配だな、この勢いが続けばいいんだが。

「では、これより『メイド狩り殲滅作戦』を決行するっ！柊と西園寺は最前線へ！後に後詰めが到着する予定だから、敵部隊の足を止めてくれ！他のメイドは俺と諜報活動だ！」

意気込んで何処かへ走り去っていった泉は放っておき、清楚メイドさんに戦闘区域の座標を尋ねた。

一応口で教えてくれたが、ちゃんと小さな紙にメモした地図を渡してくれた。

これで準備は万端、いざ、出陣！

物凄い勢いで桜と飛び出し、先ず手渡された地図を見してみる。

残念ながら土地勘というものがなかったため、勢いだけで走り出すことは出来ない。

「よし、行くぞ、桜」

メイド服を着ているとは思えないほど真剣な面持ちで走り出す。

桜は無言で頷き静かに付いてくる。

そして順調に進むこと約十分、指定されたのは、何の変哲も無いカラオケボックスだった。

まあ、当然のごとく含まれている萌え要素を除けばの話だが。

「虎穴に入らずんば虎児を得ず。離れるなよ桜、こつから先は戦場だ」

桜は俺の隣で立ち止まり、一緒に入り口を凝視する。

「んなコト言われなくても判ってるわよ。柊一こそ足手まといになつたりしないですよ」

ふん、と不機嫌そうに鼻を鳴らし、仲良く足並みをそろえて虎穴へと突入した。

少し歩けばすぐに指定の部屋へとたどり着き、入室した。

意外と広いなというのが正直な感想だが、今はそんな場合ではない。

怪しまれないよう笑顔は絶やさず、標的を見据える。

人数は三人、言うまでもなく男。

イメージしていたオタクとは異なり、三人とも意外なまでに凡人その容姿をしている。

だが油断は禁物。

見た目だけで判断するワケにはいかない。

「桜……絶対に気付かれるなよ……先ずは演技に集中だ」

連中に気付かれないように隣にいる桜へと呟く。

桜は視線を動かさず、表情を強ばらせたままだ。

「だ、大丈夫よ、任せて……」

そんな事言われても、顔がひきつってるぞ。

いつもの人を威圧するような眼差しが消え失せているのは演技なのか素なのか。

どちらにしろ俺のする事は一つだ。

「あれ、ご主人様を前にして挨拶も無しかい？なんて躑のなっていメイドだ」

三人の内の一人、割と細身の俺が口を開いた。

「も、申し訳ありませんご主人様。馴れていないモノで……」

俺はすぐさまフォローし、桜に目配せをする。

ズバリ、辞儀の意。

素直に理解したらしい桜は、俺に合わせて頭を下げた。

なんて言うか、不快だ。

「ふう〜ん。ま、いつか。それはそれで」

男は品定めするように俺と桜を見た後、舌なめずりした。

うつ……この偽装パイオツを見るな！見るんじゃない！

「柊」……私ああいう目で见られるの、地獄的にム力つくんだけど……」

声を潜めて呟く桜。

その目には“殺害して良いかしら”という感情が溢れている。

「落ちて着け桜……今ここで暴れるのはダメだ。……少なくともアイツらが手を出すまでは……………」

確証もないまま手をあげれば作戦自体は成功するかも知れない。

だがそれは、メイド派遣システムの崩壊を意味する。

それだけで済めばまだいい方かも知れない。

ヘタに手を出して訴訟でも起こされてみる、俺たちは一方的に暴力を振るった野蛮人で、いくら人のためとは言え弁明の余地などない。

いくら俺でも少年院、いや、刑務所だけは勘弁だ。

「いつまでも突っ立ってないでさ、こっち来なよ。ご主人様に仕えるのがメイドだろ？」

こいつ……やっぱりとつき回したいが、今は耐えろよ俺。

取りあえず今は上手く立ち回らなければ。

細身の男は俺と桜を両隣に座らせ、その隣を挟むように二人の男が座った。

桜の隣に居るのは鋭い目つきをした男。

野生の勘が訴える私見だが、そいつはこの中で一番腕が立つだろう。

もしかしたら武術の心得でもあるのかもしれない。

対して俺の隣には、これまたおどした気の弱そうなヤツである。

少しくせつ毛の髪や年下のような童顔が、まさに弱々しい。

俺と桜は演技に徹し、好機を待った。

そろそろ我慢の限界とパルマフィオキーナを喰らわしかけたその時、奴らが動いた。

俺の左隣、細身の男が桜の隣に居る男に視線を送っている。

視線を送られた男は、俺の右隣の男に視線を返す。

視線を返された男はビクツとした後、ゆっくり立ち上がった。

「？」

桜は今のやり取りを見ていなかったのか、不思議そうな顔をする。

男は扉の前に仁王立ちし、動く気配が無い。

……なるほど、そういうコトか。

「さあて、もうかれこれ十分くらいお話したかな？仲良くなった所

で、お楽しみといきますか」

細身の男は、桜ではなく俺の肩に手を回してきた。

男とバレてないという確信と共に、何とも言えぬ危機感を感じた。

俺ではなく桜に、だ。

俺にこの軽口野郎ということは、桜はあの危険なヤツに襲われるハズ。

野郎に抱き寄せられるという猛烈な不快感を抑え、桜を見た。

やはりというべきか、両肩を掴まれて押し倒されている。

（よし！押し倒されれば正当防衛は成り立つ！今こそその人離れた鉄拳を見舞ってやれ！！）

俺の期待は桜に注ぎ込まれる。

次に見るのは動かなくなったサンドバックかと思いきや、これまたやはりというべきか、恐れていたコトが起きた。

「きゃ……！ちょ、離しなさいよ……！」

桜は両手首をガシツと固定され身動きが出来ない。

男は嫌がる桜の顔を見て楽しげにニヤリと笑った。

確かに桜は、技のキレも良ければ敵に対して躊躇うこともないだろう。

これまで制してきた試合も少ないと思う。

だが、それはあくまで試合での話。

恐らく桜には、試合で倒した敵はいても暴漢を倒した経験はない。

だから、こうして試合ではなく純粹な悪意と対面した時、躊躇ってしまう。

それに、こと“腕力”に関して上をいく男が相手なら恐怖からすぐんでしまうのは必定。

桜はもともと、好きで人を攻撃したりしない。

それは俺が一番解ってる。

そんな桜に今アイツを迎撃することなど、出来はしない。

即座に劣勢を感じた俺は、肩に回された腕を振り払い、桜を押し倒している男に殴りかかった。

真横から脇腹に向かったの真っ直ぐな拳。



男は危機を感じたのか、身を大きく後ろに引いた。

俺の拳は空を裂きソファアの背もたれに突き刺さった。

「……ふう、いきなり殴りかかるとは。お前、男だろ。見た目だけじゃ判らなかった」

男はもう一人の男と肩を並べ、俺たちを嘲笑うかのように笑みを浮かべた。

そんなモノは気にせず、桜に手を差し伸べた。

「大丈夫か、桜」

桜は俺の手を取り、立ち上がった。

「う、うん、倒されただけ……。でも………」

桜は胸の前で自分の手を握っている。

震えるような声といい潤んだ瞳といい、戦意が感じられない。

ちっ……これはヤバいな。

「こいつの話じゃイイ女とやり放題って聞いたが、こんな余興まで用意してるのか、普通」

ふてぶてしく隣の男を流し見た後、またこちらを睨みつけてきた。

「こ、こんなこと予想外に決まってるだろ……！……でもまあ、相手は女と男が一人ずつ……」

一瞬パニックったその男は、また桜を上から下まで舐め回すように眺める。

「その女とは後々楽しませてもらうとして、まずは野郎と遊ぶか……！」

鋭い目つきをした男は、躊躇もせず走り寄ってきた。

大きく振りかざした拳は、俺に向かって孤を描く！

俺は自身に伸びてくる拳を見て、確信した。

こいつは武術など会得していない。

多分運動神経だけでこれまでのケンカを乗り切ったのだろう、さっき俺が感じたのは絶対な自信から来る驕りだったのだ。

俺は棒のような腕を横から掴み、拳を止めた。

ギリギリと腕を上にあげ、睨んでやった。

「殴りかかれちゃこれは正当防衛だな……………！」

一応断っておくが、これはあくまで正当防衛であり、決してムカついたとかそんなんじゃない。

男は不満げな顔をつくり、舌打ちを打ちながら俺の腕を振り払った。

「普通掴めるモンじゃねえよな、拳つてのは。お前、何かやってるだろ」

その問いに答えるつもりは無かったが、拳を振り上げると同時に口も開いていた。

「一言言わせてもらうと、お前の動きは確実に野生の熊より遅い！」

そう、技に技術がなければ掴むも避けるも造作ないのだ。

ハラをスかせた熊に襲われてみる、睨まれるだけで足腰立たんぞ。

しかも鋭い爪は一撃で致命傷だ、そりゃイヤでも避けれるようになるさ。

「はあ？ 訳分からねえ……」

そんなモン分かってもらわなくて結構。

今は奴を殴り倒すだけ　　！

俺が突き出した拳を苦もなく手のひらで受け止める。

空いたもう一方の手で奴を制しにかかるが、やはり受け止められる。

こうなつては純粋な力比べ。

互いの力は拮抗しているように見えたが　　。

「ハッ！ おもしれーじゃん！！」

男は一瞬力を緩め、そのまま前につんのめりそうになる俺をぐるんと投げ飛ばした。

否、投げ飛ばしたというよりは引き倒したの方が正しいだろう、何しろ相手は力任せなのだから。

視界が回る時にあの細身の男は見えなかった。

どこかに逃げたのか隠れているのかは分からないが、変わりに不安

げな眼差しで立ち尽くしている桜が見えた。

「柊……！大丈夫！？」

「動くな！」

俺の怒号に驚いたのか、桜はビクツと手を引いた。

とは言えこのピンチ、どう乗り切ったものか。

今は組み合っているからいいが、振り払われようものなら即連続殴打だ。

長引けば長引くほど不利になるなら  
！

「っ！このっ！降りやがれ！」

思いつきり体をひねり、馬乗りになつて男をぶん投げる。

即座に立ち上がり、体勢を整える男と睨み合う。

？？なんだアイツ、やけににやけやがって。

「柊ー！後ろっ！」

桜の俺を呼ぶ声がして、振り向きざまに。

「ぐっ！……ああっ！？」

こっ、なんてゆうか、ガン！と鈍い痛みが後頭部を走った。

この状況で俺を殴るやつなんて、決まってる！

ちゃんと振り返ってみるとそこには武装している男が一人。

武装といってもマイクかなんかだろうが、これ以上ないというほどに頭に来た。

怒りの視線を送り、襲いかかってやろうと思ったがやはり止め、またあの男に向き直った。

今危険なのはやはりコイツで、一番最初に片付けるべきなのだ。

しかし、俺の考えは甘かったようだ。

男は一息で間合いを詰め、振り向いた時にはもう目前に居た。

今度は腹部に激しい痛み。

恐らくヤツの膝か拳が俺の腹に滑り込んだのだろう。

あまりの痛みからか足に力が入らず、その場で片膝をついた。

パタパタと慌てて駆け寄ってくる桜の足音が聞こえ、顔を上げる。

「しゅ、柊……！こ、の！よくもっ！」

怒りに身を任せ、桜が立ち上がる。

数歩引いたあの男に殴りかかるのだろうか、それはマズい。

桜が俺に向けたあの目、未だ恐怖が抜けていなかった。

それどころか手も足も震えていた。

あんな状態ではいくら桜と言えど、返り討ちになるのは目に見えている。

心の中で叫んでいる。

“よせ、戻れ”と。

どんなに叫ぼうともそれは言葉にならず、頭の中でぐるぐると回っている。

桜に手を伸ばすのが精一杯のアクションだが、それでは止められない。

何事かをわめきながら突進する桜は、それこそ儚い少女そのものだ。

今にも散りそうな儚いモノを連想させる。

どうしても止めなければならぬのに、体が動かない。

激しい腹痛のため？

いや、違う。

俺は少し安心しているんだ。

今の俺ではコイツを抑えられない、だから桜に任せてしまえ。

“俺じゃ力になれない”

“桜がやるしかない”

“桜は強いだろう”

そんな言い訳めいた思いが、俺の体を引き留めてるんだ。

桜が危ないという危機感を無視し、自身の安全を第一に考えている。

それはヒトとしての当然の感情、生物の本能、なんて理性ですら言い訳をしている。

桜を止める感情が偽物のような気がしてきた。

これは俺の意地なのかプライドなのか。本能とは関係のない余分な感情ではないのか。



そんなコトを考えているうちに、桜はあの男と衝突していた。

空手の型や中国拳法を織り交ぜていた桜の攻撃は、やはり弱々しかった。

力任せに振る腕は平手打ちのようにも見え、あっけなく掴まれた。

「……………っ！」

「女は　　すっこんでやがれっ！！！」

男の太い腕が、桜に伸びる。

手は桜の首筋をとらえ、指が少し食い込む。

首を絞められた桜は苦しそうに吐息を漏らし、全身の力が抜けたように見えた。

その光景　　。

桜の苦痛に歪む顔　　。

力無くうなだれ、ぶらんとする腕　　。

一瞬、目の前が真っ赤になった気がした。

撃鉄はさっきから上がっていたんだ。

キリキリと音をたて、落ちる寸前だったのだ。

それを留めていたのは他ならぬこの俺自身。

そんなモノに、何の意味がある。

桜を守れず、危険にさらしているのはこの俺だ。

桜を守ると決めたハズなのに、それどころか頼っていた。

俺は何をしている。

あんな言葉を吐いておきながら、何をしている。

ヒト一人守れず、何の為の己か!!

“ヒトヒトリマモレズ、ナンノタメノオノレカ!!”

何か、一線を越えた気がした。

「あああああっつ!!!」

ガチンと頭の中で音がして、我を忘れた      いや、思い出した。

体が軽い。

痛みもないし、何より周りの気配が手に取るように判る。

気が付けば走り出していた。

当然あの男目掛けて。

振りかざす拳も、避けられたり防御される気がしない。

相手が無防備だし、何より今の俺だ。

「なっ……！おまつ」

驚いた表情をつくった男を殴り飛ばす。

キレイにクリーンヒットしたからか、おもしろいように吹き飛び、立つことも出来ないようだ。

なるほど、脳震盪か。

だがそんなことで手を緩める気は毛頭ない。

馬乗りになってラッシュをかける自分は、疲れを知らない。

もはや意識が無くなっているそれを、容赦なく殴りつける。

「しゅっ……いち……?」

桜のその言葉を聞かなければ、死ぬまで殴り続けていたかもしれない。

苦しそうに咳き込む桜を眺めた後、ドアの前に立っている男に目をやる。

すごいな、今の俺は敵の逃げ道を確認するほど冷静だ。

気の弱そうな男は口をパクパクさせたまま動こうとしない。

となれば、次の標的は決まっている。

「ひっ………!」

後ずさりする男を追い詰め、一気に懐へ飛び込む。

俺の繰り出す鉄拳はまさに疾風。

ヒトを破壊するのに適した俊足の拳。

ひとしきり滅多うちにした後、こめかみを握り潰さんかという勢いでアイアンクローを放った。

もちろんそれで終わらせるつもりはない。

すでに気絶しているとは言え、最後の一撃は大切だ。

動かなくなった男の頭を、持てる力全てを使い壁に打ちつけた。

その瞬間有り得ない音とがし、何となく楽しかった。

視界の隅には、あまりの出来事に目を背ける桜。

桜は今の俺を見てどう思うだろう。

暴走しているように見えるだろうか。

だがそれは断じて違う。

今の俺は解放　　。

その言葉が正しい。

力を解放しているのだ。

その証拠にこの清々しさ、こんな人生初だ。

さて、残る獲物はあと一つ。

ガクガクと震えているから、なるべく気絶しないように殴ってやろう。

その方が興が乗る。

では、あの心地良い感覚をこの手に。

拳を振り上げ、狙いを定める。

加速をつけようとしたその時。

ドン、と背中に何かがぶつかった。

確認するまでもなく、それは桜だった。

好機と見たか、背後の扉を開けて逃げ出す獲物。

「もうやめてっ!!」

逃がすまいと体を動かそうとしたが、動かない。

見れば俺の腰には腕が巻き付いていた。

「お願い……もう終わったから……もうやめて……柊——!!」

声に張りがなかったのには気が付いたが、それでも止まる気はない。

再度体に力を込めるが、また制された。

渾身の力で抱きついていて、胸が苦しい。

そこで、今までいい感じに温まっていた俺の体は、急激に冷えていった。

思考の回復に、煮えたぎっていた力が反比例する。

頭はもとより冷静だったが、いつもの自分に戻るような感覚が襲った。

完全に感覚が戻ったあと、腰に回っている手を握る。

「さくら………?」

腕がピクリと動き、するすると離れていく。

振り向くと、顔を伏せたままの桜がいた。

前髪に隠れて表情が窺えない。

「桜? どうした?」

覗き込むように見上げると、百八十度体を回転させてしまった。

わずかに肩が上下している。

「おい、桜さん？」

後ろから覗こうとすると、視界が一変した。

顎に何かが埋まり、天井を見渡した後仰向けに倒れた。

あつ、あなたが僕のお母さんですか？

「柊……？柊っ！」

慌てて駆け寄ってくれるのは嬉しいが、アップパーはダメだと思う。

「……久しぶりだな、この痛み」

軽口を叩くほど余裕はあるのだが、桜は俺の頭を抱きかかえてくれた。

いやいや、そげな大げさな。

つて、アレ？

「柊ー！大丈夫……？」



「かなり大丈夫だが、それより桜。なんか目が腫れてるぞ？」

事実桜の目は、赤く腫れていた。

そのコトを口にした途端、せっかく持ち上げていた俺の頭は放棄された。

床に後頭部からヘッドバッドを喰らわした俺は目に涙を浮かべたが、なんとかこらえた。

すでに桜はそっぽを向いている。

いつまでもこうしているわけにもいかないので、よっこらせと言わんばかりに腰をあげた。

さて、ここまで派手に暴れたんだから、速やかに戦略的撤退をするべきではなかるーか。

「  
帰るか、桜」

未だそっぽを向いている桜に一声かけると、相変わらず前髪で顔を隠したまま頷いてくれた。

取りあえず救急車は呼んどいて、警察は……やめておこう。

もう一度あの時の自分を思い返してみる。

冷静かつ機械的な動き。

あれは楽しんでいたのだろうか。

と、そんなくだらない思考は停止させ、さっさと建物内から退場した。

どんな理由だろうとあの時はああするしかなかったのだから、深く考える必要はない。

しかし背後にいる桜、何とかならないものか。

やたらと冷たい視線が背中に突き刺さっているし、無言の威圧は厳しい。

非常に厳しい。

いくら暴れ回ったとはいえ二人きりなんだから、もう少しだな、何というかな、会話らしきモノがあってもよいではないか。

「……桜、体は大丈夫なのか？痛むなら言ってくれ」

周囲をネコミミ超人が行き交う中、この気まずい空気を打破すべく訊いてみた。

あるなんて答えられてもすることないが、無言よりは幾らかマシだ

ろっ。

「別に。特にそんな箇所は見当たらないけど」

わあー、絶対不機嫌だあ。

「そうか、ならいいんだ」

もしかして俺、余計気まずい空気をつくりだしてないか？

桜のコトだからまた強がり言ってるのかもしれない。

一応医者に診てもらうべきか、本人を信じるか。

「……………」  
「ごめん」

いや、診てもらうべきだ。

あんな苦しそうな顔されては、こちらも立つ瀬がないし。

うむ、診療代は泉に払わせるとして、他にも報酬をいただかないといかん。

埋め合わせなんてレベルじゃないぞコレ。

「…………柊こそ、ケガは平気なの？」

そう言えば、妃奈は水野にどんな埋め合わせをさせられてるんだろう。

水野ならムチャ言わないだろうけど、妃奈から進んでなんかやらかしてるかもだな。

うん、そんな性格してるし。

「…………ちよつと柊。聞いてる？」

てゆうかハラ減ったな。

よし、報酬は国産黒下和牛にでもしてもらうか。

泉なら謎のルートで手に入れそう……って、ナマで貰っても仕方ないのか。

そういうのが出てくる店に連れて行ってもらおう。

「聞ってるのっ!？」

にしても、行きしは容易に踏破出来たのに、返りがこんなに長く感じるなんてな。

アレか、山は下山するほうが疲れるってやつか。

辺りに珍獣が徘徊してるし、山って言うよりは魔窟だな。

「こらあーっ！無視するなっ！！」

「お、おお！？何事でござる！？」

いきなり耳に響く謎の轟音。

耳小骨を砕き、うずまき管を破裂させるつもりかと罵倒したくなるのをなんとか抑え、声の主を見据えた。

「耳ダイジョウブ！？聞こえてますか！？ゴートウー耳鼻科！！」

カタコトで怒鳴り散らしてくる鬼のような桜さん。

「な、なんだ桜。いきなり大きな声だして」

「いきなりじゃないわよ！。さっきから何回も呼んでるのに上の空

だし」

桜は俺の行く手を遮り、胸を張って腕を組む。

当然ながら顔はそっぽを向いているワケで、不機嫌オーラをこれでもかと放出している。

「いや、悪かった。ちよつと考え事してたんだ。ほら、緊張の糸がプツンとだな、切れるとだな、何て言うかだな、そのー………  
…ごめんなさい………」

謝罪の言葉を聞き、俺が心の中で土下座していることに気が付いてくれたのか、桜は呆れた表情になった。

許してくれたのだろうか？

「……いいわよ、何でもないから」

少し拗ねたような顔をし、またくるりと背を向けた。

ズンズンと進むその背中には、無言でありながら俺の発言を許さぬかのよう。

これ以上怒らせても後が恐いだけなので今は黙っておこう。

とは言え終点はすでに近く、すぐに本部であるあそこに帰ってきた。

「お帰りなさいませー！ご主人様！」

もう馴れたと思ったが、このお決まりのセリフを吐かれるとビクついてしまう。

それでも臆さず会議室（命名は俺）へと突入すれば、我らが総大将がふんぞり返っておられた。

一応これまでの経緯を、時にジェスチャーを織り交ぜながら話してやった。

それが終わると次は泉の番。

説明を聞いた限り、目的は果たせたようだ。

「二人とも疲れただろ。今日はこれで解散しよう」

珍しくマトモな泉の言葉に甘え、そうそうに立ち去ろうとする俺と桜。

「あーっと、西園寺、渡したいモノがあるんだ。来てくれ」

出口にさしかかったその時、泉が手を招きながら桜を呼び止める。

桜は小首を傾げながら泉に歩み寄る。

何やら会話は聞き取れないが、桜は大きな薄い箱をもらっているようだ。

ん？どこかで見たことがあるな。

あんな箱、俺んちのどっかにも埋もれていたようないなような。

ああそうだ、アレは制服の箱だ。

中学、高校と制服が変わる度に我が家にやって来た、制服を入れておく箱だ。

そう言えば俺は最近制服変わったんだ。

それもあつたせいか、桜が受け取る箱の中身に薄々気が付いた。

やがて桜は大きな箱を持って帰ってきた。

「饞別だつてもらつたんだけど、どうしよ、ここで開けちゃおうかな」

「やめとけやめとけ。そういうのは家で開けるモンだ。楽しみはとつとした方がいい」



頑なに制止する俺。

せつかくの餞別なんだから、無碍には出来まい。

桜は素直に頷き、俺に賛成した。

意外と単純だな、桜。

ともあれ、今度こそ扉を開けて出て行く。

もう気まずい空気は霧散してしまったようだ。

それはいいが、俺には何の餞別も無いのか。

まあ、泉からの餞別など期待出来ないけど。

歩くこと数分、やっとこさ駅にたどり着いた。

切符を買った後時刻表を見てみると、本当にギリギリだった。

数秒で電車の走る音が聞こえてきたぐらいに。

別に何を話すワケでもなく、黙々と座席に腰を下ろす。

なんかジツとしていると、今までの疲れが溢れ出てくる。

俺たちの乗っている車両は、俺たち以外無人のなんとも寂しい空間だった。

流れる景色に魅せられるかのように窓の外を見つめる。

ふと、魔が差したのかも知れない。

「……本当に痛むところはないのか？」

思えばそんなことを訊いていた。

それはさつきも訊いたし、反感くらうだけかと思っただが。

「ん、心配しなくても大丈夫。そんなことより柊一は？結構痛かったでしょ」

なんてことを言いながら少しうつむいた。

肩を揺らせば触れ合う距離、表情はよくうかがえる。

ガタンゴトンと揺れる度に肩先に緊張がはしる。

「俺のことはどうでもいい。俺のケガは俺の責任だから。でも、その……桜のケガは桜の責任じゃない」

俺は桜を守ると言った。

盾ぐらいにはなれるから、俺の後ろに居ろと言った。

それがなんだ、この様は。

ボコられた挙げ句、桜まで危険にさらした。

結局俺は、口先だけの馬鹿な弱者に過ぎない。

「それは違うわ。私のケガは私の責任よ」

責任の所在なんて考えるまでもない。

桜の責任だなんてことは絶対にないんだ。

俺が勝手に巻き込んだだけなんだから。

「…………ゴメンね、柊一。私、柊一を守るなんて言っておきながら、足手まといにしかならなかった…………」

…………おかしい。

それは絶対におかしい。

「何言ってる。俺が勝手に桜を巻き込んでるんだから、桜のケガは俺のせいだ。…………謝るのは、俺の方だ」

桜にはなんの非もない。

なんの落ち度もない。

「だから、私の場合は自己責任だつてば。今まで散々技を磨いてきたのにいざとなれば役に立たないし、素人の柊一にケガさせちゃうし、自分が情けないわ」

こいつには素人は守るという習性でもあるのだろうか。

自己責任なのは俺だけで、桜には適応されないはずだ。

一方的に巻き込まれて自己責任なんて、不条理にも程がある。

「分つかないやつだなー。桜は巻き込まれただけだろ。桜の責任なワケないに決まってるじゃないか」

桜はムッと、こちらを睨みつけてきた。

文句あるか、なんて訊いたら暴れ出しそんな雰囲気だ。

「そ、そんな顔してもダメだっ！これだけは絶対に譲らないからな。それとも何か？桜は俺がケガしたら嫌なのか？」

俺の必死の抵抗は、所詮油にしかならなかった。

桜という火種に注ぐ、最悪の行為。

桜の表情はみるみるうちに変貌し、いつしか爆発していた。

「嫌に決まってるでしょっ！このバカっ！柊一が危ないと思ったから泉くんの話に乗って……………」

があーっ、と剣幕をあげる桜。

だが、最後の一言を境に表情がカラッと変わった。

口が滑ったと言わんばかりに硬直し、唇に手を当てている。

もしかして、弱みかなんかか？

「泉の話に乗って、何？」

すると桜は、ぷいっとそっぽを向いてしまった。

なぜ頬を赤らめる。

「な、何にもないっ！ほらっ！電車止まった！早く降りるわよ！」

いいところで邪魔をされてしまった。

桜はもう出て行ってしまったし、今日はもう諦めよう。

急ぐこともなく外に出て切符を通し、新鮮な空気を肺に送り込む。

うーん、自分の縄張りの空気はおいしい。

「お、もうこんな時間か」

近くの大きな時計に目をやると、三時のおやつはとうに過ぎていた。

太陽が馬鹿みたいに朱い。

「さて、ここで解散だな。送ろうか？」

「家近いから大丈夫よ。それより、早く帰らないと妃奈が心配するわよ」

ふむ。

なぜ妃奈が心配するかは分からないが、早々に帰宅するとしよう。

晩飯の用意もしないとだしな。

ま、お湯沸かすだけだがね。

「じゃ、私こっちだから」

手を振りながら桜は去っていった。

その顔には微笑み的なモノが浮かんでいた。

「さあゝて、俺も帰るか」

なぜか気合いを入れながら、大股で歩き始めた。

なんとなく、桜が家に帰った後のことがよく判る。

俺がメイド服を変換した時、清楚メイドさんが、『桜さん、メイド姿がよく似合いますね』とニヤついていた。

そうか、あの人の仕業か。

そのことについては、また泉に訊いておこう。

桜にもな。

これから、面白くなりそうだな。



#### 四話 乱心の奉仕者（後書き）

いきなりやってくる文字数超過。すいません、羽衣です。前回の続きという程でもありませんが、要するに気にしないでください（笑）。サクツと言ってしまうとそういうコトです。少し間を置いてしまいました、これから頑張りますので、応援宜しく御願ひ致します。

五話 ANOTHER STORY ココロノキズナ

ある朝、彼女は目覚めた。

半開きになっているカーテンから漏れる日光が眩しい。

時計を見ればまだ7時にもなっていない。

休日に起床する時間にしては早いと思うのだが、起きてしまうものは仕方がない。

この土地 木枯は、名前の由来からか年中通して気温が低い。

少し気は引けるが、ベッドから降りて背伸びをする。

彼女は何故か朝にだけは強く、まだ眠っている父を叩き起こすのが日課だった。

今朝も日課を果たすために父の寝室へと向かうと、その父の姿が見当たらない。

焦ることもなく、昨夜父から聞いた話を思い出す。

「そっか、トラブル発生とかで夜中に出て行ったんだっけ」

父の仕事が謎に包まれているのは昔からだし、こんなことにも馴れていた。

ただ、まだ小さかった彼女にとって、それは耐え難い孤独だった。

母はずっと昔に死んでしまったし、我が家には自分一人ということになる。

その一人ぼっちを救ってくれたのが、お隣さんというわけだ。

彼女が一人の時はいつも家へ招き、寂しさを和らげてくれた。

その家はこの家とよく似た環境で、母親を早くに亡くした少年が一人と、その父親が居るだけ。

似ているのはそれだけではなく、その家の父親も時々家を離れる。

すると今度は、その少年がこの家に厄介になりに来るのである。

それが、長年続いた両家の関係。

不思議と、両方の父親が家を離れることはなかった。

今やその関係は崩れてしまったが、完全に崩壊したワケでもない。

微妙な関係が続いているからこそ、幼馴染みとしての関係も確立しているのかもしれない。

「沙樹ちゃんと約束もあるし、早く準備しよう」

彼女は最近仲良くなった友人の顔を浮かべ、リビングへと向かった。  
彼女は大人しい割に、他人と仲良くなるのが上手い。

ダントツに上手い。

沙樹というのも、二年になってから初めて同じクラスになった女子だし、会話だってほとんどしたことが無かった。

この前なぞ、同じクラスでもなく、話したことも全くない女子と数分で仲良くなった。

今では名前で呼び合う仲だ。

それがどんな強敵だろうと、仲良くなる。

彼女のポリシーとは、そういうものだ。

今もそのポリシーを守るべく、身支度にいそしんでいるのだ。

顔を洗い、寝癖を整え、着て行く服を思案する。

朝食はトーストを焼いて済ませたし、時間はたつぷりと余っている。

朝10時におおぞら広場前、というのが約束の時間だ。

時間は使い切るつもりで費やしたのに、まだ一時間以上もヒマがある。

ここからあおぞら広場まで約10分。

一応『市民噴水広場』という正式名があるのだが、その外観から『あおぞら』の名を冠している。

彼女は家でのんびりと過ごすタイプではないので、一足先に広場で足を運ぶことにした。

そうと決まれば行動あるのみ。

迅速に家を出て、これまた手早く戸締まりを完了する。

一度ドアノブに手をかけ、引いてみる。

ガチャッと引っかかったのを確認してから、また身を翻した。

麗らかな日差しの中、彼女の足取りも軽かった。

通り過ぎる全ての公共物に挨拶したくなるような気分。

散歩されている犬を見ると微笑んでやった。

空を舞う小鳥を発見すれば手も振った。

どうにも休日の、しかも朝の散歩は気分が澄み切ってしまうらしい。

そんな清々しい気分です歩を進めたおかげで、意外と早く広場に到着してしまった。

そこに足を踏み入れると、まず空を見上げる。

まさに“あおぞら”。

子供たちが遊ぶに相応しい様々な遊具と、広大な敷地。

さらには雑木林まで存在するこの広場は、ほとんど建造物というモノがない。

遊具にも、必ずと言っていいほど屋根がない。

故にあおぞら。

見上げるといつもそこにはあおぞらがあり、悠々と流れる雲がある。

ただ一カ所、雑木林には、この風景がない。

暖かい木漏れ日と、繁茂している木々。

もはや別空間のような雰囲気を持つ場所である。

水野沙樹の指定は、この雑木林の中にあるただ一つのベンチだ。

よくカップルが待ち合わせに使うこのベンチは、いつも陰に隠れている。

待ち合わせに最適な場所とまではいかなくとも、少なくとも紫外線を気にする女性にとっては最高のポジションである。

彼女がそのベンチに腰掛けると、見事に様になる。

恋人を待つ麗人ほど、麗しいモノはない。

ただ彼女の場合は、恋人ではなく同性である友人を待っているワケだが。

「やっぱり早過ぎたかなあ……」

時間に空きがあるのは変わらない。

いくら過ぎしやすい空間でも、飽きなどすぐにやって来る。

するコトが無くなった途端に時の流れが遅く感じるのも、相対性理論の特徴だろう。

そして、人間ヒマな時ほど物思いにふけるものだ。

ふと天を仰ぐと、最近帰ってきた幼馴染みの顔が浮かんでくる。

遂に再会出来るというから、会ったら何を話そうとか、どんな顔しようとか心の準備をしたのに、肝心の相手は自分に気付いてさえくれない。

席も結構近いし、目だって合った。

それでも長年会えなければ仕方がないと自分を抑え、勇気を振り絞って話し掛けてみた。

そして振り向いた時の表情、まるで“どちらさん？”と顔に描いているようだった。

さすがにムツとしたが、昔と全く変わらない性格と態度のせいそんなモノ消えてしまっていた。

一つ変わっていたのは、自分に対する呼び名だけ。

これが決定打になり、聞いた時は涙が溢れそうだった。

あの時結んだ約束を、未だ忘れずに居てくれたのかと。

これは本当に致命傷になった。

昔の思い出が走馬灯のように次々と蘇り、自分の中の“彼”という存在に再び火が灯った。

幼少の頃の想いはそのまま引き継がれ、今でも爛々と光を放っている。

いや、常に彼の存在は心の中にあっただ。

だからこそ恋沙汰は頑なに避けてきた。

無意識の内に彼を意識していたのだろう。

さすがに中学時代は、彼氏の一人や二人と思っていた。

けれどまさか、今になっても恋愛関係まで発展したヒトが居ないとは。



男性と手をつないだコトもなし、その先などもってのほかだ。

でも、それで良かったと思う。

自分は誰のモノにもなったことが無い、みたいな安心感があったし、なる気も無かった。

そして何よりも、彼が帰ってきた。

彼が帰ってきてからだ、自分に欠けていた何かが埋まったのは。

それまで一度も考えなかったようなコトを、考えるようになった。

清楚な性格の方が好まれるだろうか、どんな髪型が好みなのだろう、やはり料理は上手い方がいいのか。

服装は？喋り方は？スタイルは？

一途で純情な乙女を望むのなら、私はどうだろう。

髪も染めてあって、いわゆるギャルを望むなら？

自分でも、下らないと思う。

いつか彼女は、こんなコトを聞いたことがある。

『自分らしく在りたい。けど、私らしく在っても願いが叶わない』

それは、いつも素直になれない女の子からの、純然たる心情吐露。  
その言葉を聞いた途端、胸がキリキリと締め付けられるように痛かった。

自分を悩ませているファクターの一つである彼女が、全く同じことで悩んでいる。

その事実を消化するために、正論をかざしてやった。

他人ごとならではのフェミニストは自らの虚像であり、自らの実像を改変させるための指標。

彼女の正論はまさに妥当だったのだろう。

いとも簡単に納得してもらえた。

けれど、自分はどんなのだろう。

“考えるようになったコト”と、それしか“考えられないコト”。

指標には程遠い、浅はかな考え。

（はぁ……私ももう少し強引になろうかな……）

ため息をつき、がっくりと肩を落としてみた。

「自分が変わるのもいいけど、もっと手っ取り早い方法があるですよ?」

聞き慣れた声と、耳に吹きかかる涼風。

「あんっ……にやにやにやにやにや!」?

突然の出来事でワケが分からず、左耳を押さえてベンチから逃げ出した。

振り返るとそこには、友人である水野沙樹の姿があった。

「あははっ! すごーいつ! あなたはトマトさん? それともポストさんかな?」

意地悪そつに、それも爆笑している沙樹。

その後ろには苦笑している女子が二人。

「なっ 何をいきなり!」?

未だ情緒が不安定で、言葉もまとまらない。

「いやー、少しからかおうと思ったんだけど、まさかそこまで官能的に反応してくれるとはねー。感じやすい体質かな、妃奈は」

あくまでニヤニヤと笑い続け、じとりとした眼差しを向けている。

そこでようやく言葉の意味を理解し、また顔が熱くなった。

どうやら、ひとりでに考え込んでいるうちに沙樹らが到着したようだ。

そして背後を取られ、毒牙にかかってしまった。

何故か心を読まれ、官能的とか言われ、挙げ句の果てには感じやすいなどと言われてしまい、もはや血液は沸騰寸前。

全身を巡る血が煮えたぎっているように熱い。

「それ以上赤くなると蒸発しちゃうよ？愛しの彼と裸で抱き合う妄想はおよしなさい」

「にゃ、にゃにをー！？」

本当に一瞬想像してしまい、血液が沸点を越えた。

現在の体温、約50。

もはやこの血液、液体窒素をもってしても冷やせまい。

「奇声あげるの好きなのね。しかもネコだなんてお茶目だなあ」

一体何処の誰が奇声をあげさせているのかは問うまでもないが、当の本人はケラケラと笑っている。

（うつ……沙樹の取り扱いには気を付けるようにって、泉くんから言われてたんだ……）

今更思い出してもかなり遅いが、これからは気を付けようと強く決心する彼女であった。

水野沙樹と同じ中学、それも親しい仲にあった人間は、その身をもつて彼女の本性を知らされる。

かつて、水野沙樹をこう評した者がいた。

『人を愚弄せず、攻撃せず、しかし挑発することにおいては一級品だ。何故なら水野沙樹は、どんな心も見抜く眼を持ち、あらゆる情報を収集する耳を持ち、様々な弱みを嗅ぎ分ける鼻を持っているからだ』と。

（そして、焼き付くことを知らない饒舌を以て人を封殺する……か。  
侮るべからず、水野沙樹）

相手をしていても勝ち目がないので、彼女は後ろの二人組に目をや  
った。

遊ぶのに二人きりとはいささかなものかと、沙樹が呼んだのだ。

今の今まで誰が来るか知らなかったが、顔を見て安心した。

どちらも一応常識的な人だ。

「お久しぶりです、神谷先輩」

一人は日本人とアイルランド人のハーフで、中学の時から知ってい  
る下級生だ。

彼女は中学時代女子バスケットボール部所属で、まさにエースだっ  
た。

そして二年生の時に、一人の上級生が突然入部してきた。

バスケット部は三年でも多く参加する少し特殊な部であるのだが、さす  
がに三年からというのは極稀だった。

しかし入部してきた上級生はメキメキと上達していき、レギュラー

の座を奪い取るに至った。

同時にエースの座もかさらっていったことは言うまでもない。

その人柄と容姿に魅せられ、彼女もまた、新たなエースとして尊敬の眼差しを送っていた。

三年最後の大会にも見事優勝し、それも偏にエースである彼女の存在が大きい。

入試の時期と共に去っていったそのスーパーエースは、不思議なことに彼氏が一人もいなかったとか。

曰わく、彼女は入部した全ての部で輝かしい功績を残したという。

一年は女子ソフトボール部、二年は陸上部、三年は女子バスケットボール部という風に。

彼女が去った後、事実上のエースに戻った彼女　上永谷　アミリアは、残り約一年間その上級生を目指し続けたという。

「神谷先輩はもうバスケしないんですか？どこの部にも入っていないみたいですけど……」

「うん、高校はもう特に。家のこともあるし」

妃奈はあっさりと答えた。

彼女がまたバスケットをしていることは知っていたが、曖昧に答えると勧誘されてしまう。

可愛い元後輩に、そんなこと訊いて欲しくなかった。

「けど……アミちゃん、結花<sup>ゆか</sup>と知り合いだったの？」

そう言って、彼女は視線を左にずらす。

アミリアと同じ黒髪の、同中学出身である相葉<sup>あいば</sup> 結花<sup>ゆか</sup>。

親友とまではいかないが、そこそこ見知った人物だ。

中学の頃は吹奏楽部に所属していた彼女に、一つ年下で、しかもバスケット部だったアミリアとの接点が思い浮かばなかった。

「あれ、妃奈知らなかったっけ？私とこの娘、ご近所さんなのよ。ま、いわゆる幼馴染みってやつ？」

なるほど、とばかりに頷くが、やはり意外だ。

その上沙樹とも知り合いなのだから、世間は狭いものだ。

「挨拶も済んだみたいだし、そろそろ行こっか。これからはずっちや



けましょ」

そうして、水野沙樹を先頭に進軍していった。

向かう先はまだ聞いていないが、大体の予想はつく。

最近駅一つ離れた場所に、大型ショッピングモールができたらしい。

前々から興味はあったのだが、未だ決行に移せていない。

まるでそのことを知っているかのように、沙樹は駅へ吸い寄せられていった。

愉快的な声をあげながら道のりを踏破する沙樹は、主に相葉結花と肩を並べている。

男勝りな性格の結花と、いたずらっ子レベルMAXの沙樹は、これまた意外なほどに相性が良かった。

そんなテンション高めの二人組には先導を任せ、残りのまったり組は数メートル後ろをゆるゆるとついて行った。

「アミちゃんはいつ沙樹と知り合ったの？もしかしてまたご近所さん？」

彼女は、ふとそんなことが気になった。

自分の後輩が友人の幼馴染みで、中学から違わずの女の子とも知り合い、とはあまりに出来過ぎている。

少なくとも沙樹との接点は小さいはずである。

「あゝ、まあ、何と云うかですね。その、私が傷付いて森で倒れるところを……いや、井戸に飛び込んだら戦国時代にタイムスリップ……でもなくですね……あつ、かくかくしかじかですっ！はい！かくかくしかじか！」

「……………」

何とも言えぬ緊張ぶり、そしてあの焦り方。

誰がどう見ても訝しむだろう。

拳げ句の果てにはかくかくしかじか？

“かくかくしかじか”だけで理解出来るやつなんかいるとすれば、そいつは時間短縮のためにそうゆう風に設定された架空の人物か、概念を読み取る対有機生命体用インターフェースのどちらかだ。

そんな宇宙人的スキルを持ち合わせていない彼女にとっては、ただ動揺しているようにしか見えなかった。

（隠し事してるのは明らかだけど……アミちゃんはそういうの苦

手だし、結花は『隠し事』なんて単語知らないんじゃないかな。可能性があるとすれば……）

当たり前のように怪しい人物に目を向けてみると、楽しそうにおしやべりに夢中になっていた。

とても隠し事なんてしていなさそうだが、演技ということも有り得る。

あれが演技だとすれば、最優秀新人主演女優賞モノだ。

必死に何かを隠しているアミリアを詮索するのは酷なので、ここは潔く引いた。

その後何事もなかったかのように会話を進め、歩くこと数分。

「はい、着きましたー！いつ見ても圧巻ですなあー」

嬉々とした声が一同の視線を固定させる。

まさに圧巻。

高層ビルとマンションの特性を見事に複合させた、超巨大ショッピングモールがそこにあった。

アミリアは部活一筋の多忙娘で、結花は喜んで買い物に出かけるよなガラではない。

妃奈は最近違うことで頭がいっぱいだし、先頭は自ずと沙樹に決定してしまっている。

「しかしデカイ建物だな。近くにこんなモノがあるとは知らなかった」

「あつ、結花ちゃんも知らなかったんだ。私も存在くらいは知ってたんだけど、見るのは初めてなの」

結花は感嘆、アミリアは歓喜といったところか。

正直妃奈も一度は来てみたかった所なので、嬉しくないと言えは嘘になる。

「沙樹も変なコト考えてそうだけど、今日は楽しまなきゃね」

妃奈は小さく呟き、置いていくことも厭わない沙樹たちの後を追いかけた。

「つ、疲れたー！無理！限界っ！！」

初めに音を上げたのは相葉結花だった。

開始二時間で足が棒になったと述べ、それから十分ごとに『地獄のようだ……』と漏らし続けたのだ。

ショッピングモール突入後、まず一階の雑貨店を制覇。

続いて二、三と順調に上の階を目指していく沙樹のペースは、凄まじいものだった。

普段こんなところに来ない結花にとって、それはまさに地獄。

そしてアミリアと妃奈の懸命な説得により、現在喫茶店にて休憩中というわけだ。

「さて、次はどこに行こうかなー」

エレベーター付近で入手した地図つきのパンフレットとにらめっこしている沙樹。

その言葉を聞いた途端びくんとした結花など知る由もない。

各々飲み物と、体重計との戦闘を覚悟している者はスイーツ。

結花はあまりの疲れにレモンティーしか頼んでいないため、沙樹だけがプチケーキを口に運んでいる。

「沙樹さんは……疲れないんですか？」

沙樹の無限ともとれる体力を目の当たりにしたアミリアが問うた。

「フツー疲れないでしょ？こんな楽しいところに来たら」

「まあ、フツーに回ってる分には疲れないんですけど、ペースがちょっと……ね」

「そうだよ。ここに来て早めにお昼ご飯食べて、それから結花、魂抜けてたよ」

「うーん、残念ながらそれは現在進行形ね。それに、私たちが疲れてちゃ意味無いでしょ」

不思議な視線をアミリアに送る沙樹。

結花にも送ろうとしたが、テーブルに突っ伏していて顔がうかがえない。

「そう……ですね。頑張ります」

なぜか納得してしまうアミリア。

それで場は収まってしまい、話は完全に逸れてしまった。

HPの回復した結花も交え、他愛もない話を続ける一同。

そして話題は、妃奈の中学時代の物語。

「私、中学生の時にイジメられてたの」

そんな宣言を聞いた沙樹は目をむいた。

「男子から集団でイジメられてて、その……学校にもあんまり行きたくなかった」

問題発言の多い神谷妃奈に、沙樹は驚かされっぱなしだった。

しかし過去を知るアミリアと結花は、苦笑したり鼻で笑ったりしている。

「イジメられてたって、何で……？」

「……分かんない。昼休みとか放課後に、人目に付かない所に呼び出されるの。それで、私が嫌がったり困ったりしてるのに……」

「先生とかに相談してみたの？」

「……恥ずかしくて出来ないよ。男子は味を占めたみたいに何度も呼び出してくるし。しかも同じ人に……」

苦い過去を語るように俯いてしまう妃奈。

それをいたわるような沙樹の表情は、神妙そのものだった。

「やっぱり、神谷先輩のルックスによるところが大きいですよ。純粹なところとか、自分のモノにしたいっていう支配欲じゃないですか？」

「確かにその通りなんだが……アレはイジメっていうのか？イジメの定義は分からないけど、私はイジメじゃないと思うぞ」

「そうね。話を聞いてると、犯罪的なイメージが……」

「アレは普通、自分でするよりもされる方がいいんじゃないですか？私はどっちもまだ経験無いんですけど……」



「だからって無理強いはダメでしょ！そういうのは合意のもとで行われるのであって、一方的にしているモンじゃないっ！ましてや18歳未満のこわっぱ共が……！」

「それ、私たちもですね」

「ウサギにつの！（兎に角）許されることじゃないわ！」

沙樹の両手がテーブルを叩きつけ、グラスが揺れる。

瞳がメラメラと、憤怒の怒りに燃えている。

「許されるだろ、告白くらいなら」

冷静に入る、突っ込み。

「告……白………？」

「たくさんの人から、しかも何回も告白されるなんて、幸せですよ」

「でも嫌だったんだもん！アレはイジメだよ。ねっ、沙樹」

わなわなと震える腕は力を失し、沙樹の体はストーンと落ちた。

心配そうに見つめていた店員も、同時に安堵に浸る。

ああ、やっと静かになってくれた、と。

「……ごめん。私、どえらいカン違いしてた。恥ずかしいから、しばらく話しかけないで……」

小鳥のように首を傾げる妃奈をよそに、一人頭を抱える沙樹。

ワケが分からないモノは無視しておくのが無難なので、三人はまた違う話題で盛り上がり始めた。

グラスの中身が空になり、沙樹も復活した頃、喫茶店を後にした。

その後、沙樹が本気でまだ遊び回ろうとしていたことが判明し、同じく結花の本気の懇願によりそれは中止された。

ならばここに居る意味は無いと、夕方五時頃には帰宅の途に就いた。なんだかんだで疲れたと言い張る沙樹は真っ先に姿をくらまし、結花は言うまでもなく疲労困憊。

アミリアも結花と共に帰るハズだったのだが……。

「アミちゃんっ。ちょっとちょっと」

呼ばれたアミリアは結花に意味ありげな目配せをする。

承知した、と結花は一人で歩き出し、それを見届けてから妃奈の許へと駆け寄る。

「???どうしたんですか?神谷先輩」

「……そろそろ、タネを明かしてもいい頃じゃない?」

「え、ええ!?タネですか!?そんなの無理ですよ……」

「ふうくん、やっぱりあるのかぁ」

「あうううう……」

自滅してしまうあたり、彼女は本当に嘘が吐けないのだろう。  
心底困ったような表情をつくり、あたふたと手を振っている。

「うーん、もう…観念するしかないかなあ……」

アミリアの情けない声が、妃奈を歓喜させる。

「ぶっちゃけてしまつとですね、今日の出来事は全て沙樹さん考案なワケなんです」

そんなコトは分かりきっていると、妃奈は話を促す。

「沙樹さん曰わく、『妃奈が最近悩んでるみたいだから、みんなで遊びましよう』とのことだったんです。それで急遽、神谷先輩の知人である私や結花ちゃんに白羽の矢が立ったと」

「沙樹が……？」

「はい。知り合いでもない私たちを誘うくらいですから、相当神谷先輩のコトが心配だったんじゃないですか？」

本当に、水野沙樹は食えない。

何を考えているか分からない顔して、他人を気遣う。

埋め合わせと称して呼び出し、わざわざ親しい友人まで用意して、今日一日楽しませてくれた。

「神谷先輩今日とっても幸せそうに笑ってましたから、沙樹さんも喜んでましたよ。作戦大成功です」

「ホント…沙樹は何でもお見通しなんだから……。私のためにこんなコトまで……」

あのいたずらっ子が、まさかこんなにも思いやりのある人だと、誰が気付けただろう。

今回だって、アミリアというウィークポイントが無ければ真相は闇の中だった。

彼女はいち早く妃奈の悩みに気づき、それを遠いところから解消した。

いや、彼女のことだから、この場でアミリアが真相を明かし、妃奈が彼女の真意に気付くことまで読んでいるのかもしれない。

真相と共に自分という明確な友人を提示し、精神的に安定させる。

悩みの解消への近道だ。

そこまでは妃奈もアミリアも頭が回らないのだから、やはり沙樹の

一人勝ちというわけだ。

だが、そんな思惑はどうでもいい。

現実には妃奈は息詰まることもなくなった。

ただそれが沙樹の一計によるモノだっただけ。

それこそ妃奈にとっては、沙樹が自分の心配をしてくれていた、という事実だけで充分。

常に優しい沙樹から垣間見た、沈黙の思いやり。

それだけでも十分な報酬と言えるし、実際救われた。

今日、神谷妃奈にとっての休日は、水野沙樹に二つ目の借りをつくり、彼女の本質に気付かされる一日であった。

今日、水野沙樹にとっての休日は、神谷妃奈と思い切り遊び、彼女の肩の荷を少しでも下ろすための一日であった。

今日、上永谷アミリアにとっての休日は、上級生の友情をその身を以て感じる一日であった。

今日、相葉結花にとっての休日は、様々な思惑の中、楽しくも疲弊しきった一日であった。

「おはよう、沙樹」

彼女は今日も、いつもと同じように同級生と挨拶を交わす。

「あつ、おっはよー、妃奈」

彼女もまた、何食わぬ顔で挨拶を返す。

そこには、変わらぬ日常の中で深まる絆が確かに存在した。  
。

本当に短く、特記するような事柄も皆無。

ありふれた何でもない……………下らないとさえ言えそうな一日で、ヒ  
トは極上の気持ちえを、紡いだのだ。  
。

## 六話 夢・集合

桜と別れて自宅に帰った時、俺は激しく体調が悪かった。

ただ頭が痛いだけなのだが、この痛みが尋常でない。

遂には床に倒れ伏し、気絶ともとれる眠りに落ちた。

軽い吐き気がブラックアウト寸前まで続いたが、それを堪えるのは造作もない。

簡単に意識が欠如した俺は、疲れのせいかな夢を見た。

その夢は俺の脳に焼き付き、決して消えることはない。

そう、今でも簡単に呼び起こせる。

あの光と闇を…………。

俺が視た夢は、俺のものであって俺のものでない。

俺は真っ白な光の中、ただフワフワと浮いていた。

周りには人の気配どころか、建物すらない。



どこから光が差しているのかは判らないが、その世界はとても安心できる。

しかし、そこにあるのは俺だけではなかった。

いつの間に現れたのか、俺の目の前には一粒の闇。

真っ黒で怪しいソレは、モヤのようにフワフワと浮いていた。

そう、俺と同じように。

やがて黒い闇は、ヒト型へと姿を変えた。

明らかに体積が足りないように思っただが、その黒い闇は変形を止めない。

完全なヒト型へとなった黒い闇は、口も無いくせに俺に喋り掛けた。

『久しぶりに運動すると、疲れるな』

いや、なんて答えていいのか判らない。

判らないので、そうか、と適当に流した。

『ま、意味が判らなくても仕方ないさ。俺が優性で、お前が劣性なんだから』

またもやワケの判らないことを。

少しかりム力ついたので、俺は言い返してやることにした。

『お前一体なにモンだよ。目も鼻も口も、カタチしかないじゃないか』

『はは、それはお前も同じだよ、柊一』

『……なに？』

慌ててカラダを見てみると、俺のカラダはあいつと同じモヤになっていた。

色が白い、という点では少し違う。

『俺もお前も、何ら変わらない存在だ。自分とケンカ出来ないように、俺たちは争うことすら出来ない』

『……俺はお前が嫌いだ』

『俺だつて嫌いだ。だが争えない。俺とお前は同じだから。自己嫌悪つてやつさ』

『さつきから言つてゐる意味が判らないが、これは俺のせいかな？』

『お前は劣性だから仕方無いって言つただろ。俺はお前が終一だと理解出来るが、お前にはムリだ』

『不公平なのはガマンしてやる。で、お前はなにモンでここは何処なんだ』

『ここは俺たちの心象世界。ここからカラダを観察できる。そして、“俺”と“お前”の住処であり、意識』

どうやらコイツとは話が噛み合わないらしい。

抽象的すぎる発言はマジで判らん。

『俺がここまで理解出来るのは、お前が居るから。俺だつて外に出ればお前と同じ無知者』

まるで笑っているかのように両手をヒラヒラさせるマッククロクロスケ。

その仕草は何となく俺に似ていた。

『百聞は一見にしかず。カラダの所有権は俺にあるから、証拠を視せてやるよ』

その言葉を聞いた途端、ヤツのカラダが白くなった。

明るい世界は変わらない。

だが、確実に何かが変わっている。

『今交代した。優性の俺が具現化したんだ。その証拠にお前、黒いぞ』

ハッとしてまた自分のカラダを確認してみると、さっきとは反転して俺が黒い。

『俺もお前も一つなんだ。幾つかの条件が揃わなければ、こうやって会話出来ない。当然、俺たちの知識はここでなければ発揮出来ない』

『やっと読めてきたが、もしかして俺は二重人格者か？お前がもう一つの人格でさ』

俺の発言は的を射ていたのか、失礼なことに腹を抱えて大爆笑された。

『はははっ！そうか、二重人格かつ！優か劣かでここまでとは！』

涙でも流しかねないような笑い声は、不思議と癪にさわらない。

それどころか、自分が多重人格者ではないという事実にあ堵していた。

『人格が複数あるわけじゃない。意識が二つあるだけだ。俺が外に出なければ感知すら出来なかっただろうな。俺は今までナリを潜めてたワケだし』

『じゃあ何でお前は出てきたんだ。どこに出たかは知らないけど』

その当たり前のような質問が、ヤツの触れてはならぬ琴線に触れてしまった。

『お前が呼んだんだろう……！あの時！！』

身に覚えがないので、そんな風に怒らないで欲しい。

困惑しまくるからな。

『お前じゃムリだから俺がやったんだ！八年前だって  
』

そこまで言って、ヤツは押し黙った。

急に冷静になったかと思うと、また俺とヤツの色が変わった。

白と黒、その二つが入れ替わる。

『 早いな。さ、お別れだ。俺が出るのはあまり良くない。水  
野や泉によろしくな。あと、桜にも。それから 妃奈には、謝  
つとしてくれ』

何でその名前を知っているのかと訊ねようとした時、俺は目が覚めたようだ。

カーペットの上とはいえ、床で寝ていると体が痛い。

ワケの判らん夢を視たせいで、まだ頭が痛い。

ピンポン

どうやらさっきからインターホンが鳴っているようだ。

体を起こして時計を見ると、見事に八時。

そうか、休日は昨日で終わりのワケで、するってーと来訪者は妃奈か。

さらにするってーと、遅刻确实だべ。

体は重いし頭は痛いし、もうサボタージユだ。

俺は急いで玄関を開け妃奈を迎える。

「おはよう……って、アレ？」

妃奈が首を傾げる。

多分俺が着替えていないのを見ておかしいと思ったんだろう。

「妃奈、悪いけど俺今日学校休む。体調不良」

「もしかして風邪？なら私が」

「看病はいいよ。ホントに大丈夫だから、安心して学校行っというで」

俺は妃奈に歩み寄り、ポンと頭に手をのせる。

妃奈が恥ずかしがったから、手をのけて軽く背中を押す。

「……ホントにいいの？」

「ああ、いいよ。メシ食って寝てるから」

すると妃奈は了解してくれたのか、くるりと背を向けた。

「あ……妃奈」

知らず知らず、妃奈を呼び止めていた。

小動物のように振り向く妃奈は、どこか可愛らしい。

「ん……なんか、ゴメン」

「? いいよ、別に。それより、インスタントとかレトルト食品ばかり食べてちゃダメだよ。栄養偏っちゃうから」



説教するように言いつけた妃奈は、行ってきますと手を振ってから歩き始めた。

学校に向かう妃奈の後ろ姿は、何だか凜々しかった。

「……なんで謝ってんだろ、俺」

俺もさっさと家へ戻った。

本当に風邪を引いてもイヤだし、なにより意味がない。

だが、学校はサボったものの、ヒマだ。

とにかくヒマで、授業中であることを承知していながら泉に電話してやった。

残念ながら電源を切っていやがった。

それから二十分後、泉から電話が掛かってきた。

内容はもちろん、苦情。

『お前な、もし俺が電源入れてたらどうするんだ。あの時は数学だったんだぞ』

などと文句を言ってきた。

数学の教師は厳しいことで有名で、ケータイを携帯していることがバレようものなら、それこそゲンコを二、三発譲渡される。

受け取り拒否は不可だ。

「ああ、悪かったよ。少し魔が差したただけだから、そんなに怒るな」

『まあいいさ。柊には大きな借りがあるしな。それより……ん？西園寺、昼休みに会うとは、俺の今日の運勢は凶か』

お、どうやら泉と桜が接触したらしい。

それよりあいつ、桜を挑発するようなことばかり言うから、昼休みは危険の法則が出来上がるんだ。

『ああ、お察しの通り柊だ。は？電話貸せ？いいだろう、通話料は一秒一万円だ。それで……ひでぶっ！！』

……ああ、秘孔を突かれた泉の姿が目に見えかぶ。

桜にも恩があるんだから、優しく接しろよ。

泉の冥福を祈りつつ、俺に飛び火しないよう願う。

『柊一、私に無断で休むには署名が600兆人分必要って言わなかったけ？』

また意味不明なこと言ってるなあ。

600兆なんて、一体どの星に行けばそんなに人間いるんだよ。

地球上の全人類かき集めても100分の1にも満たないぞ？

『冗談はさて置き、何で休んだの？』

「体の調子が悪かったただだよ。それから、俺は桜に連絡する必要も術もない」

『そうだったけ？それより、体大丈夫なの？』

「全く、女子つてのはみんな心配性なのか？桜が心配するくらいだから、北京原人の時代から根付いてたんだろうな」

『わ、私はただ……昨日色々あったから、その、まだ痛むのかなあ  
とか思っただけで、心配じゃないの。柊一のケガは半分私のせいだし……』

本当に、桜のこういう所はずるいと思う。

俺の発言からして怒ってもよさそうなものを、こんな風にか弱い女の子っぽい声で返してくるんだから。

ギャップが激しいよ、桜さん。

ま、桜も実はちゃんとした女の子なんだけどね。

「桜、他人が気にかかって案ずるのを、心配って言うんだ。知らないなら辞書に書き足しとけ。あと、暴力とか暴行みたいな単語は修正ペンで真っ白にするのを忘れずにな」

『制裁は消さないから。それと、部屋を掃除してお茶とお茶請けを用意しておいてね』

それっきり、ツー、ツー、としか聞こえなくなった。

桜がワザと可愛らしく『ね』を語尾に付けるからには、何かが来るな。

それから泉、桜には助けてもらったんだから、態度を改めて割り切れよ。

……でないと、死ぬぞ。

おっと、このセリフは言ってはならん。

空中で大破が結末だったもんな。

可哀想に、ハイジ（？）。

数時間後、予想していたことだが、インターホンがけたた  
ましく鳴り響いた。

客人が誰かは分かりきっているため、急いでガスコンロの火を止める。

お湯を沸かしているのがバレれば、妃奈にとっちめられそうだ。

玄関先でドアを開けると、予想通り妃奈が。

そして続くように桜が                   ？

さらに泉と水野まで                   ！？

「待て待て、何だって大軍でやってくるんだ。聞いてないでこわす」

「いいじゃない、ヒツキー。みんなで看病に来たよー」

水野、その呼び方では俺が引きこもりみたいに聞こえるからやめてくれ。

ていうか、皆さんコンビニの袋を持参してるあたり、うちでパーティーでも？

「看病など建て前で、本当は遊びに来た。だがな柊、みんながお前の心配をしているのは真実だ。とくに俺は大きな借りがある。黙ってはいられん」

おお、微妙にいいこと言ってるのか？

なかなかの好青年ではないか、泉。

それに、みんな制服姿なのは、直接来てくれたからなのだろう。

「柊くん、ちゃんとお昼ご飯食べた？」

「あ、ああ。目玉焼きでも作ってたっけな？」

いきなりの尋問に、思わず声が裏返った。

「そっかー、で、ホントは何食べたー？」

「いや、だから自分で作」

「何を、食べたの？」

「期間限定……みそ味カップヌードルです……！」

「もうー！またそんなのばっかし！育ち盛りなんだからもっと栄養のあるものを食べなさい！」

僕には料理なんて出来ないんです……妃奈さん。

「もう……夕飯は私が作るから、キッチン借りるね」

妃奈はやれやれと言わんばかりにキッチンへと向かった。

そして、適度に温められたお湯を見て、俺をキッと睨みつける。

ああ、バレたか。

間食としてだから、許して下さい。

ぶつぶつと文句を言いつつ、冷蔵庫をガバツと開ける。

あ、食材がほとんど入ってないや。

中身に絶望した妃奈は静かに扉を閉め、またもや俺にキツイひと睨みをくれた。

「まあまあ、落ち着けよ神谷。幸い、近くにスーパーがあるんだろ？何とかなるさ」

よし！今日はいいい調子だぞ、泉。

「今日は一晩中遊びまくるんだから、そんな事きにしないっ！」

どうやら水野さんは問題発言が多いな。

泉はともかく、女の子……しかも美女を三人も泊めれるワケないだろ。

俺の神経が擦り切れる。

「そうだな、夜通し語り明かすがいいさ。妃奈んちで」

「何言ってるの殺菌くん。友達なんだから同じ布団で寝るのは当た



り前でしょっ？」

同じ布団で眠るつもりなのか！？

それと、俺は殺菌くんじゃない！

ていうか俺の家に泊まるのが前提なのかよ。

「水野。残念だがな、うちは公序良俗に反する行いに手を貸すことは出来ないんだ。他をあたってくれ」

「あら不思議、公序良俗に反する行いを、ツキリンはするのかな？」

「ツキ…！？いや、俺がではなく、泊まるという行為自体が反するのだ」

「若い男女と一緒に寝ること？おかしなコトが起きる確率がゼロなら、別に関係無いじゃない。それともキミはやましい気持ちがあるのかい？」

「いやいやいや、絶対ない！」

「そう、私たちにもないわ。あなた達が変な気を起こさなければ、

何も起きない。なのにそれを危惧するのはあなたにやましい気持ちがあるから。違う?」

「でも俺にやましい気持ちなんか……」

「なら何も起きない。何も起きないなら問題ない。違う?」

いかん、丸め込まれている。

水野がこんなにも口が達者だとは気が付かなかった。

しかしこれだけは譲れない。

何としても死守せねば!

「みんなの意思を無視は出来ないだろ。ほら、桜だってさっきから黙ってるだろ? きつと不服なんだよ」

「私は別にいい」

あらま、桜さんあっさり承諾ですか?

何か理由がありそうだが、しょうがない。

泉は水野派っぽく頷いてるし、残るは妃奈だ。

この状況を打開するのだ。

「妃奈。何とか言ってやってくれよ」

冷蔵庫をガン見している妃奈に弱々しい声で助けを求めた。

献立ではなく打開策を考えてくれ。

「んー、私は賛成だよー？もともと泊まりに来るつもりだったし」

「はあ！？マジですか！？」

おかしい、今日のみなさんはすごい態度がおいしい。

そうだ、桜が簡単に了承することがおかしければ、何の脈絡もなく急に『泊める』なんて言い出す水野もおかしいんだ。

何故？

何故、桜は今日、泉のケータイをぶんどってまでして俺にあんなことを告げた？

桜の性格からして、あんたの家に泊まるくらいなら野宿の方がマシ

だー、とか言いそうじゃないか。

どうしても俺の家に泊まらなければいけない理由がある……もしか  
は、そうせざるを得なかった………？

おそらく後者だろうが、その理由が判らんな。

よし、妃奈よりもまず、桜に直接訊こう。

「……仕方ない。一時この問題は保留にしておこう。ハラが減って  
は戦は出来ぬとか言うし、晩ゴハンの食材を買ってくる。実はさっ  
きから腹ペコでな。あ、ついでに桜借りるから」

俺は立ち上がると、未だ戸惑う桜の手を取った。

そして半ば強引に部屋から連れ出し、自宅を飛び出た。

……我ながらももう少し自然にできないものかと反省する。

家を出たまでにはいいものの、桜のキョトンとした顔が不自然さを物  
語っている。

だが、ここからが肝心だ。

いかに桜から情報を聞き出すか……いや、ストレートに訊いた方が  
いいかな。

とにかく俺は、桜を連れて近くのスーパーへと向かった。

家の前でウロウロしているのがバレたら大変だ。

「桜、悪いけど荷物を持つの手伝ってくれ。一人じゃ辛い」

「え…いや、それは構わないけど……」

まだ困惑気味な桜を引き連れ、歩みを進めていく。

日はすでに傾いているとはいえ、暗くなるにはまだ幾分早かった。

俺がこの土地に帰ってきてからまだあまり時間が過ぎていないし、春は未だ折り返し地点にも立っていない。

そのことを考えると、今まで色んなことをしてきたなと思う。

思い出の密度…と言うべきか、結構中身は詰まっていた。

八年前、俺が祖父の家に預けられてからこんなことは一度もなかった。

別に楽しくなかったワケじゃないが、この土地の人間の方がバラエティーに富んでいる。

この木枯のことなんか全っ然覚えていないのに、やはり懐かしい。

小柄でおとなしい幼馴染み曰わく、俺も全然変わっていないそうだ

けど。

やはりこうして町中を歩いていると、感慨に耽ってしまふ。

見る景色が新鮮に映っているにも関わらず、何故か和んでしまふ。

これが、故郷というものののだろうか。

そうして、二百メートル程歩いて坂道を登る途中、急に桜がハタと足を止めた。

「……柊一、ずっと気になってたことがあるんだけど」

桜は困ったような顔で呟いた。

「何だよ、桜。歩き疲れたのか？」

「ううん、そうじゃないわ。ただ、いつまで手を握ってるのかなあ、って思っただけ」

「え？ああ、スマン。ついすっかり忘れてた」

どうやら俺は、部屋からずっと桜の手を握っていたらしい。

慌てて手を離すと、桜はまた俺と肩を並べて歩き出した。

気になるんだったらもつと早くに言えばよかったのに。

俺は、横に並んだ桜を盗み見る。

桜は別段楽しそうではないが、不機嫌でもなさげだ。

視線を少し下げ、細く白い首を見る。

桜の透き通った肌に、特に異常は見受けられなかった。

俺が不甲斐ないばかりに危険な目に遭った桜は、首を絞められていた。

あの時は見た瞬間視界がぼやけ、頭に血が昇ったような気もするし逆に落ち着けた気もする。

だが情けないことに、それからの記憶があまりハッキリしていない。ふと辺りを見回せばみんな気絶していたし、何故か腰には桜の腕が巻き付いていた。

気のせいかもしれないが、桜はあの時泣いてたように思う。

あくまでも勘なんだが。

ていうか、失念していた。

俺は桜に訊かないといけないことがあるんだった。

何のために連れ出したってんだよ、全く。

「なあ桜、一つ訊いていいか？」

「分かってるわよ。私がどうして柊一の家に泊まることをオツケーしたのか、でしょ？」

ありゃ、バレバレか。

最初から気付いてたのか、桜。

「昨日の話なんだけど、私がお土産的なモノ貰ったの覚えてる？」

ああ、あの箱か。

少し薄めの、制服買った時に付いてきたようなおっきい箱。

あの中身は……きっとアレだったんだろうな。

「実はアレが原因なの。家に帰って開けてみると、その……とにかく言いづらいのが入ってた。捨てるに捨てられないし一応置いてあるんだけど……」



桜はそこで言葉を詰まらせた。

どう話すものかと悩んでいるようだ。

考えている姿を見ているのもいいが、俺の意見も一応聞いといてもらおう。

「桜……もしかして、水野に脅された？」

ぴくん、と反応した桜は、黒い瞳に驚嘆の意を示した。

どうやら俺の考えは的中していたらしい。

なんか、危険を察知したリスみたいになってる。

「よし、話はだいたい解ったよ。箱の中身は言わなくていいから安心なさい。       しかし、桜も大変だなあ」

「え       ？ 柊一、もう分かっちゃったの？ へえ、意外と頭いいんだ」

ふむ、意外は余計だな。

考えてみれば簡単だ。

俺たちがメイド一族を助け、普通のブツをお礼に貰えるなんて思っ  
てない。

渡したのが、桜はメイド服が似合うと賞賛していた人物なら尚更だ。

でもまあ、確かに似合ってたけどな、物凄く。

で、それが桜にだけ渡されたということは、桜に需要が有るにしろ  
無いにしろ俺より桜の方が適しているワケだ。

何故かは言うまでもない。

桜が美人で、女であるという前提のもとにメイド服が似合っていた  
からだ。

それを家に置いておく      タンスかクローゼットかは知らないが、  
やはり他人に見られるわけにはいかないだろう。

多分水野は、もし断られたら桜んちに泊まるー、とかなんとか言っ  
たんだろう。

それが本人の知らない間に、桜にプレッシャーをかけていたんだ。

なんせ、見つければひどいことになるからな。

あんなモノがクローゼットに入っているのを偶然発見すれば、誰だ  
って驚く。

そして扉を閉めた後に言うんだ。

“コスプレって何が楽しいのー？”ってね。

それを未然に防ぐために、俺の家に泊まるのを認めなきゃいけないかったんだ。

俺でもきつと、そうする。

誰だって避けるべき危機だと思うさ。

「……分かつちゃったってことは、もちろん箱の中身も分かつちゃった？」

「ああ、だが安心しろ。俺の考えはあくまで推測だし、桜が俺に言わない限りアレを受け取ったってのも曖昧だ。言いふらす気とか毛頭ないけど、一応言っとく」

そう、俺がアレの名称を桜から聞いてしまえば、それは事実になる。

事実を知られては、口を封じなければいけない。

それが如何に信用に足る相手だとしても、不安は残るだろう。

でも逆に俺が“真実”としてその名称を聞かなければ、俺の推測は推測の域を出ない。

真相は闇に葬られたまま、誰一人気付くことはない。

暗黙の了解の方が、お互い気が楽だ。

「そ、ありがと。けど私は、柊一になら教えてあげてもよかったわよ?」

「何でだよ、俺が言いふらすかもしれないんだぞ?」

俺は少し笑いながら答えた。

「大丈夫。柊一はそんなことしない。柊一は、言っちゃいけないこととは言わないし、やっちゃいけないことはやらない。そういう信頼できる人と一緒に居るのは楽よ。将棋で例えるなら、金将かしら?」

なるほど、使い勝手がいいと。

相手を詰める時とか便利だもんな。

しかし金将とは、俺も買いかぶられたもんだ。

やはり思い出すと自分が情けない。

「そんないいモンでもないさ。それより、スーパー見えてきたぞ。何を買うか考えないとな」

俺は、いつの間にか目前へと迫ったスーパーを指差す。

「そうね。早く済ませて帰りましょ」

その時桜は、とてもご機嫌だった。

太陽のようなスマイルは眩しいばかりに輝いていた。

そんなこんなでスーパーに突入し、適当な材料を買い込んだわけなんだが……その結果。

「こんなの買ってどうするの……!!」

などと妃奈に怒鳴り散らされている次第である。

「牛肉、じゃがいも、カレー粉。それにプリンとようかん。ここまでは神谷も許してくれたかもな」

俺と桜が妃奈にとっちめられているというのに、数メートル離れた所で買い物袋を漁っている者が二人ほど。

もちろん水野と泉だ。

「けど、熱湯三分とか五分とか書いてある商品はまずったわね。しかも大量に」

怒られるのは分かってたんだが、やはり先のことを考えるとだなあ……。

一応カレーを意識してみたんだが、いざ材料を買うとなれば、何があるかが判らない。

桜はあまり口出してこなかったし、自分なりに頑張ったのだ。

では、購入した食品を紹介しておこう。

牛肉2パック。

じゃがいも数個。

カレーのルー7箱（適当に一掴みしただけなのだが、妃奈曰わく“有り得ない”のだそうだ）。

ようかん五個。

プリン五個。

インスタント食品大多数。

その他菓子類等。

以上だ。

「ま、まあ怒らないで下さい。プリンやようかんもあることですし……」

こちらとて、妃奈対策がないわけではない。

女の子は基本的に甘いもの好き、という桜の助言によりプリンを。

桜の希望によりようかんも追加。

ようかんもプリンも、効果はなかなかに抜群であったようだ。

「……はあ。今日は特別に許します。では罰として、柊くんのようにちゃんとプリンを半分私に譲渡すること！」

なんだ、やっぱり食べたいだ。

「でも妃奈。そんなに食べると太」

すみません、反省しておりますので、そんな怖い顔で睨まないで下さい。

ごめんなさい。

何はともあれ難は去ったようなので、次は妃奈の番だ。

そのための買い物でもあったワケだしな。

「じゃあ妃奈。早速晩ごはんの支度をしよう」

そう言っただけで、妃奈をキッチンへ連行した。

リビングからキッチンまでそう大した距離ではないが、ヒソヒソ話をする分には聞こえないと思う。

棚に長年保存されていたエプロンを二人分引っ張り出し、妃奈にその一つを手渡した。

エプロンなんて久々だな。

きつと中学の調理実習以来だ。

「さ、美味なるカレーを目指してガンバろう」

俺の所信表明をどう捉えたのか、妃奈は訝しそうな顔をした。

「……お肉とじゃがいもだけだよ？」

そこには右手に肉の入ったパックを、左手にじゃがいもを装備した



妃奈がいた。

「ルーさえあればカレーだろ。プリンでも入れちゃう？」

妃奈は小さくため息をつき、俺のジョークを流してくれた。

まあ、イモと肉のパレードもまた一興だ。

俺と妃奈がキッチンに立っている間、残された三人はどこから引つ張り出してきたのか人生ゲームをエンジョイしていた。

歓声があがりまくっている。

そんな雑音を気にせずじゃがいもの皮を剥いている妃奈は、妙に様になっていた。

馴れているの一言では片付けられない少し静かな雰囲気。

大げさに言ってしまうえば、神秘的とか神々しいみたいな感じだ。

強く母性を感じるといつか、清楚な気を漂わせている。

そんな妃奈に見とれていたせいかな、俺は未だ徒手空拳であった。

エプロンを着けたからにはと思い、勇ましく包丁を取り出す。

そしてじゃがいもを一つ手に取り、妃奈のを手本にしながら見よう見まねで皮を剥いていった。

じゃがいもをくるくる回しながら皮を剥くのだが、なかなか上手くいかない。

何よりム力つくのは、剥いた皮が繋がらないことだ。

妃奈はスルスルと長くなっていくのに、何故か俺のは断片となって落ちていくのみだ。

俺が二つ目に差し掛かろうとした手を伸ばしたその時、

「柊くんのじゃがいも、なんかちっちゃくない？」

妃奈からの指摘を受けて自分の作品を見てみると、確かにちっちゃかった。

最初から一回りも二回りも縮小してしまった無残なじゃがいも。

しかも形が、元の丸から角張った多角形へと変化しているのは何故だ？

すでに幾つものじゃがいもを制覇した妃奈と、一つだけの俺。

数では負けているが、切り落とした部分の体積なら俺の方が上じゃないか。

「じゃがいもはこれで終わり。柊くんこういう作業慣れてないんだ

から、後は私がやるよ」

「……そうだな。俺が手を出したら邪魔になりかねない」

俺はサッサとエプロンをハズし、遠くの方にぶんなげた。

かといってキッチンから出て行くわけでもなく、ただ突っ立っているのみだ。

妃奈一人に任せるのも気が引けたし、訊かなくちゃいけないこともある。

「……なあ妃奈。何でさっき、俺の家に泊まるとか言い出したんだ？」

食材を炒める妃奈は顔をこちらに向けない。

向けられてもアブナイから困るんだがね。

「終くん一人じゃ何かと大変じゃないかなー、と、優しい幼馴染みは心配しているワケですよ。体調悪いならなおさら」

「本当にそれだけ？」

「うん、それだけ」

……なんか、拍子抜けだな。

何事もないのは結構なんだが、あっさりしすぎている。

桜のことがあったせいか、どうやら俺はマジになりすぎてたらしい。

「柊くんは……もし私が体調崩したら、泊まりに来てくれる？」

「え！？妃奈んちにか！？それは……健康な青年男子として問題が……」

「………そっか。ふつうそう思うよね」

「うん。だから、いつも元気でいてくれよ。妃奈が元氣なくして俺まで元氣なくなったらどう責任取ってくれるんだ」

「………柊くんまでなくなっちゃうの………？」

「うん、多分。だからいつも元気に笑ってなさい」

「うん。私はずっと笑ってるから、柊くんも笑っててよ」

俺が小さく頷くと、妃奈はまた料理に集中し始めた。

その時の妃奈の表情はどこか嬉しげだった。

フライパンが奏でる肉を焼く音すら喜々としている。

俺は完全に立ち尽くし、ただ妃奈を見つめるだけ。

やがて、カレーらしくなってきた食べ物にフタをする妃奈。

どうやら料理は一段落したらしい。

あとは煮込むだけ、と小さくこぼした妃奈はエプロンをハズし、人生ゲームの輪の中へと駆けていった。

あちらも一回戦が終了していたらしく、結果は水野の圧勝。

泉は家が燃えるなどの災難に遭ったらしい。

俺もいつまでも立ち尽くしているワケにはいかないので、ついでに輪の中に混ざった。

時刻はすでに六時、早ければ夕食の時間だ。

西日が差すリビングで、俺たちは飽きもせず一緒に人生を満喫した。

言うまでもないが、そのほとんどの人生において水野は億万長者だった。

かくいう俺は常に崖っぷちで、職業はフリーター、詐欺には遭うわゴルフコンペでぼろ負けするわ、約束手形と長い付き合いとなった。

あ、クーラーも買わされたっけな。

とにかくそんなどん底の人生でも、なかなか楽しかった。

そして、俺が全ての約束手形を手中に収めた頃、カレーの完成を妃奈に告げられた。

フタを開けると、まさしくカレーの香りが立ち込んだ。

空きっ腹にひびく何とも言えぬ良い香りだ。

ふと時計を見ると、あれから一時間も経っていた。

「これは……。柊、俺たちが泊まるのは反対ではなかったか？」

いつの間に距離を詰めたのか、泉涼太が隣にいた。

そのすぐ後ろには水野がひょっこりと顔を出している。

「ああ、反対だったが、見ての通りカレーの量がハンパじゃない。一人じゃ食べきれないから手伝え」

鍋になみなみと作られたカレーは、明らかに五人前。

それでも二日は保ちそうな量だ。

こんなに食べるとインド人になってしまう。

妃奈の企みかどうかはこの際ほっとしておくでしょう。

実際俺も、このメンバーと一緒にいるのは楽しい。

もうやけくそだ、みんなまとめて泊まってけ。

公序良俗に基づいたお泊まり大会を開催してやる。

「おっ！？今認めたね、五月柊一クン」

珍しく俺を本名で呼んでくれるのは嬉しいがな、水野。

もし文字にする際は『五月』ではなく、『皐月』にしてくれよ。

「あらかじめ言つとくぞ、寝る部屋だけは別々にする。これは絶対だし規定事項だ」

「そんなの当たり前じゃない。私と泉くんは多分構わないけど、そ

れじゃ他の人が保たないつしょ」

なるほど、よく分かっていらっしやる。

そこまで分かってるなら自重してもらいたいんだがな。

「でも、寝間着とかはどうするんだ。神谷のを借りるにしても限りがあるだろ？」

そこで泉が疑問を口にした。

確かに、と顔をしかめる俺と妃奈。

もしや中止か？ そうなのか？

「その点は大丈夫。ここからじゃあ多分、桜の家が近いだろうから、借りに行くよ」

リビングで一人焦る桜。

そう言えば水野に來られちゃ困るんだっただけ。

背後から殺氣にも似た桜の視線が刺さる。

“止めなきゃどうなるか……判ってる？”なんて幻聴が聴こえてき



たくらいだ。

殺られる……俺が殺られる……！

「……なあ水野。それぐらい桜一人でも大丈夫だろ？」

「何言ってるの。私が借りるんだから私も行かなきゃ。それが筋つてモンでしょ？」

「いや、桜は気にしないって。そんなに氣い遣うコトない……と思う」

俺と水野が桜に目をやると、首振り人形のようにコクコクと頷く。

「……桜、私が家に行くの避けてない？桜の家に泊まるって言った時も本気で拒否ってたし」

す、鋭い……！

いかん、この場で食い止めなければ俺の命がつっ！

「いや 困るっ！え、ああ      そうっ！水野に勝ち逃げされたまんまじゃ困るっ！」

「え？」

「水野、人生ゲームボロ勝ちしてたろ。俺が人生の敵しさってモンを叩き込んでやるぜっ！」

なんとも言えぬ静寂が訪れた。

水野は少し考えた後、ひらめいたかのように顔を上げた。

「よしっ！そういう事なら望むところ！勝利に酔うは真の強者と知れ！」

水野は腕まくりすると、続きをやらうと腕を引っ張った。

素早く定位置に着くと、俺にも早く座るようせがんだ。

こついう遊びになると急に子供っぽくなる習性があったのか。

そんなワケで何回やったかも分からない人生ゲームをまた繰り返すハメになった。

それも1対1のタイマンなんて、違うゲームにした方がよくないか？

俺が座ると、水野が先手を譲ると言ったので遠慮なく頂いておいた。

このゲームに先手の重要性は感じられないが、容赦出来る相手でもないで貰えるなら貰っとく。

そうして俺は、ルーレットという名の運命を指で弾いた。

## 七話 夢・集合、夜

「ただいまー、って柊一の家だっけ」

愉快的声をあげてチャイムも鳴らさずに桜が帰ってきた。

廊下をトコトコと歩き、リビングへ向かってくる。

廊下とリビングを仕切る扉を開き、リビングに足を踏み入れた。

その瞬間  
。

「西園寺ーっ！っ！」

泉が逃げ出すように桜の後ろへ回った。

桜の背中越しに水野を睨む泉の瞳は、恐怖と疲労に染まっていて凄みがない。

「泉くん、逃げるのは良くないよ」

妃奈が蔑むような眼差しで泉を見つめる。

「まだ決着は着いてないんだけど？」

水野までもが泉を非難するように呟いた。

俺は泉が座っていた場所のすぐ左に座しており、妃奈はそのまた左に居る。

テーブルには将棋盤が安置され、その上の戦局は地獄だった。

簡単に説明すると、満足に動かせる駒が王将ぐらいって感じ。

打ち合っているのは、もちろん泉と水野。

明らかに劣勢なのはもちろん泉。

……事は三十分に遡る。

俺との人生ゲームに連勝連勝を重ねた水野は、人生ゲームそのものに飽きた。

飽きた水野は、俺に他のゲームを要求し始めた。

幸い我が家にはボードゲームの類が豊かにしまっていてあったので、それを聞いた水野は狂喜した。

チェス、囲碁、バックギャモン、ダイヤモンドゲーム、将棋……etc.

その全てにおいて、水野は最強だった。

俺が一矢を報おうと、電子機器である家庭用ゲーム機を持ち出し、いわゆる格ゲーで勝負を挑んだ。

勝負は2ポイント先取。

初戦、僅かに圧倒した俺だが、小さなケアレスミスから敗北を喫ってしまった。

二回戦、どうやらコツを掴んだらしい水野は、超必殺技という初心者には難しい筈のコマンドを駆使して俺を抹殺した。

その後の勝負が目も当てられない惨状になったことは言うまでもない。

経験者、しかもだいぶやり込んだ俺にパーフェクトを決め込むのだ。

格ゲーはプレイ時間とコンボを編み出すセンスが全て、という俺の法則は完全に破壊された。

経験を積んだ格ゲーのプレイヤーに勝つには、更なる経験を積むしかないと思っていたんだがな。

電子機器では勝負にならないと考えた俺は、ボードゲームでまた挑んだ。

結果は同じだったと、敢えて言おう。

最終的には将棋で落ち着いたのだが、やはり戦局は変わらず。

俺と泉、そして意外にもルールを知っていた妃奈も加え、水野へと立ち向かった次第である。

俺に圧勝し、妃奈を瞬殺した後、泉を軽く捻り潰した水野は、連続での勝負を発案した。

飛車抜きでも全く歯が立たないのだから、有段者であることを信じよう。

そして連続で火花を散らし、今のような状態を招いたワケである。

泉はあまりの劣勢に堪えきれず、桜に助けを求め始めたのだ。

その桜は寝間着を入れてあるだろうリュックを右手にぶら下げている。

そして泉に侮蔑を込めた視線を送った後、テーブルに歩み寄って将棋盤を睨みつけた。

「……なにこれ、絶望的じゃない」

そのままの感情を口にした桜は、カーペットの上にリュックを置いた。

泉に変わって席についた桜は、駒を元に戻し始める。

「次は私の相手を頼もつかしら。私も将棋は少し自信があるの」

「ぬっふっふ。容赦はせぬぞ」

怪しく笑った水野は、桜と一緒に駒を元に戻していく。

「桜も帰ってきたことだし、ゴハンの用意しよっか」

未だへたれこんでいる泉を無視し、妃奈はカレーを温めるためにコンロに火を点ける。

俺はスプーンや食器、妃奈が家から持ってきた食材で作ったサラダを食卓に並べていく。

離れた所にあるテーブルでは、熱戦が繰り広げられていた。

「あれ、福神漬が無い……」

重大な事に気付いてしまった。



「えー、もうお腹ぺコぺコだよー」

妃奈の抗議には従えない。

「「福神漬けの無いカレーなんてカレーじゃない!」」

珍しく泉と息があつた俺は、財布片手に家を飛び出した。

福神漬けくらいならコンビニでも買えるハズだ。

自転車にまたがり近くのコンビニ目指して足に力を入れる。

風を切りながらチャリをこぎ、数分の内にコンビニへと到着した。

素早く福神漬けを発見した俺は店員に差し出し、出来うる限り最速で福神漬けを購入した。

コンビニ袋をチャリのカゴに突っ込み、息が荒いのも気にせずチャリをこぎ始めた。

行きよりは時間がかかったものの、神風のごとき速さで自宅に帰宅。

何故かドアを開けるのも力がこもってしまふ。

俺がリビングへ踏み込むと、

「負けたーつつつ!!」

水野の悲鳴のような叫び声がこだました。

聞いて判るように、水野は桜の前に敗北したようだ。

俺はあくまで冷静を装いながら将棋盤を見てみた。

……… 凄い。

俺たちを軽くあしらった水野が、まさかの大敗。

桜の王将は不動のまま、金将や銀将が二、三動いているだけだ。

「う……… よもやここまでとは………」

「なかなかいい勝負だったわ。まだまだ詰めが甘いけれど」

余裕の笑顔でそう告げる桜。

対して水野は悔しそうな顔をつくり、今にも再戦を申し渡しそうだ。

「はい、続きは後にしてね。もうカレー出来上がってるから」

妃奈の宣言に空気は一変した。

勝利した桜も敗北した水野も、将棋のことなど忘れたかのように立ち上がる。

はい、と声を揃えて食卓に着いた。

まるでお母さんだな、妃奈。

そして水野と桜も子供のようにだ。

という俺は既に席に着いているわけだが。

泉は俺よりも早く座っていたんだがね。

散々俺たちを敗北させ続けた水野は、遊び疲れたのか、カレーを目の当たりにして目を輝かせている。

散々敗北し続けた俺の目は淀んでいるかもしれないが。

律儀にもみんなで手を合わせ、いただきますと言ってからスプーンを駆った。

材料には多少の不満があるかもしれないが、味付けにおいては誰もが満面の笑みだ。

なにせ妃奈のつくったカレーだ。

一口、また一口と、口に運ばれる度に食欲が湧いてくる。

そんなことは絶対にないのかも知れないが、スプーンを持つ手は易々と止まってくれそうにない。

カチャカチャと食器の擦れる音が続き、誰もが笑いあった。

ここぞとばかりに、腹を膨らましながら抱える奇妙な画だ。

なんとなく　　あくまでもなんとなんだが、俺はこんな状況が不思議でならなかった。

自分でも判らないが、とにかく不思議だ。

この温かい団らんの中に俺が居ること自体、不思議でしょうがない。判らんことを考えても判るワケないし（数学とか化学は特にな）こんなうざったい感情は破棄した。

何より、そろそろ鍋の中のカレーが底を突く。

俺は競い合うかのようにカレーにがつついた。

初心者の常套料理であるカレーが、ここまでウマイとはな。

その後、思う存分カレーを堪能した俺たちは、いや、俺と泉は朽ちた。

胃袋のキャパシティを無視した食事は、激しい苦痛を伴うんだな。

鍋のカレーは見事に空。

そのほとんどを俺と泉と水野の三人で分けた結果、俺と泉は撃沈。

何故かケロツとしている水野は置いておこう。

プリンとようかん、食べたかったなあ。

桜が俺の残った半分を、水野が泉の一人前を平らげてしまったのだ。

でも何で隠れながら食べてたんだろ、桜。

「大丈夫？ 柊くん」

「う……。腹がはちきれ……」

ソファで横たわりながら答えた。

泉はイスに座りながら燃え尽きている。

「ちょっとは考えて食べなさいよー。アンタたちバカ？」

「ば…バカはヒドいな…。お前もちょっとは、妃奈みたいに心配できないのか……？」

妃奈は苦笑し、桜はヘンな顔で睨んできた。

泉は真つ白な灰になり、現在桜と対局中の水野は苦虫を嚙んだような表情をしている。

そちらも直に燃え尽きるだろう。

「妃奈。おじさんはいいのか？今家で独りぼっち喰らってるんじゃないのか？」

「お父さんだって大人なんだから大丈夫。1日ぐらいほっといても死なないよ」

そりゃ肉体的には死なないかもしれんが、あの人は精神的にな……。

神谷家の大黒柱、神谷 優弥<sup>ゆうや</sup>。

俺の親父同様、職業が謎に包まれた未知の男性だ。

よく家を空けるといふ事だけは確かだが、今は神谷家に帰還している。

このおじさんを説明するには、おそらく五分とかからない。

ただ 娘である妃奈を溺愛している。

それが彼の存在意義であり不動の信念である。

せっかく家に帰ってきたというのに妃奈が構ってくれないとなれば、今ごろ半狂乱になっているだろう。

しかし、そこまで溺愛しているにも関わらず、肝心の妃奈に煙たがられているというのが今の現状である。

これはこの前妃奈から聞いた話なのだが、妃奈が小学校低学年の頃、同級生の男子に告白されたとおじさんに報告したらしい。

それも、授業参観を間近に控えたという時期に。

参観当日、校舎は黒塗りのベンツに包围され、何故か教室には強面のお兄さんが沢山いらっしゃったという。

皆さんスーツを華麗に着こなし、顔には刃物でつけられたような古傷があつたとか。

当然、校長先生が直々にやってきたわけで、切り札である『警察呼びますよ』を繰り出したところ『サツがなんぼのモンじゃい』の一言であつさり撃墜されたらしい。

遅れてやって来た妃奈のおじさんが、そのお兄さんたちに頭を下げられたりと、まるで猿山のボス猿のように慕われていたというのは言うまでもない。

必然的に、妃奈激怒。

おじさんの『告白しくさったクソガキってどの子かな?』を、『お父さんキライ』の一言で瞬殺。

アブナイお兄さんたちの『お嬢、落ち着いてくだせえ』を『もうクッキーの差し入れてあげない』の一言でまたもや瞬殺。

曰わく、妃奈の存在はそのスジの人たちの心のオアシスだったとか。結果、校舎の周りを巡回するベンツ以外は全て消え去った。

そしてそれは今もまだ続いている。

これは直接おじさんから聞いたんだが、もし俺以外の男が妃奈に近付こうものならその男は数分の内に世界から抹消されるらしい。

『俺が認め、かつ妃奈も気に入っている男』であるらしい俺は、今のところ無事だ。

しかも、俺の親父とは高校時代からの友人だったらしい。

引越しの荷物を処理している時に発見した高校時代の写真は、俺の親父と妃奈のおじさんも含め、明らかに銃刀法違反なモノを所持していたりする。

一応大人の判断として、見てみぬフリをしておいたが。

で、何でこんな話になったんだっけ。

ああ、妃奈の家の話だ。

独りばつちも可哀想なので、おじさんを救済しておこう。



「さすがにこれだけの人数じゃ効率が悪いなあ。あ、そうだ。妃奈の家があつたんだ」

俺はあくまでも自然に閃いたフリをした。

「何の話？」

「風呂だよ風呂。女子は妃奈んち、男子は俺んちで風呂に入ろう」

妃奈は少し考えた後、うん、と頷いた。

「じゃ行こっか。沙樹、桜、将棋はひとまず休憩」

はい、と元気よく返事をして、桜も水野も妃奈について行った。

アヒルの子みたいだな。

「うしっ！俺たちも入るか」

そう言って俺は、泉を促した。

「ジャージぐらい用意してやる。だから早く入りなされ」

「すまん、では先に」

泉にジェスチャーで風呂場を教えると、すぐに向かっていった。

一応客人として迎えている以上、これぐらいはしてやらんな。

俺は泉の着替えを脱衣所に置いてから、リビングへと舞い戻った。

別に男の入浴シーンに出くわしても嬉しくないさ。

そこで俺は、ある事に気がついた。

「あれ、忘れてるじゃないか。コレ」

部屋の隅に追いやられてしまった桜のリュック。

確かコレには着替えが入っている筈だ。

何で取りに帰ってこないんだろ。

コレには桜と水野の着替えが。

そう、女の子の着替えが。

女の子の 着替え ？

着替えて 下着？

「せいやーっ！っ！」

理解していても視線が離れないので、廊下にぶん投げた。

理性よ……我が大いなる理性よ……この不浄を清めたまえ

！！

……よし！煩惱は去った。

去ったので、扉にぶつかったリュックを届けに行こう。

なるべく視線を向けず、指で摘みながら持つて出た。

妃奈の家を訪れ、チャイムも鳴らさず扉を開ける。

親しき間がどうたらこうたらとかいうことわざがあったが、家族同然ならばもう不必要だ。

妃奈にも教えてやらんな。

「おじゃましてーす、と」

間取りは大体同じ妃奈の家。

リビングへ向かう廊下の途中、

「……なんか騒がしいな」

やたらに大きな笑い声がしたりと、まさにドンチャン騒ぎ？

「忘れモノが」

ガラツと扉を開くと、そこには。

「おっ、柊ちゃん。いらっしやい！」

一升瓶片手に顔を赤くした神谷優弥の姿。

ああ、呑んでるな、と思ったただけならどれだけよかったか。

「ほほー。お前が柊一か、小僧」

俺を小僧などと呼ぶ男の姿。

今どき小僧なんて言わないだろ。

おじさんと同じ四十歳ぐらいの男性は、ガツハツハと愉快に笑っている。

体格のいい大男は顎に薄くヒゲを伸ばし、渋みというか、貫禄をかもし出している。

そして、向かい側には……。

「あ、着替え持ってきてくれたんだ。ありがとう」

透明な液体が並々と入っているガラスのコップを握っている水野。

検討はつくが、酒か……。

だって水野の両隣にさ。

「こらあーっ！ 柊ー！ 何しに来たー！？」

……誤解しないよう解説するが、これは妃奈の罵声である。

ベロンベロンに酔っ払った妃奈の頬はほんのり赤くなっていた。

妃奈のことだからほんのちょっと呑んだけなんだろうが、弱いんだな…酒。

「ばかあ！しゅーいちのばかやるおーっ！」

ちなみにコレは桜の声だ。

妃奈と同じく桜も弱いんだな…酒。

「おじさん、これは一体？」

「いやー、妃奈とそのお友達が来たというから酒を振る舞ったんだがなあ。初めて呑むには強すぎたか」

「おじさんが呑む酒は強いのはつかなんだから、妃奈が可哀相じゃないか。あーあ、こんなに酔っ払って……桜まで……」

「だーはっは！俺の娘もコレが初めてだぞ、小僧！」

おじさんの呑み友達らしき男性は豪快に笑い飛ばした。

「ていうかあんた誰……って、娘？」

えーっと、妃奈はおじさんの一人娘だし、水野がブンブンと首を横に振ってるってことは……。

「……………」

うつろな目をしている桜を見てから、また豪快オヤジを見つめる。

オヤジは自信満々に、というか笑いながら大きく頷いた。

「え…………でも、まさか…………」

もう一度桜を見てから、豪快オヤジに視線を戻す。

「桜はオレの娘だぞ、小僧」

え、えええええエエ！？

マジっすか！？

てか何で！？

え、桜の　オヤジさんが妃奈のおじさんと　？

知り合い？

世間狭っ！！

「申し遅れた。西園寺家、現・当主。西園寺 秋羅<sup>あきら</sup>」

西園寺 秋羅と名乗ったオヤジは、あぐらをかいた両膝の上に手のひらを置き頭を下げた。

「こちらこそ申し遅れました。皐月 柊一です」

すかさず俺は正座し、手をついて頭を下げる。

礼儀には礼儀で返すべしと、イヤってほど学んでるからな。

「いやいや、これはなかなかの好青年。頭を上げるがいい。堅っ苦しいのは性に合わん」

そう言ってまた笑い始めた。

こういう礼儀を重んじる反面堅苦しいのは嫌いな人、大抵大物なんだよなあ。

「柊ちゃんも呑みなよ！見ていてもつまらんだろ！」



おじさんがコップを差し出すので、仕方なく受け取る。

そのまま一升瓶から日本酒がつかれた。

それをグイッと一気呑みすると、また笑われた。

どうやらこの西園寺さんはよく笑う人らしい。

「ていうか水野、よく平気だな。このペースで呑んでたらこうなるぞ」

酔っ払って暴れ回っている妃奈たちに目をやる。

「ナメちゃ困るね。私はお酒には強いんだから」

西園寺さんがワツハツハと笑い、水野に酒をついだ。

「最近の若いモンは元気でいい！うちの衆なぞ、三十分でツブれるぞ！」

うちの衆……ね。

どうやら名家の人らしいが、この人はそっち方面を取り仕切っているようだ。

そりゃ桜も強なるわ。

「おじさんと西園寺さんは知り合いみたいけど」

「ああ。妃奈が構ってくれないし一杯やろうと思ったんだけど、若いヤツらじゃ可哀相だろ？で、親玉同士、旧友のよしみで吞もうかなと」

やっぱり拗ねてたんだ、おじさん。

西園寺さんもおんなじような理由だろうけど。

俺は何杯目かの焼酎を呑み干し、またつがれた。

「いやしかし、キミのことはよく聞いているぞ。なんでも、桜と仲良くしてくれてるそうじゃないか」

仲良くはしているかもしれないな。

何だかんだで殴られなくなってきたし。

「そりゃ、俺が認めた男だ！それぐらいは当然！」

「ほっ！お前が認めた男だったか！どうりで桜も懐いているワケだ！」

懐いてるって、桜が小動物みたいな。

それと、未だ俺に辛辣な口調なのは懐いている証拠なのだろうか？

「どうだ、お前も認めてやっては」

「うぬ、オレはまだ会ったばかりだから何とも言えぬ。だが」

西園寺さんは俺を品定めするように見つめた後、にかっと笑った。

いや、笑われても。

しかし水野元気だなあ。

このハイペースについて行ける高校生なんてなかないぞ。

ありゃ酒豪だな。

「くおらゝ。むじするな」

妃奈がいつぞやのようにヘッドロックを仕掛けてきた。

多分無視するなと言いたいんだろっが、舌が回っていない。

そもそも喋りかけられてねエ。

「はいはい。酔っ払いは早く寝なさい」

全く力がこもっていない腕を解き、妃奈を座らせる。

「はい、桜もこっちにおいで。ここ座りなさい」

ふにゃふにゃと寝転がっていた桜を呼び、妃奈のとなりの床をポンポンと叩く。

「しゅーいちい。なあに〜?」

へべれけ桜は割と素直だな。

こっちの方が可愛げあるんじゃないのか?

桜はノコノコと歩き、妃奈のすぐとなりにペタンと女の子座りした。

「せつかく着替え持ってきたんだが、もうムダかな。もう夜遅いんだから早く寝なさい。明日起きられないぞ?」

遅いと言っても、時間はまだ九時半。

眠るには少し早いだろうけど。

「おまへはあゝ、もっと私にやさしくしなうゝい」

あ、無視された。

しかも説教口調。

「ひとのきもひをかんがえろって……ようちえんで……言われにやかったのかゝ!」

はいはい、お酒は二十歳からって最近言われませんでしたか?

俺も呑んでるけどさ。

そんなに頭ふらふらなのは何言ってたんだか。

とにかく、今の妃奈は支離滅裂だ。

常識の通じる相手じゃない。

「桜。おい、桜」

「ん、ん……？」

桜め、やけに静かだと思ったら座りながら寝てやがった。  
首をコクコクさせてたぞ。

「桜、眠たいんなら妃奈と一緒に部屋へ行きなさい。ちゃんとベッドで寝るんだぞ」

「ねむくないよぉん。う……ひっく」

目蓋閉じてるし。

俺が酔っ払いの面倒を見ていると、後ろから水野がやって来た。

グラス片手にすり寄る水野は少し頬に赤みがさしていた。

「あらま。二人ともギャップスゴいなあ」

それっきり、またオヤジたちの輪の中へ帰っていった。

何となく気になっただけらしい。

「しゅう……いちっ！むヒを……するなあ！」

だから無視だつてば。

またもや喋りかけてもないのに無視などと言う暴君が一人。

酔っ払いの相手はこれが初めてなので、ここまで常識が通じないとは思わなかった。

どうしようかな、この二人……。

「無視してないよ。ほら、頭撫でてやるから許せ」

妃奈の頭に手を置いて撫でてやると、大人しくなった。

ホントに小動物みたいだな。

俺が手をどけてみると、妃奈はかなり不機嫌そうな表情になった。

「んんっ……もあつとしろっ」

そう要求する妃奈はふらふらの頭で俺の心臓目掛けてヘッドバッドをかましてきた。

もう、面倒くさいなあ。

仕方ないからまた頭を撫でた。

猫のように顔を和ませながら、力を抜いてもたれ掛かってくる。

酔うとこういう男子が困ることばかりして来るもんなのか。

俺が妃奈をこのまま寝かしつけるかどうか思索している時、すぐとなりから桜の声が聞こえてきた。

しかもすすり泣くような声だ。

ふと桜の方を見てみると、本当にすすり泣いていた。

「うっ……うっ……ひっく……」

桜は大きな黒い瞳から、これまた大粒の涙を流している。

泣いてる桜も見ものだが……やっぱり何とかせねばなるまい。

ああ、面倒くさいなあ。

小さい女の子みたいにぐすんぐすん泣かれちゃ困るんだよな。



「今度はどうした、桜。なんで泣いてるんだ？」

「うつ……しゅーちが……す、る……」

桜が俯くので表情がよく判らない。

「え？なんだって？」

「しゅ、しゅーいち……」

「ああ、俺がどうしたんだ？」

桜はパツと顔を上げ、目にいっぱい涙を溜めている。

視線がバツチリ合い、潤んだ瞳をこっちに向けてくる。

どうする、アイフル。

「うつ……しゅーいちが……ひなとばかりなかよくする……」

はあ、酒の力とは恐ろしい。

あの勝ち気な桜を幼児化させてしまうとは。

妃奈とばかり仲良くするって、俺を幼稚園の先生か何かと間違っ  
てんじゃないのか？

妃奈は頭撫でないと拗ねるし、桜は急に泣き出すし、水野が酔わな  
くて助かったぜ。

俺はもういっぱいいっぱいだ。

「それで？何してほしいんだ？」

「……………なでる……………」

桜は視線を少し下げ、カーペットを陰しい顔で凝視している。

その頭の上に左手を乗せると、一瞬目を瞑ってから嬉しそうに笑っ  
てくれた。

ニコニコと微笑む桜の顔は見ているとこっちまで嬉しくなる。

「しゅ……………いちい！」

嬉しさが臨界点に達したのか、腰に届こうかという麗しい黒髪を舞わせながら両手を広げて抱きついてきた。

首に腕を回して、顔が触れ合うような距離からこちらの目を見てくる。

至近距離からだと思の顔はとても火照って見える。

「ん……しゅっ……いちい……」

「え……？うえうえうえ！？」

トロンとした目のまま、桜が跳んだ。

勢いをつけて俺に向かって飛び込んできた桜は、そのまま俺を押し倒そうとする。

抱き付いた状態から飛び込んでいるため、勢いはさほど強くない。

だが、体勢が悪い。

尻についているから踏ん張りがきかない。

オマケに右腕は妃奈の頭を包み込んでいるし、左腕は桜の腰に回している。

腕を突っ張る前に

ドサツと押し倒されてしまった。

右側には妃奈、左側には桜。

二人とも俺の胸を枕にし、それぞれ半身ずつ俺に預けてくる。

ゼロ距離の密着状態がサンドイッチだ。

俺は言い知れぬ感情に襲われたが、二人があまりにも可愛い寝息を立てているので気にならなかった。

水野とおじさんと西園寺さんは、いつの間にか川の字になりながらツブれていた。

この短時間にやたらと呑んでいればそうなるさ。

職業不明のおじさん二人と仲良く一緒に酒吞めるなんて、酒に強いだけじゃ不可能だな。

三人で暴れ回った結果友達になったんだろう。

みんな一升瓶片手に夢の中だ。

妃奈と桜も一口程度じゃここまで酔わんだろうに。

自分の娘を酒乱状態にして、恥ずかしくないのだろうか。

酒乱……そういえば、桜は酔拳使えないのか。

酒吞むの初めてとか西園寺さんが言ってたし、当然か。

安心すると同時に、少し残念な気もする。

まあ、使えたとしてもこれじゃあな。

俺が桜の髪を優しく撫でると、ごそごそと身じろいだ。

体をスリ寄せてくるからくすぐったかった。

さて、そろそろ戻らなければ。

泉が不思議に思ってる頃だろうし、こんな状態で眠ってしまうわけにはいかない。

妃奈に要らぬ心配をかけてしまう。

桜にどつかれるのもイヤだしな。

桜にしる妃奈にしる、酔うと面白かったな。

妃奈はもう少し積極的に自己の存在をアピールするべきだ。

引っ込み思案ではないだろうが、相手のことばかり考えるのもあまりよろしくない。

その点、酔った妃奈はこっちのことなどお構いなしだった。

言葉遣いは多少頂けないので、足して二で割るといい感じになるんじゃないのか。

桜も絶対足して二で割るべきだ。

目を腫らして泣かれるのは勘弁だが、素直でおとなしい（？）のは大賛成だ。

結局、人間は表裏でバランスを取ってるんだろうな。

ただこの二人は極端なだけ。

人間として個体でいるならそんな事はどうでもいい。

表だろうが裏だろうが結果的にいいヤツならそいつはいいヤツなのだ。

しかし、良い部分と悪い部分、裏にしまつなら悪い部分に決まってる。

集団で生きていく人間にとって、コミュニケーションが必要になってくるからだ。

ただ……それでは隠すだけで根本的な解決にならない。

だから、良き理解者がいるんだ。

悪い部分を見せてもそれだけに捉われず、ちゃんと理解してくれる人が。

それで初めて、人は悪い部分を改善できる。

そのためなら酒は真価を発揮してくれる。

酔っているから、という理由で人の裏を垣間見れるからだ。

酔っている妃奈の良いところと悪いところを見たから、表の妃奈と比較できる。

妃奈の欠点を正してやることができる。

妃奈も桜も目を覚ませば表に戻る。

その時必要なのは、俺が理解し、指摘し、導くことだ。

俺がそんなに達観した人物ではないのは百も承知だが、俺にはその責任がある。

義務とは、知ってしまった事実にもついて回る。

不可抗力であつたとしても問答無用だ。

今の俺に出来る事は　せいぜい、風邪を引かないよう毛布でも持ってきてやるぐらいか。

俺は両腕で二人を引きはがした。

しがみついてきたが、難なく離れてくれた。

ごろん、と転がり、それでも起きなかった。

名残惜しかったが、仕方がない。

俺は立ち上がり、毛布を探しに廊下へ戻った。

リビングへ到着する前に二つほど部屋があった筈だ。

扉はもう少しあったが、一つは確実にトイレだろう。

そのうちの一つを開けてみると、そこは寝室だった。

おじさんの部屋であろう簡素な棚やらが置かれている。

大きなダブルベッドから毛布を剥ぎ取り、またリビングへと踵を返した。

おじさんと水野、それと西園寺さんにまで届くように毛布をかけてやる。

長さが少し足りなかったので、おじさんには二回転ほどしてもらった。

次に、妃奈の部屋を搜索する。

間取りは完全に一致しないので、骨が折れそうだ。

またもや廊下に戻り、残りの扉を開けてみた。

一つはやはりトイレ。

もう一つは書斎のようだった。

おじさんに必要かどうかは疑問だが、あるのだから仕方がない。



となると、リビングから続く階段の先　　二階か。

俺は階段を上り、二階へ向かった。

部屋は三つ……二人で住むにはいらないだろう。

妃奈の家も母親が居ないから部屋が余るのは当然なんだがな。

俺の家も似たようなモンだし。

とりあえず一つ目。

開けてみると、そこには何もなかった。

カーペットが敷かれている以外本当に何も無い部屋。

物置ですらなさそうなので、さっさと二つ目の扉を目指す。

ガチャリ、と音がする。

開いた扉の向こう側には黄色いカーテン。

部屋に足を踏み入れ、辺りを見渡した途端

頭の中で、なにか音がした。

直立していた棒が転げ回るように、ぐるぐると脳が引っ掻き回される。

俺はいつの間にか床に膝をついていた。

黄色いカーテンに花柄のカーペット……。

他には何もないというのに、虚無感を全く感じさせない部屋。

リビングと何ら変わらない人間の雰囲気。

そんなものが、この部屋には漂っている。

そして、俺は確実に “この部屋” に狂わされた。

脳みそを直接握られているかのような頭の痛み。

それは多分激痛。

痛みを感じているものの声を出そうとか頭を押さえようとか思わなかった。

おそらく眉一つ動かしていないだろう。

これがいわゆる放心状態。

痛いけれど、それが俺のものじゃないみたいに駆け抜けてゆく。

思考すら無意味。

イコール行動ではない思考など無意味。

感情など無関心。

意味の無い思考に感情の入る余地が無い。

今、ここには“無”が無い。

無価値無関心無関係無感動無意味無意識無抵抗無定義

あらゆる“無”をはねのけ、“無”が流れ込んでくる。

この感覚      どこかで……。

鉄の金属片が空高く舞い上がり、物凄い速さで直撃する。

飛んでいく俺。

そして俺が流れ込む。

……………違う。

あの時は俺ではなく外に意味があった。

危険や怒りに苦しみ。

それが俺を突き動かした。

今は無いのか      ？

いや、俺が“皐月柊一”である以上意味はある。

反吐が出るほど些細な事だが、義務がある。

なら……存在意義を放棄してやる

。

。

.....  
.....  
.....。

……目が覚めた。

単に、そう思った。

俺は眠りから覚めたのだ。

無理な体勢で眠っていたためか、体の節々が痛む。

俺は壁に寄りかかり、座り込みながら寝ていたようだ。

かなり体が重いのもそのせいだろう。

そこで気付いた事だが、今日は学校あるんじゃないのか？

かなり焦り気味に時計を見てみると、六時の手前だった。

何となく一安心した。

だが、俺や妃奈はともかく、泉たちはどうするのだろう。  
まだ起きてはいないだろうし、学校の準備があるだろう。

いや、泉には俺が服を貸せば何とかなる。

あいつらは制服もカバンも持ってきている。

ちゃんと考えているだろうから、心配はよそう。

周囲に目線をやると、みんな仲良くスヤスヤと眠っていた。

おじさんはともかく、西園寺さんは仕事があるだろうに。

いい年して何やってんだか。

俺が持ってきた毛布を奪うように引つ張る水野。

それでおじさんも西園寺さんも簡単に奪われてしまった。

独り占めした毛布にくるまりながら静かに眠る水野の表情は、年相  
応の女の子のそれだった。

昨日呑みまくってたのが嘘みたいだ。

それで昨日の事を思い出し、妃奈と桜に目をやった。

こちらは体をくっつけて仲良く寝ている。

毛布を奪い合うこともなく、安心しきった表情をしている。

……そういや、泉をほったらかしにしてた。

あいつが風呂に入ってから俺が眠るまで何して

俺は……何をしてたんだろう。

毛布を取りに二階へ行つて、それから……。

ダメだ、思い出せない。

きつと俺も呑み過ぎたんだろうな。

あの後毛布を妃奈たちにかけてやって、それからこんな所で寝てしまったんだろう。

全く情けない。

これじゃ人のこと言えないな。

二度寝して起きたら昼、なんてシチュエーションはごめんなので、俺は立ち上がった。

取りあえず妃奈の家を出て、我が家へと帰投する。

廊下を渡りリビングへ行くと、ソファで泉が眠っていた。

「おい、泉。朝だぞ。早く起きなさい」

泉は鬱陶しそうに寝返りを打ったあと、上半身を起こした。

「……柊か。何なんだ、こんな朝早くから」

泉は目をこすりながら起き上がった。

「今日学校行かなくちゃならんだろ。どうせ服とかないんだろ？」

大きなあくびをしながら頷く泉。

「泉、料理はできるか。腹が減った」

「一応人並みにはできるが、材料がなければ物理的にできない」

そりゃそうだ、とばかりに相づちを打つ。

後で妃奈に朝ごはん作ってもらおうかな。

「それと泉、昨日は悪かったな。帰れなくて」

「……寝ぼけてるのか？俺が昨日神谷の家に行った時、話は済んだろ」

「そう…なのか？昨日は酒呑んだからか、記憶がごっそり無いんだ」

「ああ。先にベッドで寝ていたと言ったのは柊の方だぞ。夜中の一時まで粘ってみたんだが、さすがに無理だった」

なるほど、そういうことか。

ならなおさら泉には悪いことをした。

また謝るのもヘンなので、俺は顔を洗いに行った。

今の俺に冷たい流水は効く。

一発で完全に覚醒した。

こう、種がキラーンと。

覚醒したところで俺は泉の着替えを用意してやった。

それからすぐに顔を洗いに行くよう促し、神谷家に舞い戻った。

やはりみんな起こしておかねばなるまい。



「妃奈、起きてくれ。朝だ。コケコッコーだ。学校あるんだぞ」

妃奈は顔をぷいと背け、また寝息を立て始めた。

俺は標的を妃奈から桜に変えた。

「起きろ。遅刻するぞ」

肩を揺すってみるが、あまり効果がない。

桜までもが寝坊助と化してしまった。

「おい、桜。メイド服着せるぞ」

桜に対する反則的なまでの切り札。

桜はパチツと目を開いた。

のそのそと体を起こし始める。

「ん……柊……」

桜が虚ろな目で見つめてくるので、昨夜の暴挙を思い出してしまった。

勢いよく抱き付いてきた時の潤んだ瞳や柔らかい感触。

その全てが鮮明に蘇り、急に恥ずかしくなった。

やはり美少女を二人も抱き締めながら寝転ぶなんて、精神的によくなかったんだ。

これで桜が覚えているなんて事態になろうもんなら……。

「あたま………」

桜がボソツと呟いた。

ヤバイ、俺が桜の頭を撫でたこと覚えてる!?

「頭……すんごく痛い……。ガンガンする………」

ふむ、どうやら桜は二日酔いを訴えているだけらしい。

慣れない事した代償だ。

「そりゃ二日酔いだ。よく覚えとけよ、呑まれるなら呑むな」

桜は頭を押さえ、まだふらふらしている。

頭がぐるぐる回っているようだ。

「ん……学校行く……」

眠そうに目をこすりながら呟いた。

まだ少し寝ぼけているようだが、学校には行くらしい。

今は取りあえず寝ぼけ眼の桜をなんとかしよう。

「ほら、立てるか？そのまんまじゃまた寝ちまっぞ」

俺は立ち上がり、桜に手を伸ばした。

桜はそつと俺の手を握ると、支えにしながらゆっくりと立ち上がった。

寝ぼけているせいか、それともまだ酒気が抜けていないのか。

立ち上がったのはいいものの、足取りはおぼつかなく、ふにゃふにゃと倒れ込んでしまった。

「あつ、おい桜」

咄嗟に腕を差し出し、桜を背中から受け止める。

「……柊……」

あろうことか桜は、俺の腕の中でスリスリと抱き付いてきた。

ますます蘇る昨夜の出来事

女の子の柔らかさがまた腕や胸を通して襲いかかってくる。

昨日の桜は酔っぱらってたからまだ許せたが、今は違う。

酔ってはいないだろうから、多分寝るときに布団とかを抱きしめるクセがあるんだろう。

あんな一生に一度あるかないかの体験は、繰り返すべきではない。

「み、水……」

まるで傷付いたサムライのような声で呟いた。

目が閉じているので、未だ睡魔と交戦中だろう。

俺は桜をずるずると引きずりながら水屋に手を伸ばした。

グラスに水を注ぎ、桜の口元まで持つていつてやる。

桜は唇にグラスが触れたのを確認すると、両手で握りしめた。

俺に寄りかかったままの体勢で、喉をコクン、コクンと鳴らしながら一気に飲み干してしまった。

空のグラスを俺に手渡し、少しは目が覚めたのか自力で立ち上がった。

「おはよ……柊」

「ああ、おはよう。目は覚めたか？」

「うん。頭がやたらに痛いけど目は覚めた」

「そうか。なら……着替えたらどうだ？その、目線のやり場に困る……」

桜はハツとなり、初めて自分があられない姿になっていることに気が付いた。

あらわになった胸元を隠すように腕を交差させ、俺に背を向けた。

「……もしかして、私が寝てる間に変なコトしなかった？」

「あのな、俺がそんな鬼畜に見えるか？せいぜい寝顔を観察したぐらいだ」

それを聞いた桜は、顔を赤らめながら振り向いた。

「う、の……変態っ！スケベっ！根性なしっ！カタツムリっ！」

最後にウェスカルゴオ（ここ、発音注意）とか言われたのは意味が分からないが、さすがに傷つくなあ。

「またそんな可愛げのないことばかり言って……。昨日の桜の方がよっぽどカワ」

何とかそこで、言葉を飲んだ。

まったく、自分でも赤面していると判るほど沸騰している。

これ以上思い出してはならんだ。

桜のやわらかい黒髪を撫でたことや抱きしめたこと。

それは妃奈にも共通するのだが、やはり目の前に本人がいたのでは  
気恥ずかしい。

ましてや口にでもしようモンなら、どんな仕打ちを受けるか判ら  
ない。

俺、今ものすごく目が泳いでるだろうな……。

「昨日……？昨日……きのう……機能？」

顎に指を当てながら、少し考え込む桜。

おそらく最後の“昨日”は発音がおかしい。

ああ、と小さく漏らした桜はポンと手をついた。

「確か、ここに来てみると、何故かお父さんがいて、酒呑めとか言  
われて……少し吞んで……気分が悪くなって……」

つい昨日の出来事を順々に思い出しているようだ。

ほどほどにしてもらわなければ……。

「沙樹に水もらって、一気呑みしたら余計クラクラしてきて……それで……?」

ここまでのようだな。

記憶の終点に辿り着いた桜は訝しむような表情で暗中模索をくり返している。

多分水野にもらった水ってのは水じゃないんだろう。

水と言われて差し出されれば、俺だって見分けがつかない。

俺の予想である、水野超いたずらっ子疑惑は強まるばかりだ。

酒に弱い人が一気呑みなんてするもんじゃない。

妃奈もきつと同じようにハメられたんだろう。

「そりゃ大変だったな。でも今はホントに早く着替えてきてくれ……」

桜は俺にキツイ一睨みをくれると、俺を警戒しながら二階に行こうとする。

階段に片足をかけた時、思い出したかのような顔で振り向き、トコトコと戻ってきてから妃奈を担いだ。



「俺が連れて行こうか？担ぎながら階段はツライだろ」

俺が少し近寄ると、桜は無言の抵抗をしてくる。

じとっつとへびのような目つきで。

「……………」

あまりの恐怖に顔をそらしてしまう。

ああ、今やっと理由が判った。

桜が二階に行ってる間、俺が妃奈に狼藉を働かないように連れて行くのか。

俺が寝てる相手にそんな汚いことするかよ。

ていうか水野はいいのか。

桜は散々こちらを睨んだあと、妃奈に肩を貸しながら一生懸命に階段を登っていく。

信用無いなあ、俺。

けどそんな俺にも出来ることがあるわけで。

「うおーい水野。起きたまえー」

少し離れた所から叫んでみた。

これぐらいじゃ起きてはくれないとおもったのだが、

「むー？朝ー？わかったー」

きっかりと起床してくれた。

むくつと起き上がると背筋を伸ばし、こっちを見つめてきた。

「……………なに？」

「……………女の子には色々準備があるから、シューマツハは家に戻りなさい」

水野は俺をシツシツと追いやるようなジェスチャーをする。

そんな気はしてたんだがね。

どうせ俺みたいなカタツムリがいちゃあくつろげないんでしょう。

ええええ、男同士寂しく家に引きこもってればいいんだろ。

俺は水野の辛辣な目線を受けながら神谷家を後にした。

寂しく俺の家に戻ってみると、泉がいた。

いや、いるのは当たり前なんだが、床に倒れ伏していた。

「……このご時世に行き倒れは珍しいな」

俺は道端の犬の落とし物を見るような目つきで泉を見下げた。

足でツンツンとつついてみると、まるで芋虫のように蠢動した。

「うお……さみイ……」

泉が漏らす苦悶。

そりや玄関先で居眠りしてたら寒いわな。

「起きろ」

短く言い放ち、断頭の勢いで泉の首に手刀をかました。

地に伏しているというのにバウンドする泉。

バスケットボールのように跳ねた泉は、その勢いで素早く立ち上がった。

「うむ。ナイスな手刀であった」

既に制服姿へと変わり果てた泉を見て、少し時間が気になった。

時計を見てみると七時を回っている。

急がなければ間に合うものも間に合わない。

俺は自らの私室へ直行し、サクツと着替えを済ました。

通学カバンにいれるような代物はないので、俺の準備は完了である。

後は女子高生連中なのだが、今行くのはちとマズい。

どうしたもんかと悩んでいると、我が家の扉が開いた。

顔を出したのは水野。

さっきまでついていた寝癖は消え失せ、妃奈よりも少し短い髪が流れる。

「みんな準備終わったから妃奈の家に集まって。美味しい朝ご飯が待ってるから」

それだけ言い残し、全力疾走で消えた。

台風のようなやつだと、泉と顔を見合わせた。

「…………行くか。体が栄養分を欲しておるわ」

俺は泉と一緒に神谷家へお邪魔した。

入ると、パンが焼けるような香ばしい香りが漂ってきた。

事実、パンが食卓の上に人数分用意されていた。

美味しい朝ご飯とは、パンを焼いてジャム各種やマーガリンを配置しただけか。

とはいえ腹が減った。

炭水化物とみればすぐさまかじり付きたくなる衝動にかられる。

陰鬱な表情をしている妃奈と桜はもう安置しておこう。

さわらぬ神に祟りなしだ。

「早く来て来て。私が焼いたんだから絶対美味しいよ」

オーブントースターの能力を我が物にしてしまった水野は、さつきとは反対に俺と泉を招き入れた。

ああやっていつも優しく笑ってれば水野だって見栄え良いのに、勿体無い。

俺は食卓に座り、トーストのお供であるブルーベリーを手にとった。

桜はイチゴ、妃奈はマーマレード。

水野はマーマリンを塗りたくり、意外にも泉はナマでそのままいった。

サクサクと快音が響く中、言葉を交わすのは泉と水野ぐらいだった。

俺は少し交ざる程度で、残った二人は沈黙のまま事務的にパンをかじる。

妃奈も桜も、まるで幽鬼のようだ。

二日酔いのせいで元気が欠片も無い。

沈黙を美とするにしても、暗い雰囲気放つのは少し違う。

ついでに水野が淹れてくれた紅茶を飲む音すら聞こえない。

そんなこんなで朝食も無事に終わり、八時を目前に控えた頃み

んなで家を出た。

五人で登校するなんて初めての体験。

ワクワクしてくるのは俺が子供っぽいからか。

「暗い人がいるにしろ、こんな人数で学校に行くなんてワクワクするね。集団登校なんて久しぶり！」

水野がくるくると回りながら喜々としている。

どうやら俺以外にも子供はいたらしい。

辺り構わずはしゃぎ回る水野はまさに子供そのもの。

呻き声を漏らしながら付いて来るお二人さんも、となりであくびする泉も、ついでに少し前で踊り狂っている水野も、みんななかなか良い奴だ。

俺が思っていた以上にバラエティーに富んでいる。

こっちの土地に来て幸せだから、そんな理由かもしれない。

そついや、俺が預けられてたあの土地      クソジジイ（祖父）はどうしているだろうか。

相変わらず剣術に没頭したり怪しげな黒魔術でも開発しているだろうか。

あの土地にジジイさえ居なければ、今と変わらぬほど楽しかったろうに。

俺の体を鍛えてくれたあの山は健在だろうか。

今でも切り崩されることなく生き生きとしていて欲しい。

なんたつて、あそこには俺のダチがいる。

腹が減ったら襲いかかってくるなんてお茶目なヤツらだが、それは当然。

むしろそれが自然だ。

冬になるとみんな眼の色変えて一触即発だもんな。

今の時期ならわりと大人しいだろ。

バカな、俺は何を考えている。

まるでホームシックにかかったみたいだ。

今いる場所がイヤか？

今一緒に歩く人間がイヤか？

ハッ、そんなものくだらない。

俺にしてみれば全てが勿体無い。



山も、友達も、家族も　。

……けれど、俺は手放したくない。

身に余ると知っていても、絶対に手放すもんか。

俺はいつの間にかキザったらしくなってしまった。

理屈っぽくてワガママなのは昔から。

人見知りが激しいのは抑えていたが、もはや限界。

誰に言われたんだっけな、自分らしく在りたいなんて。

俺も早く、そうなりたいもんだ

## 八話 集いし闇

水野たちによる襲撃から、数ヶ月。

非常に残念なことに、親父が帰って来やがった。

親父を毛嫌いしているわけではないが、今まで一人で好き勝手やってきたため少し陰鬱になる。

ここ最近体の調子がすこぶる悪い俺にとっては良いことなのか悪いことなのか。

けれどまあ、帰ってきたものは仕方がない。

季節は夏。

あの暖かかった春が今ではム力ついてくるほど、暑い。

ちなみに教科書も厚い。

ム力つく。

そんな陽射しが兵器としか思えない中、俺は毎日登校し下校する。

その繰り返しの毎日に現れた親父こそ、転機の象徴だった。

俺がいつものように帰宅すると、当たり前のようにヤツはいた。

まるでそこが自分の家であるかのようにくつろいでいる。

団扇片手に寝転ぶ姿が懐かしい。

「……………よう、オッサン」

リビングで夢見心地のオッサンに一声かけ、自分の部屋へと戻った。

取りあえず着替えてみる。

「ったく……………帰るなら電話の一本でもいれろよ」

一人ゴチながら、またリビングへと舞い戻った。

なんか眠ってしまっている親父を見ると、疲れてるんだろうなと思う。

だがそんな事はどうでもいい。

「親父、起きろ」

肩を揺すってみると、簡単に目を覚ました。

「ああ…柊一か。何か用か？」

久しぶりに息子に会って何か用かもないと思うが、用はある。

「妃奈のおじさんはいつ頃こっちを出るんだ？」

「なんだお前、気付いてたのか」

「当たり前だろ。妃奈はまだ気が付いてないだろうけどな。で、いつ頃？」

「一週間後には出立する。妃奈ちゃんについては、『頼んだ』だつてさ」

「そうかい……………」

おじさんが行ってしまうえば、妃奈は一人。

女の子を一人で家に置いとくわけにもいかないし、どうしたものか。一人でやっていけないなんて事は有り得ないが……………てゆうか、妃奈がウチの家事を手伝ってくれなきゃ俺はとうに死んでいると言っ

ても過言ではない。

神谷家にしろ皐月家にしろ、妃奈がみんなのお母さんみたいなものだからな。

俺にとつちや妹みたいでもあり親父にとつちや娘も同然。

なくてはならない存在には違いない。

かといって妃奈だって年頃の女の子だし、ウチに呼ぶつてのもなあ……。

俺も何かと困るし……緊張の嵐だな、きつと。

「妃奈ちゃんが一人ぼっちじゃ可哀想だから、ウチに招待する。依存はないな？よし、これにて決定」

「ちよつ……！依存なんて山ほど」

俺の抗議の声を遮るかのように、最高のタイミングでインターホンが鳴った。

石化してしまった俺の横を通り過ぎて玄関へと向かう親父。

背後からガチャンと音がして、足音が近付いてくる。

もちろん二人前。

恐る恐る振り返ってみると

「な、なんで……！？」

先日、彼の父から話を聞いた。

うちのお父さんがもうすぐ仕事に行くらしいので、私を預かってくれるらしい。

嬉しいのだが、抵抗がないと言えば嘘になる。

とはいえ誘いを断る理由もなく、取りあえず挨拶に行くことにした。  
ウチから徒歩数秒、すぐとなりだ。

鞆を置いて家を出て、まずインターホンを押す。

少し前に彼からインターホンなんて押さなくていいと言われたが、未だ聞く気にはなれない。

ボタンを押して数秒、いつもならすぐに応答する彼にしては遅すぎる。

少し待ってからまた押してみたが、結果は同じく応答なし。

私とほとんど同時刻に帰宅しているハズだから、いないなんて事は有り得ない。

寝てる……なんて線も却下だ。

この短時間に眠ることなど出来ない。

少々不安になり、無礼を承知でドアノブに手をかけた。

簡単に扉は開き、中の景色を鮮明に映し出してくれる。

……………？

玄関には、少し違和感があった。

いつもと違うような気がする。

だが、その疑問は視線を落とせばすぐに解決した。

常に一人分しかなかったハズの靴が、いつもより多い。

理由は当然、彼の父が帰ってきたからだ。

だから靴は必然的に二人分……でなければおかしい。

そう、目の前にはそのおかしい状況が広がっている。

靴が二組あるのは判る。

けれど、そのとりにはもう一つ　靴というか、ゲタのような履き物がキチンと置かれていた。

持ち主なんて推理して判るワケでもなし、気には止めなかった。

入ってみれば確実に判る事だ。

私は靴を脱ぎ、リビングまでの短い廊下を渡る。

リビングとの境目、境界にもなっているドアを数センチ開いたところで

「お前　っ！何でここに居る！説明しろっ！！」

思いも寄らぬような大声で、そう叫ぶ声が聞こえた。

一瞬頭の中が真っ白になり、またふと我に返った。

今の声は取りあえず、彼のものだと思う。

あまりに感情が高ぶっていたためか、いつもと声色が違う。

しかし、本当にそんな事があり得るのか……？

日頃の彼は何があっても冷静で、あんな風に怒鳴り散らすことなんて絶対にしない。



それこそ想像出来ない。

でも、この私が彼の声を聞き間違えるワケがない。

そして私は           無意識のまま扉を開いていた。

「あ……………」

そう漏らしたのは、多分私だ。

見慣れた景色の中に溶け込む人々。

驚いたような顔をしている彼と、隣にその父。

二人とも私を凝視している。

だが       もう一人居る。

玄関にあったあの履き物といい、彼の向いている方向といい、明らかに第三者がそこに存在している       ！

おそらくそれは、扉の向こう側。

開けっぱなしになった扉の死角。

私は意を決して中に入り、扉を完全に閉めた。

ボタン、という音と共に現れる第三者

視界に映るその姿は、私の全く見知らぬ人物だった。

「あー、えつと……紹介するよ、妃奈ちゃん。この人は俺の父にあたる人で、皐月 一木<sup>かずき</sup>」

彼の父から紹介されたその人物に目をやる。

五月……という事は、彼の血縁の人なのだろう。

白髪頭の老人      そんなイメージ以外浮かばないほど、見事な私の老人像だった。

古めかしい緑色の着物を着ていて、手には杖。

背は私よりも頭一つ小さめだろうか。

「初めまして……じゃの。どうぞ宜しく」

老人はしわがれた声でそう言って、手を差し出してきた。

節くれだった、細い手。

「あ、初めまして。神谷妃奈です」

私は友好的に握手を求められた事を嬉しく思い、同じく右手を差し出した。

手を握ろうとしたその時、私の手は強く握られた。

「え……………」

老人にではなく、数メートル離れていたハズの彼に。

彼は私を守るように目の前に立ちふさがり、私の手を強く握りしめていた。

「妃奈に触るな……！老害！！」

私の手を握ったまま、悪態をつく。

その姿はまさに驚天動地であり、彼のいつもの冷静さは微塵も感じられなかった。

「老害とは言ってくれるな、我が孫よ。ほれ、彼女も驚いているではないか」

老人　　五月一木は、穏やかな目でこちらに視線をやった。

「黙れっ！用件があるなら早く言え……！妃奈を巻き込むな！」

「ふう……黙れやら早く言えやら、ワケの分からん孫じゃ。よし、必要最低限の言葉でまとめよう」

老人は近くのソファ―に腰をおろすと、威厳のある眼で彼を見据えた。

彼は未だ私の手を握ったまま、遮るように目の前に立ち尽くしている。

私は手を握り返しもせず、かといって振り払いもせず、ただ沈黙を守り続けるのみだった。

「柊一よ、単刀直入に訊くぞ」

「ごたくはい。さつさとしろ」

彼は一段と手を握る力を強めた。

「ふむ。お主、この数ヶ月……“切り替わった”か？」

「……………何の事だ」

「ここ最近、おかしい事はないか？そう、例えば」

老人は深く息を吸い込み、真剣な面持ちで彼を睨み付けた。

「何かの拍子に意識が断線し、その間の記憶が曖昧……………とか」

「……………っ!？」

彼は私の手をギュツと握り、また力を抜いた。

老人の言葉を聞いてから、彼の態度がおかしい。

会った時からおかしいのだろうが、今の彼はさらにおかしい。

多分、意識が断線とかそんな言葉だ。

何か思い当たる節が……………あるのだろうか？

「やはり自覚があつたか。皐月家の宿命……………かの」

「でも、親父の代もその前も、ずっと昔からこんな事なかったんだろ？俺だってそうだ。何だって柊一に限って……………」

「…………親父も何か知ってるのか。ジジイにしる親父にしる、知った風な口振りじゃないか」

家族三人で話し合いが始まった。

彼も落ち着きを取り戻してきたようだ。

にしても、話が全く見えない。

皐月家の宿命とか、そんな話は聞いた事がない。

みんな私を置いてけぼりにして、話を進めている。

「ではまず、皐月家の話から始めようかの…………。お嬢さんも聞いておきなさい。あながち無関係ではあるまい」

老人が話を始めた。

私も関係がある…………？

「元来、皐月家は特異体質の子供が産まれる家系であつた。その理由は判らん。遙か昔から、特異体質を受け継いだ人間には枚挙がない……と言つより、全ての人間がそうじゃつた」

「……てことは、ジジイも親父もか？」

「ああ。一つの例外もなく、だ」

……どうやら皆さん、その特異体質とやらが理解出来ているらしい。

私も関係があるのならば、知っておく必要があるのではないか

「あの……その特異体質つて何ですか……？」

誰に問うワケでもなく投げかけてみる。

途端に沈黙が広がり、視線が集中する。

訊いてはいけなかつたのだろうか。

「……そうだな、妃奈ちゃん言葉で例えると、二重人格……かな」

「二重人格つて……！でも、終くんに変わったことなんか」

「変わりなどないんじゃないよ、言わばコピーなんじゃから」

老人が私を制するように答えた。

「本来現れるべき優性形質と現れぬ劣性形質。皐月家はその両方が現れてしまうだけなんじゃ」

優性形質と劣性形質については……いつか理科で習ったことがある。

確か、親の形質が現れた方が優性でその逆が劣性だったはずだ。

優劣ではなく現れるかどうかの問題らしいから、どちらかが優れていたり劣っているワケではない。

ただ、人間は優性形質を持って誕生する。

産まれた時点……いや、もっと前から決まっているはずだ。

「人格は一つなんだよ、きっと。妃奈ちゃんは優性形質を持って産まれてるだろう？もし劣性も持っていたら……どうなると思う？」

優性と劣性……その両方が具現するなど、有り得ない。



具現したならそれは優性であり……要は二人分の形質を持って産まれて

「二人分の形質……かな。産まれた後にそれが“切り替わって”しまっ……？」

「妃奈、理解早いな。俺なんて今でもチンプンカンプンなのに」

「妃奈ちゃんの言った通り、皐月家は産まれた後に形質が“切り替わる”。でもそれは全て優性が勝るんだ。だから、結局優性形質が出てくる」

……その話が本当なら、何が問題なのだろう。

優性が出るならそれはそれでいいのではなからうか。

「ところが柊一の場合、優性形質が引っ込んでるんだ。それで優性と劣性が拮抗し、今でもどっちつかずなんだ」

「多分……今の俺が劣性で、意識がない間の俺が優性だ。証拠に記憶が残ってない」

「何らかの理由で優性が出てこないとしか考えられんのか……」

「あの一……………」

私はおずおずと、静かに意見する。

思ったことを、そのまま

「それで、何か問題があるんですか……………」

優性だろうが劣性だろうが、どちらも同じ柊くんなら別にいい。

それが私の意見だ。

「優性と劣性が“切り替わる”とな……………もう、信じられないほど体が  
廢るんだよ」

「今はまだ大した事はないじやろうが、あと数年の内に……………廢人どころか、命すら失いかねんな」

「え……………!？」

そ、そこまで大変とは……………思わなかった。

確かにここ数ヶ月、柊くんが急に気絶したり、救急車で運ばれた事も何度か……。

あれは全部……“切り替わった”時の反動？

だとしたらそれは……大問題……！

てゆうか、何でこんなにもみんな淡々としていられんだろう。

「とにかく、今は形質を叩き出さねばならん」

「んな事言ったってどうするんだ。ぶん殴って治るならアテがあるが」

「優性が引っ込んだ理由を考えよう。最近柊一、何かあったか？」

命を 失う。

「いや、ここ最近は何もない。むしろ楽しかった。それは土地を移る前も変わらない」

彼が 数ヶ月の内に。

「ならばその前　幼年期に、何かあったのではないか？」

存在が　消える。

「木枯にいた頃のことなんてまるつきり覚えてない」

再会してまだ　数ヶ月なのに。

「柊一は記憶力はいい方だろう。少しくらい覚えてるはずだ」

二度と　会えない。

「いいや、本当にまるつきり覚えてないんだ。妃奈なら、何か覚えてるんじゃないか？」

五月柊一が　死ぬから。

「……妃奈？」

また　独りぼっち……？

「おい、妃奈。大丈夫か？」

肩が強く揺すられた。

見上げると、彼の心配そうな顔。

彼はいつの間にか手を離し、今度は私の両肩を掴んでいた。

なんだか急に、心細くなった気がする。

「妃奈……体調でも悪いのか？」

「うっん、何でもない……」

「……妃奈ちゃん、柊一がまだこっちに居た頃、何かおかしい事があったかな？」

おかしい事……と言っても、私が覚えてるのはかなり断片的な記憶だし……。

あの時の約束か、彼の性格や態度ぐらいしか……。

「かなり曖昧なんですけど……私たち以外に、誰かもう一人居たよ  
うな……」

そんな気がする。

遊んだ時の記憶なんてほとんど残ってないが、彼と二人きりではな  
かった。

もう一人、同じ年齢位の子供が居たと思う。

私がこの話をする、おじさんの顔が暗くなる。

「……もしか、アレが原因なのでは？」

老人がおじさんに向かってそう言った。

おじさんは俯き、暗い表情をしていたが、やがて吹っ切れたかのよ  
うに顔を上げた。

「柊一が小さい頃の話なら、有り得なくもない……か」

「アレ……？アレってなんなんだ、一体」

「……今は話せない。いつか話すかもしれないし、話さないかもし

れない」

おじさんは、私に言っているのか柊くんと言っているのか判らないような調子で呟いた。

そして、およそ集中しなければ聞こえない声で『知ったところで…』と付け加えた。

「……今日はこの程度にしておこう。いずれまた、機会はくる」

老人は背をくるりと向け、失礼した、とぼやくように言ってからこの空間を去った。

「……すまん、柊一。しばらく家を空けるよ」

おじさんは私に愛想笑いを注いだ後、老人の後を追った。

急に残された私と彼は顔を見合わせ、言いようのない気まずさに襲われた。

今までの突拍子もない会話が嘘のように静まり返る。

「……ごめんな、妃奈。あんな意味不明な話されたら戸惑うよな……」

先に口を開いたのは彼の方だった。

深く懺悔しているようにも見える表情は、同時にひどく哀しいものでもあった。

私は何か言おうとしたが、かける言葉も見つからない。

遠くでヒグラシが鳴くのを聞きながら、日は傾く。

鮮やかな西日は、窓から容赦なく射してくる。

「なあ…妃奈……」

彼は穏やかな表情で呟いた。

その眼差しは中空を凝視している。

「どうか……したの？」

努めて冷静に、彼が戸惑わないよう答えた。

彼は一転して、強い決意を秘めた瞳で私を見る。



「一緒に……居てくれないか。俺の家でも妃奈の家でもいい。とにかく俺の傍に、居てくれないか……………」

強く見えた瞳は、やはりどこか哀しげだった。

決意に満ちているようで、不安に満ちていた。

私は彼に応えるため、静かに力強く頷いた。

すると彼は、困ったように眉をひそめながら微笑んだ。

その笑みにはウソが詰まっている。

自分自身を偽るための、哀しいウソが

お昼頃、誰かが部屋に来た。

静寂しか存在しえないこの空間に、足を踏み入れる人間は少ない。

その数少ない人間である彼は、たまに私を訪ねてやって来る。

私には両親がいなく、他に身内もないらしい。

だからその人が親代わり　なのかもしれない。

軽く挨拶をする彼に、私もお辞儀をする。

数週間前、彼がこの部屋を訪ねた時、彼は私にしばらく会えないと言った。

しかし、また彼はやって来た。

私はその事を不思議がると、彼は、予定外だと言った。

その後私は、いつもの質問をする。

彼が来る度にする、特別な質問。

“あなたはどうして　ここに来るの？”

私が言うと、彼は苦笑した。

一体何度目の質問かと、呆れているのだろうか。

いや、そんな事ではない。

彼は単に、答えずらいだけ。

そして彼は、何度目かも判らないというのに、言葉を返す

## 西園寺。

昔から、この名前が嫌いだった。

理由は簡単、人と違うからだ。

名字がではなく、イメージがだ。

西園寺と聞けば一体どういうイメージだろうか。

良家の令嬢、淑やかなお嬢様、貞操が堅い麗人……といったところだろうか。

もっとも、これらは私の場合だけで、他の西園寺さんがどうかは知らない。

そして私は　この西園寺のイメージ通りの人間ではない。

貞操はまあ守ったつもりはないが、今のところやぶっていない。

もし…もしも名字が田中なら、同じイメージが湧くだろうか？

答えはノー、だ。

ただ私の名前が西園寺なだけなのに、他人は私に私以上のモノを要求する。

だから私はこの名前共々、特別というのが嫌いだった。

一度、僕にとって特別な人なんだとか本気で言われたことがあったが、その時はヤバかった。

人間を初めて、ミンチ状ではなくペースト状にしてやりたいと思ったほどだ。

残念ながらそいつはひ弱そうな体だったので、一応踏みとどまりはしたが。

だってそうでしょう？

リアルにモザイクのかかる状態    効果音で言えば、グチャグチャとかペチャペチャとかニチャニチャになるのよ？

人間の練り物なんて想像するだけで気持ち悪くなりもん。

……それに、私はよくがさつとか乱暴とか言われる。

それはきつと私の父のせいだ。

父が、女の子は危ないとか言って習わせていた護身術が……いつの

間にかその域を出てしまったから。

……曰わく、格闘技ではなく殺人技術の道を走っているらしい。

私の識っている技術は、あくまで護身術。

護身術は自らの身を守るためのモノであり、受け身しかない。

傷つけられる、だから相手を制する。

原因となる力がなければ意味を持たないのだ。

だから私の護身術は殺人技術のように使われているんだ。

傷つけられる、だから相手を叩きのめす。

格闘技のように自ら闘うのではない。

程度の違いで分かれてしまうなんて、全く以て嘆かわしい。

……けれど、最近変なヤツが現れた。

どんなに痛い目に遭っても懲りずに私に話しかけてくる変なヤツ。

私に特別ではなく普通を求める変なヤツ。

殴られると分かっているのに言いたい事を自重しない変なヤツ。

なぜかそいつには、本気で話が出来た。

自分を偽る事なく、ありのままに

そして、私がつい漏らした、『私らしく』という言葉を、そいつは肯定した。

私が私らしく在りたいと願ったら、そいつは当たり前のようにそれを認めた。

それが たまらなく嬉しかった。

けれど、そいつは決してすごいヤツではない。

人の気持ちを理解することにおいて、ヤツ以下の存在などありはしない。

つまり、人の気持ちが解らないヤツなのだ。

運動神経はそこそこだが、成績は底無しに低い。

別に騒がれるほどの美形なワケでもなし、平均を下回っているようなヤツだ。

一部の女子達が何やら買いかぶっているようだが、所詮は買いかぶりだ。

理屈っぽいしたまにキザだし女装させられてたし。

あんなヤツがモテたら世界の男子全員がモテなきゃ不公平だ。

なのにアイツときたら妃奈と仲良いし。

お前に妃奈はまさに豚に真珠！

身に余る宝石は悲しいだけだ！

確か、妃奈とは家族ぐるみのお付き合い……だっけかな。

あ、でもウチのお父さんもアイツと仲良い。

なんか酒呑み仲間になれてるけど、大丈夫かなあ……。

私なんて少し呑んだだけで意識がなくなっちゃったのに。

この前起きたらアイツ居るし！

その上寝顔見られたし！

普通見るかあ？

見ても本人に言うかあ？

……やっぱりアイツは変なヤツだ。

変人っていうのはきっとアイツの事を言うんだ。

しかも私の……む、胸まで見たしっ！

そりゃあ全部じゃないけど……かなりキワドかったな……。

前言撤回、ヤツは変人ではなく、変態だ。

変人＋エッチは変態でしょう、間違いなく。

こうなったら責任を取ってもらおうか。

私がお嫁に行けなくなったらどうするのーとか言っ

けど……やっぱり無理かな。

私じゃきつと、そんなコト言えない。

それに、私はもうとくにお嫁さんなんて諦めてる。

こんな可愛げのない凶暴なお嫁さんなんて、誰も貰ってなんてくれない。

それでも性格を直そうとか思わないのだから、自分でも筋金入りの頑固者だと思っ

私が結婚するには……この性格を知った上で今の私を求めてくれるような人と巡り会わなくちゃならない。

そんな事、有り得ないっていうのに



人は、何のために生きているのだろうか……。

大学に進学しようが就職しようが、その先はみんな一緒。

働いて働いて……後は死ぬ。

それまでに家庭を持つ者もいれば、一生持たない者もいる。

しかしそれらに大差はない。

要は、一個人として、短いとも長いとも言われる人生の中でどれだけ価値のあるモノに出会えるか

妻が自分の命よりも大事、なんて言う奴は大馬鹿者だ。

あらゆる生物の本能 “生きる” ということを忘却してしまった  
のと同義だからだ。

約八十年前後で、自分が噛み締めることの出来る価値なんてあるの  
だろうか……。

この世の中、人間社会というモノは腐りきっている。

人のためと言い作り上げたこの世界に、価値などない。

本能を忘れかけた人間に、価値を見つけることも、ましてや作るこ  
となど出来はしない。

ならば何故生きているのか

たくさん儲けるために働く、成績を上げるために勉強する。

人生の中に価値がないと知っていれば、そんなことしないだろうに。

だが逆に、気付いてしまえばどうだろう。

人生に価値がないと気付けば、あらゆる物事が無価値に成り下がる。

人間の社会に存在する限り……生きることもさへも。

そこで摩擦が生じる。

生きていても仕方がないのに、働かねば生きていけない。

生きることが無価値なら　あとは死、あるのみ。

ただ無意味に生きることさえ出来ないから……死ぬ。

しかし、ここで踏みとどまる者もいる。

ただ単純に“死”が怖いから。

死にたくないから

生きていても意味はなく、何をするにしても無価値。

だからといって死ぬのも嫌。

これこそが最大の矛盾にして苦痛。

死ねない、けど生きていても仕方がない。

人が作った世の中を作り替えるなど絶対に出来はしない。

だから、そういう、言わば“生の真理”を知ってしまった者に、安息はない。

答えなど どこにも在りはしないのだから……。

そう、精々出来るとすれば 目を瞑り、希望もなく生きていくだけ……。

“ぼくと けっこんしよう”

そんな約束を交わしたのは、遙か昔のこと。

淡い恋が芽生えたのも、ちょうど同じ時期。

自分の中の夢想到恋をし、その結果を他人に求める 。

いつしか恋しい人は、傍にいた。

夢想なんてとうの昔に死に絶え、今はその残雪がわずかに残っているだけ。

でも……幼い恋心だけは消えることはなかった。

“こんど会つとき……およめさんになってくれる？”

“こんど会つとき……およめさんになってもいい？”

『……………！』

“なまえでよんでいいのは　フーフだけだもん”

“わたしをなまえでよんでいいのは　きみだけだもん”

『ワタシヲ……………！』

“ぜったいかえってくるからね……………”

“わたしをむかえにきてね……”

『ドウシテ……？』

“いきたく……ないよ……”

“いつてほしく……ないよ……”

『ヒト　ハ　ヤ！』

“ひとりじゃないでしょ？”

“でも、いや……”

ドウシテワタシヲ……ヒトリニスルノ　？

ワタシモ……オヨメサンニナリタイ……。

ドウシテフタリダケ……？

……ワタシガケツコンデキナイナラ

バイイ……。

死ンジャエバイイ……。

死ンジャエバイイ……死ンジャエバイイ……死ンジャエバイイ……  
死ンジャエバイイ……！

……死ネ……。

……死ネ……！

死ネ！

死ネ！！！！！！

## 九話 陽・解禁

五月柊一。

陰曆五月、すなわち皐月の姓を受けて産まれた男児。

遙か昔から受け継がれてきた皐月の宿命を背負い、内なる二面性に苦しむ者。

……二重人格ならばどんなに楽であっただろうか。

苦しみをぶつける相手が自分の中にもいれば、その者を憎むことが出来るから。

けれど彼には、そんなモノ存在しない。

常に自分は皐月柊一であると確信し、行動している。

ただ記憶が少し曖昧で……でもその曖昧なハズの記憶がふと甦ったりと、本当に不安定なだけ。

しかし、それももう終わり。

彼は完全に割り切ったのだ。

陰と陽の差ぐらい解っているんだから、適材適所以外に取る道はな

い。

陰が友好的ならば、陽は情熱的。

皐月柊一は情熱的な方が良いと判断したから、陰は引込む。

昔からそうやってきたのだ。

自分を大事にできそうにないから……他人を優先するだけ。

彼がそう決断した時、本当の意味で彼は“切り替わった”

異変……と言えはそうかもしれない。

現に神谷妃奈は、自らがよく知る少年とは少し違う少年を見た。

そう、五月柊一の特徴であり欠点であり、一部の人間からは最大の難関である事柄が、消えていた。

発端はおそらく……彼の一言から。

一緒に居てくれ……そう言われた時、彼女は頷いた。



だから本当に一緒に住んでいる。

皐月家に、神谷妃奈が居候していると言ってもいい。

そして毎日一緒に過ごし、今も一緒に登校中である。

「けど、急にどうしちゃったの？なんかヘンだよ？」

何気に照りつける日差しの中、彼女は隣にいる青年に問いかけた。

彼はニコリと微笑みを返した。

「ヘン……か。妃奈は今の俺が嫌いかな？」

彼女は慌てて首を横に振り、必死に否定する。

「ならいいじゃないか。俺は妃奈なら、同棲なんて全然オツケーだけど？」

途端に妃奈の顔が赤くなる。

視線を地面に固定しながら俯くのが彼女らしい。

「こんなに暑いのに赤くなったら、溶けるぞ？」

柊一は俯いた彼女の顔を覗き込みながら、ニツコリとした笑みで言った。

「……っ！か、からかってるでしょ！」

妃奈は素早く距離を離すと、柊一を睨みつける。

もちろん、と強く頷く柊一。

「……ふーんだ、もう柊くんのお弁当作ってあげないからね」

ぷいとそっぽを向き、妃奈は柊一を置き去りにするかのような勢いで歩を進めてしまう。

それを苦笑いしながら柊一は急いで追いかける。

「あー、はいはい、悪かったって。だから拗ねるなよー」

隣に並んでも、妃奈は視線を合わせようともしない。

小さな歩幅を頑張って大きくして、子供のように先を急ぐ。

「拗ねてなんかないもん。それに、謝っても許さないからねっ」

拗ねてるじゃん、と心の中で呟き、妃奈のご機嫌取りを開始する。

残念ながら柊一には自炊機能が付属していないので、妃奈のボイコットはかなり痛い。

「じゃあどうやったら許してくれるんだ？生贄でも捧げればいいのか？」

「そ、そんなのいらないっ！」

言って、彼女は顎に指を当てながら思索し始めた。

うーん、と頭をひねり、やがて頭上に電球を光らせた。

「じゃあ……学校までお姫様だっこかな」

彼女は表情を一変させ、冗談混じりに彼に告げた。

この冗談を境に機嫌を直し、また仲良く一緒に並んで歩く。

それが彼女の予定。

それなのに、柊一は

「お姫様だっこ……か。お安いご用だ！」

半ば絶叫しながら、そんなことを平然と言い放った。

「え？」

表情を変える間もなく、妃奈の体がふわりと浮く。

「え！？ちょ、ええ！？」

膝の裏と肩を下からがっしり抱きしめ、妃奈と地面とが平行になる。

「しゅ、柊くん！冗談だってば！」

顔を真っ赤にしながらジタバタと暴れる妃奈。

「大丈夫！落っこしたりしないから！」

そんな事意にも介さず、柊一は妃奈を抱きしめる力を強める。

しっかりと抱きかかえられ、妃奈は抵抗しなくなった。

夏服だから肌が密着するとか、そんな感情が吹き飛んだ。

ただ　　どうでもいいから顔を隠そう。

そう決心した妃奈は学生鞄で顔を覆う　　ハズだった。

残念ながら鞄は柊一の手の中にあるようで、手頃なモノがない。

仕方がないので、妃奈は柊一にぴたりとしがみつки、顔を隠した。

それを発進の合図と勘違いしたのか、柊一は駆け足で走り出した。

太陽のように火照った妃奈を抱えながら、一歩、また一歩と学校を目指す

「……………それで、力尽きたってワケ?……………呆れた」

目を細めながら呆れ顔で、数メートル離れた柊一を見る。

沙樹の隣には妃奈と涼太。

つまり、教室の中だ。

「もう……すごく恥ずかしかったんだから………」

妃奈の顔は未だほんのり赤く染まっている。

「柊も大変だな………」

同情する相手が違つ、と涼太は沙樹に咎められる。

「いい？いくら幼馴染とはいえ、勝手な行動はダメなのよ。こういうのは両者の合意の上でしか成り立たなくちゃいけないの！」

沙樹は柊一にも言つたつもりだろうが、おそらく聞こえてはいない。

席三つ分ほど離れた位置にいる柊一は机に倒れ伏し、死んでいる。

メロスのごとく駆け出した柊一は、校門に辿り着いた頃には燃え尽

きていた。

妃奈とて、軽いとはいえ数十キロはある。

それを両腕だけで支え長い道のりを走りきるなど、燃え尽きなければ到底完遂出来はしない。

故に、柊一は肉の塊と化しているのだ。

「柊よ……燃え尽きたのならば、その灰の中から飛び立ってみせろ！  
！そう、不死鳥のように！」

涼太の願いも虚しく、蠟<sup>ろう</sup>でできた翼はことごとく溶けてしまっている。

不死鳥 フェニックス と言うよりは、墮落者 イカロス の方が適している。

涼太はゆっくりと柊一に近づくと、なにやら呼吸らしきモノが聞こえてきた。

耳を澄まさなければ到底聞こえないような声で呼吸を整えている。

それはどこか不気味で、ゾンビやマミーのようなアンデッド系な声だ。

ヒュゴー、ヒュゴー、という、柊一が既に死に体であることを最高に表現した音声を聞きながら、涼太は歩みを進めてゆく。

「……王子、ご苦労様でございます」

「……うむ、王子とは、筋力と体力も必要であつたぞ……」

密かにお姫様だっこの感想を述べ、柊一は事切れた。

頬に若干の赤みを残しながら

「柊くん……大丈夫？」

見かねた妃奈が、心配そうな顔つきで歩み寄る。

「大丈夫でしょ。男の子なら耐えなきゃね」

こちらは呆れながら、妃奈に付いて来た沙樹。

高く腕を振り上げると、ゆっくりと柊一の頭に手刀をかます。

かまされた柊一は寝起きのような顔で起き上がった。

「……俺のダメージの半分以上は疲労だけど、残りは妃奈の攻撃だ」



一瞬自分に視線が集中したのに気づき、ドキッとする妃奈。

「あれ…？加減したんだけど……」

困ったようにはにかむ。

だが柊一は納得がいかないのか、追求を敢行する。

「大体なー、遊園地の時もそうだったけど、妃奈は手加減を知らないんだよ。普段人を殴らないからかもしれないけど」

「……ほっぺたつねったくらいでそんな……」

むくれながら視線を背ける妃奈。

その瞳の先には五十度ほど昇った太陽。

数分前、校門に到着した柊一と妃奈は、軽めに戦った。

疲弊しきって抵抗すらできない柊一に、彼女は制裁を加えたのだ。

羞恥ゆえに顔を赤くしながら必死に柊一の頬をつねる妃奈の姿は、多数の生徒の目に触れた。

そしてある生徒は妃奈の赤くした顔を拝み、またある生徒は親しい二人の仲に嫉妬した。

それが教室の中に入った今でも続いているのだから、妃奈の怒りも当然だ。

しかし、妃奈を苛立たせる原因は『他人に自らのあられもない姿を目撃された』だけではない。

二人の仲に嫉妬したのは………なにも男子だけではなかったのだ。

言ってしまうえば、それに一番腹を立てている。

今も何気を感じる視線の中に、女子も混ざっていれば言い訳もたたない。

「まったく、皐月くんは後先考えずに行動するからね」

「あ。沙樹、『五月くん』に決定したんだ」

「ええ。いつまでもあだ名を考えるのが面倒で……」

やれやれ、といった風に両手をあげる。

その姿をまじまじと見つめた柊一は、嬉しそうに顔をあげた。

「おっ、水野、俺の名前解ってんじゃん」

「まあ、一応知ってるからね。ていうか本名知らなきゃあだ名つけられないし」

「違う違う。俺が言いたいののは、『五月』じゃなくて『皋月』の名前で呼んでくれたんだなってこと」

「柊くん……それ一緒だよ」

妃奈は可哀想なモノを見るような目で柊一を見つめる。

涼太も同じような目つきだが、沙樹だけは訝しむ。

「え？一緒じゃないだろ」

そう言っつて、柊一は筆箱を取り出した。

中からさらにシャープペンシルを取り出し、今朝のホームルームで配られたプリントに文字を書いていく。

「ほら、これ」

書き終えた柊一はプリントを妃奈たちによく見えるよう突き出す。

左の隅の方に『皐』の文字、そしてその隣には『五』の文字。

「おいおい……こんなの紙に書いて初めて解ることだろ？聞いているだけじゃ解らない、普通」

「んー、なんて言うか、人の発音みたいなモノでなんとなく解るんだよ。今泉が言った『紙』だって、みんなは髪の毛の『髪』とか神様の『神』とか思わずにプリントの『紙』だって解っただろ？」

「でも、それは前後の会話や常識で解るんじゃない？誰も髪の毛に文字書いたりするとは思わないし」

「ま、そりゃそうか……」

「けどそれじゃさっきのはつじつまが合わないぞ。柊の名字は『五月』だろうが『皐月』だろうが意味は通るんだから」

沙樹は顎に指を当てて悩んだ後、真面目な顔で柊一を見据えた。

「……ねえ、五月くん」

冷静で重い、小さな一言。

「あつ、今数字の五で『五月』って呼んだ」

柊一はすかさず反応した。

その的確さに沙樹の瞳が黒く光る。

「そんな……まさか……。でも……有り得ない……っ！」

大きく目を見開き、まるで幽霊でも見たかのような表情で固まる沙樹。

その視線はただ宙を漂うばかりで焦点が合わない。

「……何が有り得ないんだ？」

「え？あ、ああ、別に何もない……」

「体調でも崩したか？」

沙樹はまだ焦っているようで、足元がぐらついている。

「……うん、そうみたい……ごめん、気分悪いから保健室行ってくる」

そう呟いた沙樹はくるりと背を向け、声をかける間もなく早足で歩いていった。

その背中呼び止めることを拒否するようにも見える。

さっさと沙樹は教室を出て行ってしまい、残った三人はあっけにとられる。

「……どうしたんだろ、沙樹……」

「様子が変わだ。何気に心配」

「……………」

妃奈と柊一が不安がる一方、涼太は至って冷静だった。

その瞳に猜疑を映しながら、ただひっそりと佇む。

心配もむなしく、教室はなんら変わらぬ雰囲気を保っている。

一人の女子が出て行ったところでその形態は変化しないのだ。

「まさか……ね。これでしばらくは、この土地に留まらなきゃいけないわね」

廊下を急いで歩きながら、彼女は独り言を呟く。

別段焦る必要はないのだが、焦りから自然に急ぎ足になってしまう。

通り過ぎる人々も彼女の独り言など気にもとめない。

「けど、あそこで言っちゃったのはマズったかな……。正直彼には……解って欲しくない………」

落ち着かなければいけないのに、どうしても落ち着いてくれない。

精神が高揚し、まるでイタズラをしてバレた時のような感覚。

それでも彼女は歩くスピードを緩めない。

向かう場所は、もちろん保健室などではない。

焦っても仕方がないのにと自分に言い聞かせながら、廊下を渡りきる。

階段すら残りの数段は飛び降り、踊場も手すりを軸に遠心力を利用した。

一階の階段など全て省略して、一番上から大ジャンプを披露したくらいだ。

まだ昼にもなっていないというのに、学校から急いで立ち去る。

幸い、誰にも住所を明かしていないので押しかけられることはない。

「はぁ……。今の生活、結構気に入ってるのになぁ……」

下駄箱にある自分の靴に指をかけながら、独りごちる。

数秒間目を瞑ったあと、靴をはいて外に出た



数日後、学校を連日欠席していた水野沙樹が、久しぶりに登校してきた。

「沙樹！おはよう！」

顔に笑みを浮かべながら、神谷妃奈が走り寄る。

「おはよう、妃奈。久しぶりね」

沙樹も同じく笑顔で挨拶を返す。

妃奈の声を聞いたのか、二人の男子も沙樹に近寄ってきた。

「お、懐かしいな。元気してたか？」

そんな風に挨拶してくる少年の名は、五月柊一。

その隣にはいつも涼しい顔をした泉涼太の姿。

こうして三人が並ぶ姿を見るのも、沙樹にとっては久方ぶりだ。

「そうだ、沙樹。今度の休日、みんなで遊園地に行こうってことになったの！ 泉くんが無料招待券をきっかり四人分」

「あー、ゴメン、私パス」

片目をつむり、すまなさそうに手のひらを合わせる。

妃奈はさっそく残念そうな表情になり、後ろの二人は相変わらず無表情。

「えー！？ なんでー！？ この前ゆつくり遊園地を回れなかったからって、みんなで計画したのに……」

しょんぼりと落ち込む姿はまるで子供のようで、沙樹から見るとなんとなく可愛らしかった。

「ゴメンゴメン、最近私忙しくてさ……もってんてご舞い。遊園地はまた今度にして、あと一人誰か誘いなよ」

「……残念だけど、仕方ない……ね。でも、また行こうね！」

ファイティングポーズをとるように両手拳を握る妃奈は、まさに小動物のようだった。

沙樹は妃奈の頭を無性に撫でたくなっただが、止めておいた。

「じゃ、柊くん、任せたから」

そう言っただけ、妃奈は柊一の肩に手を置く。

「……せめて意味が分かるよう言ってくれよ」

「だから、沙樹が居ない分一人空くでしょ？その一人は、柊くんが選んできて」

「またどうして俺なんだよ」

「私と泉くんは別に誰でもいいもん。あ、でも男子は勘弁かな……女子が私一人っていうのも気まずいし」

沙樹が意味ありげな視線を送っているのに気づき、顔をしかめる柊

一。

涼太も黙っているからには了承している。

つまり、柊一に決定権が委ねられたのは既に決定事項だ。

「……言つとくが、俺は友達少ないからな」

柊一もしぶしぶ認め、妃奈の顔に花が咲く。

「ところで水野、なんで欠席した？」

思い出したように突然口を開く涼太。

その目は真剣そのものだ。

「ちよつくら水星まで」

適当に即答した沙樹。

顔はあくまで無表情。

涼太は笑わず、そうか、と呟いて了解した。

「なに、その反応。ボケた側としてはそのリアクションが一番イタいんですけど」

「おい、水野。水星まで行くにはすごい速さで行かなくちゃならないぞ。しかもあそこの平均気温、ヤバいだろ」

満足げに、そして冷静に突っ込んでおく柊一。

その対応に気分をよくした沙樹は、無言で親指をたてる。

「水野…沙樹……」

静かに呟く、泉涼太。

その顔には疑心と影が付きまとう

「ったく、どうしようかな……」

呟きながら、五月柊一は隣の隣のそのまた隣のクラスへと足を運ぶ。神谷妃奈に頼まれた通り、遊園地へと同行する人間をもう一人捜している最中だ。

だが、実はもう決まっている。

もともと他人とあまり接触をしようとしない彼にとって、選ぶ人間など最初から決まっていた。

それでも迷っていたのは一体なんのためか……。

「……しゃあないな」

言って、屋上へと向かった。

近頃の彼女はいつもあそこにいるのだ。

そうと決まれば行動は早く、というより地形的に近く、階段を昇るだけで屋上への扉が目の前に広がってくる。

一応生徒の出入りを禁止しているこの扉は、数年前にカギを盗まれたらしく常時開放となっている。

そんな頼りないドアノブに手をかけ、静かにドアを開ける。

真夏の日に外に出るなど自殺行為に近いが、屋上は風が強く案外快適だった。

奥　手すりにもたれかかり、彼に背を向ける一人の少女。

長い黒髪をなびかせ、静かにたたずんでいる姿は、男の目を強く惹きつける。

柊一はゆっくりと近づき、少女との距離を縮めてゆく。

そして、残り五メートルというところで、その少女は爆ぜた。

静止状態から一気に百八十度回転し、一直線に彼に肉薄する！

「　おっと」

とっさに少年は顔をズラす。

一閃、彼の頭があつた場所に少女の掌が高速で通り過ぎる。

見事なまでの掌底。

それを、彼は直感のみで回避した。

「　　」

続く連撃。

まるで躲されることが判っていたかのように間髪を入れず、少女が捻れる。

タン、と後方へのバックステップ。

少年がこの行為をとらなければ、今頃地に伏せていることだろう。

少女は足を曲げ、少年の腹目掛けてミドルのニーバットを回し蹴りの要領で放っていた。

開く間合い。

両者の距離は三メートルほど。

「　　」

」

またもや少女は地を駆ける。

先ほどよりも早く、最短距離で彼に突進する。

少年は腰を落とし、次の攻撃に備える。

身をかがめて疾走する姿はまるで豹。



そのするどい牙で、目の獲物を引き裂く　　！

今度は正直なストレート。

俊足を以て放たれた拳は空を切り、少年の顔面に激突する。

その刹那、少年は体を半回転捻る。

通常、人間の拳は避けない。

二人の戦闘は茶飯事であり、そのこともあってなんとか少年は回避出来ている。

若干の弧を描きながら突撃する拳は完全に外れ、大きな隙を少女にもたらず。

その隙を見逃すまいと更に肉薄する少年。

だが、あと一步というところで彼は踏みとどまる。

ヒュン、と目の前を通過する鈍器。

彼女の膝が渾身の力で繰り出されていた。

「　　！？」

驚きは少女のもの。

完全に捉えたと思っていた獲物が間近に迫っている。

身がかめていた彼にとって、先ほどの一撃は必殺であつただろう。

それを彼は寸前で踏みとどまり、やり過ごした。

後に待つのは、少女の大きな隙と、少年の絶好の機会。

彼はもとより彼女に力を振るうつもりはないので、適当にあしらうつもりでいた。

そしてそれは、彼の必殺の機会を以て完遂される

「んなっ……!？」

ハズだった……。

季節は夏。

この暑い時期に戦ったことが、彼の敗因と言える。

振り上げられた太もも、舞い上がるスカート。

彼女のスカート自体が短めで、暑さゆえに体操服の類は一切着用されていない。

後は神様のいたずら、彼の視界は純白に包まれる。

少年の心は軋んだ。

この後に起きる攻撃を防ぐべきか……それとも、至福の時間を満喫するか

迷っている内に決断は下された。

彼女の細い生足と白い下着を目にしたが最後、目を背けることが出来なかった。

男、故に敗北。

「この スケベっ!!」

怒号と共に振り下ろされる肘。

視覚外からの攻撃に対応できず、キレイに後頭部へと、垂直に落ちた。

少年の視界は、また違った純白の世界に包まれかける。

ドサツと倒れ込む少年。

彼は最後の最後で僅かに首をズラし、気絶だけはなんとか回避した。精神力をフル活用して保った意識は、今にも消えそうなほど薄い。

だがそこをなんとか耐え抜き、ごろんと仰向けに転がる。

時間にして十秒も経っていないだろうが、疲れは大きかった。

「はぁ……はぁ……」

荒い息のまま、その場にぺたりとへたれ込む桜。

隣には脳震とうをかううじて回避した柊一の姿。

「桜……さ、最後のは反則だ……」

「こっちのセリフよ……変態っ！」

肩で息をする桜を見て、柊一は息を飲む。

スレンダーな体つきなハズなのにふくよかな一部分。

まさしく女のものだ。

「やっぱり桜は卑怯だ……」

柊一は青すぎる空を仰ぐ。

つられて桜も空を見上げた。

「何言ってるの。素人のクセに私の攻撃に反応するあんたの方がよっぽど卑怯よ」

「でもなあ、今だってそうやって女の子座りしてるだろ？それが卑怯」

柊一が言っていると、桜はポカンとした。

「いつもこうやって女の子らしくないことしてくる反面、時々信じられないほど女の子っぽい」

「……………」

「なあ、桜」

「……………何よ」

「遊園地、行きたくない？」

「……………はあ？」

それが彼にできる、精一杯の誘い方。

自然であるかどうかと言われれば、それは聞くまでもない愚問だ。

「さっき、桜がワザと作った隙に俺、踏みとどまっただろ？」ご褒美として、一緒に遊園地へ行こう」

「……………まあ、確かに…」

彼女は先ほどの攻撃を思い出す。

確かに、ストレートの後にできた隙は作ったものだ。

彼をおびき寄せ、カウンターの膝蹴りでノックアウトのハズだった。

それを柊一は見破り、足を止めた。

その後の隙は作ったものではなく、作らされたものだ。

正真正銘、できてしまった隙だ。

そこで彼がもし反撃でもしていたならば

「行くって……いつ？」

「まだ決まってるじゃないけど、一応今後の予定は立てないでくれ」

柊一の言いぶりに、桜は軽いため息をつく。

「アンタってほんと、たまにワガママよね」

柊一は意外そうな顔をした。

「……………どこらへんが？」

「予定立てるなつとところよ。いつ行けるかも分からないのに予定だけは空けるって、何様よ」

「……………なんだ、無理なのか？」

「なつ……………別に無理なんて言っていない……………」

「どっちだよ……………」

「だから、無理じゃないけどワガママ言っなくなって言ってるの!」

「……結局行くのか、それとも行かないのか?」

「行くっ!」

そうハッキリと断言した彼女の表情は、どこか真面目だった。

まるで焦っているかのような、瞳の色。

「よし、決定だな」

「うん」

…そこで、会話は途切れた。

あとはただ照りつける太陽と、吹き抜ける風だけが交錯する。

風は彼女の長い黒髪をなびかせ、舞わせる。

そうして静かに佇んでいれば、さっきまでの鬼神のような動きは想像も出来ない。



容赦というものを知らない太陽は、自然と二人を日陰に追いやった。

二人肩を並べて、後ろの壁にもたれる。

いざ日陰に入ってしまったえば、そう暑くはなかった。

むしろ涼しい。

風は意外と冷えていて、火照った二人の体の体温を下げてくれる。

呼吸もずいぶん整い、身体の疲労もとれてきた頃、ふと桜が立ち上がった。

柊一は不思議に思ったが、大して気にも留めない。

彼女は屋上の隅の方まで歩き、暗い影の中から何かを取り出す。

長い 彼にとっては見慣れたモノ。

「……桜、そいつは何だ？」

「何って……竹刀よ？」

まさしく竹刀。

素人が見ようと達人が見ようと、桜が手にしているモノはまさしく

竹刀だ。

「それは解る。で、それで何をするんだ？」

本当は、何をするかは解っていた。

最近彼に何かと好戦的な桜。

二本用意された竹刀。

そして、やる気に満ち満ちた眼差し。

桜は柵一に歩み寄り、竹刀を一本さあ、と渡す。

「さ、スタンダップ！始めるわよ」

言われるがまま立ち上がった柵一。

桜との距離は十メートル近く開いている。

「たまには剣でやりたいなって思ってたの。だからこの前、剣道部から拝借してきたの」

彼はそれが悪いことだろうなと思ったが、正直少し楽しみだった。

「　　そうだな。空拳もそろそろ飽きてきた。俺も剣道は出来ないが、剣には少し自信がある」

竹刀を握りしめ、感触を確かめる。

「ふふ、そうこなくちゃ」

彼女は無邪気に笑う。

竹刀を握りながら微笑む姿はどこか死に神めいている。

「じゃ……やるか」

心底楽しそうに、柊一はニヤリと笑う。

二人の間に飽和する殺気。

互いにせめぎ合い、押しのけようとする。

桜の構えは基本を少しアレンジした形。

基本を最強とする構えを敢えて崩し、自らの長所をさらに引き伸ばす構え。

対して柊一は自然体。

竹刀を片手で握り、桜を正面から受けずに横を向いている。

両者の準備が整ったことを感じさせる沈黙。

そして沈黙は 対峙した二人の疾走によって破られる !

同時に走り出した二人。

空を切る音をたてながらぶつかる竹刀と竹刀。

これは剣道の試合でもなんでもなく、ただの殴り合い。

故にルールはなく、有るのは当事者の掟のみ。

敵を討つために放たれた一閃は静止し、鏑迫り合いに持ち込まれる。

互いの力は拮抗するはずもなく、桜はあっさりと押し負けた。

しかしそれも承知の上

横へステップして力を受け流した桜は、下段から斬り上げる。

「は  
」!

身を反らして回避する柊一。

鼻先を掠める竹刀は空を切り、そして翻る　　！

大きく振りかぶつての斬り下ろし。

それを彼は、右手に握った竹刀で軽々と弾き返す。

「　　っ！」

渾身の一撃を弾かれた彼女は、体勢を立て直すべく距離を離す。

だが、やすやすと見逃しはしなかった。

間髪入れずに振るわれる重い一撃。

それは桜の渾身の一撃を遥かに凌駕する力。

しかも一撃では止まらず、二撃、三撃と、攻撃の手を緩めない。

そのどれもが力で桜を圧倒し、後退させる。

片手で振るっているだけの竹刀は鉄のように感じられ、彼女から竹刀を奪おうとする。

強く柄を握り、防御に徹していく。

しかし、長期戦は危険。

彼の剣戟は受ける毎に桜の体力を削り、動きを緩慢にさせる。

後退しつつも開く間合い。

彼が常に攻め立てれば決して開くことのない間合いは、なぜか離れていく。

とはいえ竹刀の攻撃範囲。

防御を怠れば一瞬で懷に飛び込まれる。

柊一の竹刀の先端が下から突き上げる。

「あつ

」

大きく崩される彼女の構え。

なんとか竹刀を握りしめ、吹き飛ばされるのを防いだ。

完全になら空きになった彼女の合間に、柊一はたった一歩だけ詰め寄る。

彼の手にした武器が舞うに相応しい、最高の有効射程。

その射程にて、彼は不自然な構えを取る。

柄を優しく、摘むように持つ。

低く落とした姿勢にこもる凄まじい闘気。

竹刀は頭を下げ、深く落とされた腰よりも更に低く、奥に鎮座する。

不気味ですらある静寂。

それはひどく長く感じられる二分の一秒。

彼の奇異な構えに釘付けとなる桜。

自らの姿勢を整える暇も与えられず、ただ次の一撃を受け入れるのみ。

だが、この刹那に彼女はあらゆる可能性を考える。

構えと距離からして……突きはない。

竹刀の向いている方向的に、中段以上

「  
鳩尾」

「  
え？」

凜とした声のもと、ほとばしる白。

柄の白が、想像しうる可能性全てを貫いた。

「　　っ！！」

ただがむしゃらに、一瞬視覚が捉えた何かを防ぐべく、竹刀を走らせる。

ビッグバンでも起こしそうなほどの衝撃。

彼女の竹刀が悲鳴をあげる。

竹を割る閃光は桜の鳩尾目掛け突進し、彼女の竹刀に阻止されるいや、阻止させた。

みしり、と音をたて、桜の竹刀が宙を舞う。

彼女の斜め後方に吹き飛んだ竹刀は地面に落下し、衝撃を殺しきれずまた滑る。

カラカラと回りながら遙か遠くへと滑り、静止した。

「……すごい。圧倒的ね」

額に玉のような汗を浮かばせながら、彼女は言った。

「桜がもし男なら、判らなかつたさ」



柊一は竹刀を捨て、静かに桜に歩み寄る。

「ケガ……しなかったか？」

桜の手を取ると、手の平をまじまじ見つめる。

「え、ちょ……！」

慌てて彼の手を振り払う。

「バカ、照れるな」

振り払われても手を取る柊一の顔には、笑顔がない。

無言のまま桜の手を握り、傷の有無を確かめていく。

「手は……無事みたいだな。肘や肩は痛まないか？関節とか、筋肉とか」

「う、うん……特に……」

桜は俯き、少し長い前髪で目を隠した。

それでも赤面していることは窺い知れる。

柊一は内面ホツとし、視線を上げる。

頬に赤みがさし、やけに温和しい桜を観察した後

「……………なんだよ、ちょっと手を触ったくらいで大げさな……………」

「なっ……………触ったくらいって、あんたねえ……………！」

「それともなにか、今まで男と手を繋いだこともないってか？そんなの、俺みたいないやつの特権」

「……………ないけど、悪い？」

「え……………？いや、あ、悪くない。妃奈もそんな感じだしな……………うん……………」

苦笑　　苦い笑いと書いて苦笑。

苦笑いしつつ頭をポリポリと掻くのもはや常套だろう。

「……ねえ、それよりさ、なんで私に鳩尾って教えたの？」

「え。いや、まあ……防具も着けてないのに当たったら、痛いじゃん……？」

心底すまなさそうに、柊一は呟いた。

手が頭から離れない。

「あ、あんなの防げるわけないでしょ！！何！？柄で突きつて！？」

「あれはそういう技なんだよ……。剣と言うよりは槍に近い使い方だからな」

桜はついさっきの場面を思い出していく。

……そう、あれは、竹刀を槍に見立てた突きだった。

だからこそ威力が格段に上昇したのだ。

だが、柊一の腕力を以てすれば、両手で振り下ろした方が攻撃力は高い。

つまりあの技は、力で相手の防御を崩すわけではなく、速さで翻弄するでもなく、技で防御をくぐり抜けるわけでもない。

すなわち、その真骨頂とは 意表を突くことにある。

異様な構えで相手の意識をかき乱し、そこから放たれる更に異様な一撃で相手を討つ。

欠点である攻撃力と速さを槍の要領で放つことにより、解消する。

あくまで一対一の戦いでしか用いることの出来ない荒技だ。

もちろん剣道などでは使用できない。

加えて柄で突くこともあり、“攻撃力”は高くとも“殺傷力”は低い。

真剣の勝負で使うなら意識を奪うことに特化していると言える。

真剣での決闘は法で禁じられ、剣道ですらその技を使えないのならば、一体どこで使うのか……。

それは、彼の幼児体験が知っている。

「昔からそういう、試合に勝つんじゃないとにかく生き延びるための技を習ってたんだよ。だから、流派もなければ型もメチャクチャだろ？」

「……あなた、相当厳しい人に師事してたのね。基本を無視してはいたけど、柊一なりの型が出来上がったもん。実戦を重ねることで必要な部分を補わせていく。ある意味それが流派ね」

「そんな大層なもんでもない気がするけどな。でもまあ……厳しくはあったか」

彼は記憶を遡るように考え込む。

木枯に来る前の仄かな記憶。

今までの短い人生で、最も長い間過ごしてきた土地だ。

彼にとって良い場所であったかどうかは定かではないが、そこは確実に存在する世界。

生き方を決める　重要な分かれ道の一つ。

二人仲良く遊んだ記憶を抑えこみ、なんら変わることなく過ごした地。

影でいつも独りだった少女を忘れたことなど一度もない。

なのに触れ合う人はいつも一人。

仮初めの記憶を繕う……今の優しい笑顔。

果たして選ぶは過去に捕らわれし者か、自らの咎を忘れた幼き罪人

か。

だが、第三の選択肢が今目の前にある。

断罪を放棄し昔年の想いを投げ捨て      新たな無垢を選ぶか。

答えの出る日はまだ遠い。

其れ迄に決めよ。

嘸辛かろうが、欲深き子ら故、残るは一人。

同情など捨てよ。

億劫など捨てよ。

夢想など捨てよ。

然すれば汝、真の想い人をば出逢わん……………

## 十話 拷問列車

世の中には、魔法がある。

魔法といえば、掌から炎や雷を出すものを想像するだろう。

つまりそれは、神秘である。

科学では証明出来ない事象を人は、魔法と呼んだ。

しかし世の中には、そんな神秘が溢れている。

大気中に存在する謎のエネルギーをマナと呼び、それを行使して発動する神秘を魔術……もしくは魔法。

同じく大気中に存在する謎のエネルギーを、気と呼んで扱う者たちもいる。

彼らは多く、その気を使って、呪術や呪詛、巫術なる神秘を操ると言われている。

これらの違いは至ってシンプル。

土地が変わる、つまり文化が違っただけでその呼び名は変わるのだ。

ある国ではタコを悪魔の魚と呼んで恐れたりするが、わが国ではま  
ず有り得ない。

またある国では、未成年の子供には下品で汚く、人々が忌み嫌う名  
前を付けることを良しとする。

文化の違いでここまで変わるのだ。

しかしその神秘も、現代において存在しないとされる。

ゆえに、科学で証明出来ない事象が発生すれば、それは怪奇現象な  
どと呼ばれる。

だが、怪奇現象の全てが神秘で説明がつくかといえば、それは否だ。  
科学と神秘のタッグが敗れたならば、それこそが怪奇現象と呼ばれ  
るに足る事象なのだろう。

しかし、世の中に例外はつきものだ。

怪奇はおろか神秘すら知らぬ若者が、実際魔法としか思えぬ事象を  
引き起こすことがある。

魔の血を受け継ぐ者にしか届かぬ場所が、世界には存在する…………。



「よし、それじゃあ行きますか」

妃奈が戸締まりしたのを確認した後、二人で一緒に歩き出した。

「さ、早く行こ。みんな待ちくたびれちゃってるよ、きっと」

どうやら妃奈は焦っているようだ。

それも俺のせいらしいのだが、まあ確かに俺のせいだと思う。

「……………涙は止まったか？」

視線を合わせず、前を向いたまま言った。

妃奈も前しか見ていない。

「うん……。もう大丈夫」

妃奈の声は、どこか寂しげだった。

声のトーンが下がっているというか、元気がない。

「そりゃ良かった。くれぐれもみんなにはバレないようにな」

「……ねえ、柊くん。柊くんのお祖父さんが言ってたことなんてウソだよな……？急に居なくなったり……しないよね……？」

しっかりとこちらを見据え、すがりつくように妃奈は言った。

眉を八の字に歪ませ、また涙が零れそうだ。

「さっきも言ったら、そんなこと有り得ないって。第一、俺が死ぬとしたら、発作が起きて気を失うのが原因なんだろう？俺最近、気絶したか？」

腰に手を当て、力いっぱい胸を張った。

妃奈に泣き出されては激しく困る。

「そう……だね。柊くんはいつも通りだもんね。ゴメンね、変なこと言って」

「はっはっはっ、良いってことよ。おっ！それより見てみる、妃奈！」

青く澄み渡る空に浮かぶ雲を指差し、精一杯元気に叫んだ。

妃奈はキョトンとした顔で空を仰ぐ。

「ほら、あのデカい雲、なんか泉の目尻の先端に似てると思わないか？」

「わ、わかんないよお……」

……分からなくて当然だ。

俺だってそんな風に見えないんだから。

妃奈には悪いが、さっきの俺の言葉にはウソが混じっていた。

気を失うことに俺は、心当たりがある。

夜寝る前、視界がぐにゃぐにゃに歪み、半ば気絶しながらいつも眠るのだ。

その時の激しい嘔吐感といい頭痛といい、明らかに俺の体はおかしい。

気絶と睡眠を一緒にすることで、ごまかしてと言ってもいい。

妃奈に心配をかけないためには、それぐらいのことは当然だ。

「……あ、柊くん！道こつちだよ！」

「ん？あ、ああそうか。雲ばかり見ても駅にはたどり着けないな……」

「そうだよー。そんなんじゃ転ぶよ？」

「……どうしたっていうんだ……俺の体は……」。

駅までの道のりなんか知り尽くしてるじゃないか……。

本当に……どうしたんだ俺……。

……今きつと、妃奈がいなくちゃ俺は、駅までたどり着けない。

だって、道のりを頭に浮かべることが出来ないんだから。

一部のクラスメートの顔と名前を忘れたのはもう慣れた……。

動物の区別がつかなくなってきたことだって、気にしてない。

けど……妃奈や桜、泉や水野に関係あることを忘れてしまうのが怖い。

妃奈が心配性だったり、桜が無愛想だったり……泉が実はオタクで、

水野は人をからかうのが好きで……。

そんなどうでもよさそうなことでも、絶対に忘れたくない。

本当に俺がどうにかなってしまっただけなら尚更だ。

けど……それも無理かも知れない。

数日前……俺が朝、目を覚ますと、すぐ目の前に妃奈がいた。

黒い瞳から大粒の涙を流し、俺の上に覆い被さっていた。

後から訊けば、俺が目覚めますかどうか不安だったらしい。

でも俺は、その妃奈を見て、とんでもないことを考えた。

普通、なんで泣いているんだろうとか、単に驚くとか、そんなことを思っはすなんだ。

けど、俺は……。

「楽しみだね、遊園地！今度は逃げ出したりしちゃダメだからねっ」

「ようし。それじゃあ、これを機に克服するか、ジェットコースター」

俺の中に浮かんだ感情はひとつ……。

泣きじゃくる妃奈を前に、思ったんだ……。

この女は誰なんだ、と。

「こんにちは。体の調子はいかがかい？」

窓の外をぼんやり眺めていると、ふとそんな声が聞こえた。

この白い世界に進んでやってくる、珍しいひとだ。

名前も聞いたはずだが、覚えていない。

というより、ハナから覚えていないから忘れてもいない。

「この前、息子と会ったんだ。久々に見ると、ずいぶん成長していたよ」

窓の外で元気に飛んでいる鳥が、近くの木にとまった。

こちらに話しかけるように首をかしげている。

ちよちよこと動き回っては、また大空へと羽ばたいた。

あんな風に空を飛んで、一体どこへ行くのだろう……。

「うちの家系はみんな仲が悪くてね。案の定、ぼくの親とはケンカ別れみたいになったよ」

もし私が空を飛べたら……とは思わない。

空を飛ばずとも、彼は私に会うことが出来る。

「君の妹にも会ったんだ。君に似て、とても美人だ。男がうるさいだろうね」

約束を交わしたなら、必ず迎えに来てくれる。

私をこの世界から、連れ出してくれる。

あの人だけでいい……。

私には、あの人だけでいい。

あの人さえ居てくれれば、他には何もいらない。

何年も待ち続けることは苦にならないけれど、やっぱり逢いたい…  
…。

「窓の外……おもしろいかい？そんなに好きなら、外に出ないか？」

私には待つことしか出来ないけど、どうか幸せになってほしい。

だって、あの子の幸せは私と一緒に居ることで、私の幸せもあの子と一緒に居ることだから……。

「……そろそろ、行くね。親父……一木って名乗る人が来たら、よろしくね」

ずっと昔に結んだ約束が、いつも胸の中で光ってる。

私を明るく、煌々と照らしている。

恋しいなんて言葉じゃ表せないほど寂しいけれど、私は待っている。

ずっと待ってるよ……。



柊くん…………。

機械の駆動音。

かん高い悲鳴。

辺りを徘徊する人型の獣たち。

それは以前にも見たことの景色だ。

「さ、華麗に華やかに遊び尽くすでしょう」

満面の笑みを浮かべながら、爽やかに跋扈するハンサムボーイ。

「涼太様、私まで一緒にとよろしかったのでしょうか？」

泉に付き従う、絶対に見たことがある場違いなヒューマン。

妃奈より長く桜より短い黒髪。

似合ってはいるが不思議空間を作り出すメイド服。

ここ遊園地に到着して、改めて理解したことがひとつ。

泉は     どこか遠い世界の住人である。

「ねえ、柊くん……あの人だれ？」

俺の耳元に近づき、不安げに囁く妃奈。

「……返答に激しく爆裂に困る」

そう、あれは数ヶ月前……。

埋め合わせと称して犯罪ギリギリな事に首を突っ込まされた、メイド騒動。

扇動するだけしておいて自分はいつの間にか姿を消してしまった大馬鹿やろっの側近。

屈辱の女装という、人生において最大の汚点。

それら全てが悪い思い出なのは言っまでもない。

そして今、闇の記憶が鮮明に蘇る。

「……桜さん、この状況をどう見ますか？」

「……あの格好を見ると、ダンスの中身を思い出して吐き気を催しますねえ……」

ナレーター風味に語り合う俺と桜。

トラウマレベルなら俺より桜の方が上か。

「あの一、泉さん？そちらの方は……」

恐る恐る、訊いてみる。

「皆さんお知り合いのはずですよ。あ、神谷は知らないか」

「マリスさんですよ？今日は何でまた？」

泉がアテにならないので、自分で訊いてみた。

違和感レベルマキシマムのメイドさんは、少し息を呑んだ。

「……マリスは留守番しておりますが？念のために言っておくと、私の名前はイリスと名乗ったはずです。あくまでも念のためですが」

あちゃー。

確か、こんな感じのメイドが五、六人いたよね……。

少なくともこの人は日本人なのに、なんでこんな……ワケワカメな名前を？

しかもみんな同じような名前だったよな……。

「なにドジってんのよ、バカ糞ー！」

「……なんだ？ヤケに強気じゃないか、桜。なら、あの人と一緒にいた他のメイドの名前も覚えてるんだな？」

「うつ……それは……」

「ほら、言ってみろ。顔すら思い出せんなら俺と同レベルだぞ？」

さあさあ、と急かす俺にイラッときたのか、桜は俺のわき腹にエルボーを見舞ってくれた。

「神谷、こちらはイリス。ついて行ってくて聞かなかったんで、連れてきてしまった」

ちよつと離れた場所で、妃奈とイリスさんとがご挨拶している。

こっちは桜と懐かしい思い出を共感していた。

「あれから、ちゃんと着てるか？メイド服」

「……一体いつ着るのよ。バレないように保管するのが精一杯よ」

ふむ、それはもったいない。

あれはあれで似合ってたんだがなあ。

「また見てみたいなあ、桜のコスプレ」

「柊一がまたメイド女装してくれるなら、考えてもいいわよ？」

いや、それは勘弁……。

俺が着るとシヤレにならないといつかなんというか。

笑えるんだが、暗く重い空気になるという不思議空間の誕生だ。

「あ、そういえば。柊一、私のお父さんと面識あるの？最近、夕食時に柊一の名前が出てくるんだけど」

桜のオヤジさんっていうと……西園寺秋羅さんか。

豪快かつ愉快なおじさんだっけ。

職業を頑なに語ろうとはしなかったが。

「面識あるない以前に、桜、家で俺の話してたらしいじゃないか。俺はそういう風に聞いてるぞ」

「……そっか、じゃあ仕方ないかも……」

西園寺さん……懐かしいなあ。

あの妙に普通なことか、まさにボスって感じだな。

愛称はボスに決定……俺はジーパンってとこか？

「けど、どこで会ったの？もしかして妃奈んち？」

「なんじゃこりゃあ!？」

「……赤いリボンをつけた白と黒のツートンカラーの車呼んでいい？」

桜がホントにケータイ取り出したので、演技はここまでにしておう。

てゆうかあの時、桜は酔いつぶれてたっけかな。

たった一杯呑んであの様とは、ホントに弱いんだな。

ま、同じことが妃奈にも言えるか。

水野なんか、絶対、急性アルコール中毒だったぜ。

「イリスさんは、そんな格好で恥ずかしかったりしないんですか？」

「慣れてしまえば、制服のようなものですよ。妃奈さんも着てみますか？予備なら山のようにあります」

「え、いいんですか……？」

「はい。美人が扮するメイドは合法です」

あ、なんかあの二人が仲良くなってる……。

泉は保護者面でうんうん頷いてるし。

「予備………」

約一名古傷が裂けてるし。

そして、イリスさん的には美人以外のコスプレは違法ですらある事が判明。

「今度、店に遊びに来てください。大歓迎ですよ」

「はい、必ず行きますねっ」

ああ…… 妃奈が染まっていく……。

メイド戦隊に入隊とか、あんな店でバイトとかしないでくれよ……。

妃奈の弟兼兄、ところにより息子としては、そんな世界を知らずに



生きて欲しかった……！

「メイド世界を知らずに生きる美人ほど、不憫なものはない。神谷は適性もあるし、やる気もある。我が店も安泰だな」

はいそこー、勝手に人の心を読まない。

それと、妃奈をいかがわしい店に勧誘するな！。

「じゃ、まずこれに乗りましょう」

先頭を歩いていた桜が立ち止まり、斜め45度で指をさす。

指の先を視線で追うと、そこには、

「ホワットイズザット!？」

響く俺の悲鳴。

また違う悲鳴を撒き散らす滑車のついた箱。

苦い思い出がまたしても克明に蘇る。

「桜……もしかして柊くんの苦手意識を消し去ろうと……？」

「ジェットコースターですか。いいですね、学生時代を思い出します」

「この前もいきなりコイツだったような……ま、どーでもいいか」

「やつぱ、一度は乗らなきゃでしょ。御三家のひとつだしね」

おいおいおいおい！

なんで女子の方々はこう、俺を死に至らしめるようなことばかりするのかな！？

前回もだ！

前回もこんな状況だったはずだ！

「西園寺様。こちらの遊具は大変キケンに御座います。昨今、整備を怠るという由々しき事態が発覚しております故、自重なされた方が良いかと……。これは、我が身可愛さに申しているではありません。貴女様の御身に関わるからです。いかに私が御守りしようと、西園寺様が御自身を御寵愛なさらなければその御身、到底守りきれたものではありません。ですから、」

「しかも全然空いてるー。ラッキー」

聞いてよ！

ねえ、お願いだから聞いてよ！

「諦めよ……ね？大人しくジェットコースターに乗って、今度こそ克服しょ？」

嫌だ！

俺はまだ死にたくないっ！

こんな人生半ばで死んでなるものかつ！

大した志はなくても、死ぬのだけは嫌だっ！

「妃奈……。人間、自分の命と等価のものなんて、存在しないんだ……」

「え……？つて、柊くん！？」

妃奈に制止するヒマなど与えず、脱兎の如く駆けだした。

カッコいい台詞も捨ててきたし、あとは逃げ切るのみ。

あとの事など考える必要はない。

今はとにかく、自らの存亡を賭けた今世紀最大の逃亡劇を、完遂させるまで  
！

「おおつと、どこへ行くんだい？」

全速力を出し切る前に、俺の前に立ちはだかる泉。

「邪魔をするな、泉。そこをどけ」

「ふん……一度ならず二度までも、そう簡単に逃がしてたまるか」

「やめろ お前を討ちたくはない」

「やめろと言われてやめるくらいなら、最初からこんなことはしないさ。それに……」

トントンと軽い足捌きを見せ、ファイティングポーズをとる泉。

そしてその背景には、雄々しく咆哮をあげる白虎の姿が。

「メイド殺法を体得したこの俺と拳を交え……果たして討たれるのはどちらかな？」

巨大な虎は、ギョロリとこちらを見据えてくる。

目の前の獲物を逃がしはしないと体軀をうねらせ、爪を研ぐ。

「ふ　心意気や、良し。いいだろう！貴様の屍、見事越えてみせようぞ！」

同じく戦闘態勢をとり、目の敵を捉える。

俺のバックには神々しく嘶く青龍いななが姿を現した。

煉獄を思わせる業火を吹きながら空を舞い、光るウロコを見せつける。

両者の間合いは十メートル。

互いに動かず、様子を見る。

「柊！逃げたってなにも変わりはないんだぞ！」

「……それでも、守りたい世界があるんだああああ！」

拳に力を込め、地を這うような前傾姿勢で突進する。

火花を散らしながらクロスカウンターを向かえたであろう結末は、唐突に、

「あんたって人はーッ！」

スカートを穿いているにも拘わらず空中回し蹴りを披露した黒髪の魔神によって、擦じ曲げられたのであった……。

ここは、地獄への門。

短い列は、黄泉へと向かう罪人たちの群れ。

「桜さん……ぼく、生きた心地がしません……」

今まさに、俺はジェットコースターの順番待ちに勤しんでいる。

もちろん、ガクガクと震えながらではあるが。

「今さらなに言ってるのよ。ほら、進むわよ」

桜に促され、渋々ながら前進する。

俺と泉が激突しようとしたその寸前、神は降臨したのだ。

視界に乱入してきた柳腰と、細く白い脚。

いま思えば、あれは凶器以外の何物でもなかった。

空中でまさかの技を披露してくれた人物はただ一人、すぐ隣にいらつしやる西園寺様に他ならない。

名付けるならば、そう、竜巻旋風脚。

かくして一発KOを余儀なくされた俺は、こうして強制的に並ばされているわけだ。

「……いよいよだな」

さっきまで前にいた見知らぬ人たちが、無事帰ってきた列車に乗り込み、出発した。

すなわち、この列の一番前に位置しているんだな。

そして、次にあの列車が帰ってきた時、俺の死は確定する。

「柊くん、乗ってみたら案外平気だってば。怖いけど……それが楽しいみたいな？」

楽しい時点で……それは恐怖ではない。

本当の恐怖を感じている俺にはわかるんだ……。

「お、雨降ってきたぞ？」

「残念ですが、今日は快晴です。きっと幻覚でしょう」

俺の現実逃避を斬り捨てるメイドさん。

ていうか、そんな格好で乗るんですか。

それ以前に暑くはないんですか。

俺が汗一つかかない爽やか清涼メイドについて訝しんでいると、唐突に泉が口を開いた。



「しかし、あの蹴りは見事だった。瞬殺とはあの事が」

俺の後ろの妃奈のそのまた後ろにいる泉。

瞬殺される側のことも考えて意見してほしい。

「凄かったね。人って空中であんなに動けるんだー、って思ったもん」

妃奈……この娘は異常なんですよ？

誰でも彼でもあんな芸当ができれば、きっと人口が著しく減少します。

「やはりメイド殺法を……」

イリスさん、あなたはしばらく静粛にしてください。

「で、蹴られた気分はどうだった？」

「……意識が飛びかけたよ」

少し残念そうな顔をして、『つまらん』と呟いた泉。

俺には蹴られて喜ぶような異常スキルは備わっていない。

「……そんなに痛かった？」

「心配はしなくていい。だから、これから控えるよう努めてください」

目の前が真っ白になるのは、手持ちのポケモンが全滅した時だけでいい。

それと、スカートではあまり暴れないように。

またしても純白でしたからね。

「でも、桜って運動神経いいんだねー」

羨ましそうに言っている妃奈だが、実は妃奈も運動神経は抜群らしい。

運動系の部活に入らないのは何か訳ありでしょうか？

……しかし、俺の周囲の人間は超人ばかりだな。

美男美女のルックスに、勉強はできて当たり前前の運動神経抜群集団ときた。

普通の俺が目立ってしまうではないか。

ま、今さらなんだけどね。

「あつ、遂にやって来たわよ。柊一、早く!」

なにっ!?

もう帰ってきやがったのか!?

それと、まだ停まってもいないのに突っ込まない!

危ないよ!

「ひ、ひなああ……」

「泣かないの。克服しなきゃでしょ」

ちっ、妃奈はアテにならんか!

その隣のメイドさんは目を合わせようとしないし、泉は問題外……。

やむを得ん！

「……………」

足元に気をつけて下さいーい、なんて朗らかに笑っている係員のお姉さんに視線を送る。

もう、あなたしか居ないんだ！

「……………」？

俺の視線に気付いて不思議そうにするお姉さん。

しかし、無視して座席を整え始める。

頼む、気づいてくれ……！

死者が一名出ようとしてるんだ！

尊い命が失われようとしてるんだ！

「早く乗るわよっ！バカッ！」

「あ……………」

俺の手を引き、一気に乗り込む桜。

バレていたか、畜生！

「？神谷、どうした？」

「……………ううん、何でもない……………」

くっ……………寄りによって最前列かッ……………！

なんて、運の悪い……………！

「はい、大人しくして。安全バー下りるから」

……………とうとう、捕らわれてしまった。

俺と桜を最前列に乗せた死の箱は、ゆっくりと動き出す。

もはや、この拷問列車から逃れる術はない。

もうどうにでもなるがいい……………。

「天国にいるお母さん……。私は、そちらに逝けるでしょうか……？まさか地獄には逝かないですよねえ……」

胸で十字を切り、神に祈る。

この災いから我を守りたまえ……！

「さあ、いよいよね！この高揚感、まさしくジェットコースターだわ！」

……隣で嬉々とする桜。

今まで実感が湧かなかったたとも言っのか……。

ガタン、そしてまたガタン、と順調に上っていく拷問列車。

今上っている坂は、まさに峠。

違うのは、この峠は越えると同時に死を迎えるということ。

「落ちる……落ちる……」

カタカタと音をたてていたデスボックスは、途端に静かになった。

固く閉じていたまぶたを開けてみると、花畑……ではなく、遊園地を見渡せるほどの絶景が広がっていた。

そう、そこはレールの天辺。

位置エネルギーの最も大きい場所だ。

そして位置エネルギーは今、全力をもって運動エネルギーへと変わる。

「っ……………！」

内臓が宙に浮くような違和感。

崩れる絶景。

桜と妃奈……それにイリスさんまで黄色い悲鳴をあげ、泉だけは『うひょー！』と叫んでいたのを、最後に確認できた……。

## 十一話 二人の十メートル

「ぐ……ぐへえええ……」

「あはは……柊くん大丈夫？」

ベンチにて吐き気を催しているのは、一体だれだろう……。

あ、俺か。

「なっさけないなー。あれぐらいでノックダウンなんてだらしないわよ」

「……なあ桜。実は俺は、健康的な一般男子なんだ。だから美人が嫌いなんて道理はない。それがたとえ、乱暴者の桜でもだ」

俺は突然、そんなことを口走った。

桜も目をまん丸にして驚いている。

「それだけで好感度は上昇していくもんなんだ。加えてお前は、最近俺のなかでもさらに地位を高めつつある。人間としていい奴だと



認めてるからだ。だがな……」

暗い空気を漂わせ、なにやら意味深な俺。

ああ、ホントなに言ってるんだろ……。

「俺の桜に対する好感度が、現在マイナス値の臨界点に達しようとしているのは何故だと思う？」

「ねーねー、次どこ行こっか？あ、プールとかあるんだ！。水着持ってきたらよかったわねー」

「あからさまに無視をするなあ！」

「まったくもう……めんどくさいわね。なに？じゃああんたはどうしたいの？」

心底たるそんな表情で睨んでくる桜は、そんなことを口にした。

どうしたいか？

そんな事はわかりきっている。

「フン……よし、お化け屋敷だ。お化けが不法占拠している屋敷へと赴こうではないか」

「お化け屋敷？ここから少し歩かないとダメよ……？」

ククク、嫌がつてやがるな。

俺が推測するに、桜みたいな勝ち気娘は幽霊沙汰に激しく弱い！

そう、名付けるならばギャップ定理！

桜、これ即ち強気。

ならば弱気になる場面がないはずがない！

そしてそれはお化け屋敷と相場が決まっており、遊園地は最高のロケーションともいえる！

拝んでやろうではないか、桜の泣き顔を！

「怖いなら構わん。宙を舞う魑魅魍魎たちに怯え、すすり泣く桜など見たくもないからな。ま、恐れをなして半べそで尻尾をまく桜もまた然り」

「妙に挑発するな……。柊のやつ、命が惜しくないのか……？」

「……きつと、仕返しがしたいんだと思う。さっき、半強制的にジェットコースター乗せられてたから」

「わたしも同感ですね。あれでは行きたくて仕方がないみたいですから」

外野が少々うるさいが、今はそんなことはどうでもいい。

あとは、桜がどう言うかだけなんだが……。

「べ、べつに怖くないけど……、そんなに行きたいならいいんじゃない……?」

フ……予想どつりの反応だ。

挑発にのってきたな、西園寺桜……！

お化け屋敷が貴様の墓場とは、リアル幽霊候補ナンバーワンじゃないか。

さあ、では行こうではないか。

魑魅魍魎の蠢く死の館へと……！

「きゃあーーーー!!」

そんな甲高い悲鳴をあげているのは一体だれなのか。

暗闇のなか、前を歩く人間にすがりついているのは一体だれなのか。

「……ねえ、柊一。そんな風に抱きつかれたら動けないんですけど……」

宙を舞う魑魅魍魎に怯え、すすり泣いているのは一体だれなのか。

あ、俺か。

「す、すまん。ゾンビが走り回ってたもんだからつい……」

「はあ……。あんたのそんな情けない顔を見るハメになるとは予想だにできなかったわ」

だるそう、かつ呆れた顔でそんなことを口にした。

あれから、俺たちは予定どおりお化け屋敷へと赴いた。

入り口で、『私は行かないよ？だってそういうの苦手だもん』と言  
い放った妃奈をのぞき、全員お化け屋敷に突入している。

鉄の意志で拒否した妃奈をだれも説得できず、ふたりペアで闊歩し  
ているわけだが……。

「うわあああ！？なんだお前！？バカッ、こっち来んなよ！！」

「だから来ないって……何度言えば分かるの？」

「あ、ああスマン。吸血鬼が抱きつこうとするもんだからつい……」

こうして、なぜか俺だけが怯えているわけだ。

……しかし、盲点だった。

桜を怖がらせることしか考えていなかったが、まさかお化け屋敷が  
こつもハードだとは……。

ていつか何で涼しい顔していられるんだよ……。

西園寺桜、侮るなかれ……。

「……柊一、強く握りすぎ。痛い」

「おお……すまん。致命傷を負った人間がなんかわめくもんだから  
つい……」

いつの間にか、桜の手をかなり強く握っていたようだった。

パツと手を離し、ふたたび歩みを進める。

「……………」

「……………」

「なあ……いつになったら終わるんだ……？」

「あんたが毎回律儀にビビッてるから、終わらないんですよ。わか  
ったら早く行くわよ」

「はい……………」

なんだか怖い……。

なにがって、お化けにビビッて桜に狼藉働きそうな俺が怖い。

ちなみにさつき、肘鉄を頂いた。

精神的にも肉体的にも、もうボロボロです……。

「……柊一、最近なんかあった？近頃あんたおかし……」

「うほ！？お前キモッ！その歩き方キモッ！でもめっちゃ怖っ！」

両手を前に突き出し、ぴよんぴよん飛び跳ねてくる野郎が急接近。

名前は忘れたが、確か中国の妖怪だった気がする。

マヌケな恰好だが、とにかく怖いのでとっさに飛びのいた。

「きゃあ！？ちょ、ヘンなところ触らないでッ！」

バキ、という絶対に人体からしてはいけない音。

桜に後ろから抱きついてしまった俺は、痴漢撃退のための護身術を一身に受けていた。

それが理解できたのは、チャイニーズ妖怪が面食らって立ち尽くしている最中のことだ。

「い、いたい……。お化けは脅かしても暴力は振らない……」

「うるさいわね……。ほら、手……」

吹っ飛ばされて腰を抜かしていた俺に、桜が手を差し伸べた。

俺はその手にしがみつき、なんとか立ち上がる。

「……………」

不思議と、俺が立ち上がった後も桜は手を握ったままだったが、振り払う理由もないのでそのままにしておいた。

怖いからとつつむくと、誰かさんの生足が目に入ります。

目には毒ですが脳には栄養なので、まあ良しとします。



顔から火が出る思い、なんてものを今さら思い知った。

「……………」

無言なのが、せめてもの救いだろっ。

さっきは自然に握れた手も、自分から握るとなるとこれまた違ってくる。

息は荒くなり、心臓も飛び跳ねている。

たかが手をつなぐくらいでこんなにも緊張するなんて、いくらなんでも免疫なさすぎだ。

高二にもなって手をつなぐのがどうのこうのって、それじゃあまるで小学生だ。

「桜！あれ！出口じゃないか！？」

嬉々として叫ぶ柊一。

どうやら本気で嬉しいらしい。

「え、ええ……。そうみたいね」

……こいつは人の気持ちを解さないというか何というか。

人が緊張しまくっているというのに、このいつもと変わらない態度はなんだ。

こっちから手を握ったんだから少しくらい気付いてもいいのに……  
朴念仁め。

「やつとこの地獄も終わりか……？ いや、油断は禁物だな」

やけに意気込んでいるが、きっと意味はない。

今までさんざん身構えてたのに毎回悲鳴をあげてるんだから、恰好の  
のかも決定だ。

「妃奈め、ひとりだけこの恐怖から逃げやがって……。こんなに怖い  
なら教えてくれればよかったのに」

「……今さら言っても仕方ないでしょう。ほら、早く行くんですよ」

……妃奈、か。

このまま出て行ったらどう思うだろう……。

少し前から柊一とやけに仲良いし……やっぱり手を離れたほうがいいかな。

でも、それじゃいつまで経っても関係は発展しないし……。

でもでも、もしも妃奈と柊一が付き合ってたりしたら、ものすごい修羅場になりかねないし……。

ああ、どうしよう……。

この握ってる手を自分から離すなんて、ありえない。

けど、このまま出て行けば確実に妃奈と鉢合わせだし……。

……どうせなら。

手を離せば、関係は維持される。

今まで通り、みんな仲良くできる。

臆病だなんてことはわかってる。

でも……自分を正当化してでも、失いたくないものもある。

だから、ここは

「よっしゃ！全力で駆け抜けるぞ、桜！遅れるなっ！」

「え　　？」

せっかく私が心を決めたというのに、彼は……柊一は、私の手を引いて走り出した。

転びそうになったところを支えてもらい、何とか後をついて行った。

途中で飛び出してくるお化けなんて、関係ない。

すべて無視して、私と柊一は十メートルほどの距離を完走した。

「制覇………！」

そうもらった柊一は、満面の笑みだった。

涼やかだった屋敷から出ると、外は初夏の日差し。

夏休みもまだだというのに照りつける太陽は、さほど気にならなかった。

そんなことより

「あ……………」

妃奈の眼差しのほうが、よっぽど心を締め付ける。

「ようよう、お二人さん。この暑い日差しの中でもお熱いな。仲良  
く手なんてつなぎやがって。ええ？」

泉の冷やかしさえ、気にならない。

私は胸が痛くて仕方がなかった。

冷たい炎で焼かれるように……………キリキリと痛んでは、私を切なくさ  
せる。

「ああ、これか？途中からつなぎっぱなしだったんだよ」

柊一はつないだ手をヒョイと上にあげ、そう口にした。

そういえば、私と柊一はまた繋がったままだ。

「……………」

妃奈の視線が、痛い。

私の何倍も切なそうな表情でこちらを見ている。

こんなことになるから……手などつないでいたくなかった。

妃奈との友情が壊れてしまいそうで、失ってしまいそうで……怖かった。

……でも。

でも、私はここで手を離しちゃいけない。

私には失いたくないものがある。

けれど、どうしても手に入れたいものだってある。

それは妃奈も同じで、だからこそ、私は絶対に退いちゃいけない。

正々堂々と、最後の最後まで競い合って、そしてケリをつける。

……私はなぜ、あんなに臆病だったのだろう。

私にも妃奈にも譲れない想いがある以上、ぶつかることだけは絶対に避けられないのに……。

「手をつなぐどころじゃないわよ。柊一ってば、どさくさにまぎれて抱きついてくるのよ。だから」

だから          あなたもぶつかってきなさい。

私は何も隠さない。

柊一と一緒にしたことや感じたもの、全部あなたにぶつける。

それがたとえ、あなたを傷つけることになるうとも。

だから、あなたも全力でぶつかってきなさい。

もし、どんな理由であれ全力でぶつかってこないなら

その時は、あなたの思いすべてを踏みにじって、柊一を持ってってやる

「          驚いた、な」

上層部にかかけ合って、書庫を開けてもらった甲斐がある。

「神谷に西園寺……そして皐月、か。私ってば、スゴいことに首突っ込んでるかも」

感知する者                      神谷の人間はそう呼ばれる。

あらゆる事象を理解しないまでも、感知することに関しては一級品。

遺伝的特性は、カンタンに言えば利他的。

自分よりも他人を優先にしがちな性格、みたいな感じだろう。

理を正に捻じ曲げし者。

代々、西園寺の血を引く者に継承される特異体質。

ある程度、事柄を『正しい』と決定づけてしまう能力のことだ。

しかし、チカラの大きさでいえば神谷や皐月に劣る。

「ま、チカラが強いと無敵だからね。運命操っちゃうよ」

少し他より劣っていなければ釣り合わないのだろう。

それほどまでに、強力ということだ。

特性は……強固な自我。

それも能力に後付けされたのかも。



自我が弱ければ意味がない。

そして最後に…… 皐月。

言を詠み、患う者。

「患う……？ 太極分離のことかな……」

言の真の意味を、聴くだけで理解してしまう能力のコト。

これにはこの前、不意を突かれたからなあ……。

いやー、たまげたよ。

けど、患うってのはどういう意味だろう？

「えっと……『幼年期に一度、死に瀕する。故に錯覚し、混迷する。その実、単なる奇病なり 太極分離にあらず』……」

…… 皐月くんてば、私を脅かすのが好きみたい。

こうなんども意表を突かれると、逆に感心しちゃうなあ……。

これ、すごい事実よ？

「他の意を解さない……これが特性か」

なるほど、頷ける。

あいつの鈍感レベルは並じゃないからねー。

周囲はタイヘンだ。

特に妃奈と桜が。

「ふむ……新事実も発見したし、今日はこのくらいにしようかな……。これ以上知るには、直接血族と話さなくちゃいけないし」

にしても……やっぱスゴいな、木枯って。

町立でしかも名前が第二高等学校なんてくだらないことではない。

高校ならもつとカッコイイ名前をつけて欲しいとか思っていない。

中学校かよ、なんて断じて思っていない。

「異能は惹かれ合う……敵対するためか、それとも血を強くするためか」

それはおそらく後者だ。

こればかりは理屈じゃなく、現場を見ての見解である。

私の人を見る目は意外とアテになる。

「……………意外は余計か」

私は本を閉じ、キッチンと本棚へ返した。

パチってしまったでもいいけど、内容はすべて記憶してしまった。

だから、拝借するのはなんて言うか……………KY？

すこし古い言葉なら、どんだけ。

いかほど。

「ふ……………私って流行の最先端？」

ニヒルな笑みを浮かべながら、書庫から退出した。

意味もなくスキップしてるのは、緊張感がなさすぎるだろうか？

ま、とにかく……………今はこれでいい。

いづれ必ず、結果は出るから。

この夏の内にでも……ね。

## 十二話 告白

「ん？どうした妃奈。邪気が漂ってるぞ」

地獄から這い出た次の日の放課後。

ホームルームも終わり、いざ帰らんと教室を出た直後である。

「はあ……。またかあ……」

妃奈はあからさまに大きなため息をつき、うなだれた。

「んー、どれどれ？」

妃奈が大事そうに握っている細長い紙を盗み見てみた。

「……呼び出し条？なんだ、教師を殴りでもしたのか？」

「ちっがーう！柊くんじゃあるまいし、そんな不良じゃない！」

俺は不良なのか……。

今明かされる、新事実。

「頭髪検査に引っかけちゃったのっ。ほら私、こんなだから」

そう言っただけは、毛束をつまんでみせた。

うーむ、少し黒とは言い難い……。

「ああ、茶髪にしたのか。さすがはスケバン、やんちゃのスケールが違う」

「スケバンじゃない！髪も染めてない！」

いや、スケールについてのツッコミはナシですか？

スケールちっちゃすぎだろ！とかさ。

「自然とこうなっちゃったのっ。それで、今から教育指導の先生のこと行っただけを誤解を解かないといけないから、今日は先に帰ってなさい！」

「う……不良を怒鳴りつけるとは、なんたる豪胆ぶり」

「いいから早く帰るっ。寄り道とかダメだからね」

小うるさいのか心配性なのか微妙だが、とりあえず了承してひとり帰宅することにした。

ま、太陽の熱射光線に気を付けるんだな、神谷の姐さん。

三階から二階、そして一階へと階段を降りてゆく。

三階なんてふざけんよ、なんて編入当初は嘆いたものだが、どうやら一年坊主は四階らしい。

前の高校は三年が三階、一年と二年は二階で収まったからな。

ほら、生徒数が段違いだからさ。

田舎の木枯とど田舎の前の土地では、やはりレベルが違っらしい。

まだ半年ほどしか経っていないというのに、ずいぶん心境が変化したものだ。

下駄箱もほら、数が全然違うじゃないか……。

「あ、柊一だ。学校には来れたんだねー。立派立派」

突如、俺の名前を口にする人間が出没した。

どこかで聞き覚えがある気がするのだが、はて……。

「……………」

「……………なに？その真顔」

振り返ると、ひとりの少女がいた。

とても長い黒髪……………ああ、どこかで。

見た気が、する。

「？妃奈は？今日は一緒に帰らないの？」

その女は、どうやら妃奈を知っているらしい。

アタリマエのはずだ。

見たところ同じ二年だろうから、妃奈を知っていても全然おかしくない。



「…………お前は」

……しかし、腑に落ちない。

俺に、妃奈や水野以外で美人の知り合いなんていなかったはずだ。

いや、そもそも……。

“初対面のクセに”、この女はなぜ俺の名前を呼び捨てにしているのか

「…………ちよつと、どうしたのよ柊一。お化け屋敷の後遺症？」

お化け屋敷

この女は一体なにを。

『！あれ！出口じゃないか！？』

一体なにを、ほざいていやがるのか

『よっしゃ！全力で駆け抜けるぞ、！遅れるなっ！』

お化け屋敷なんて、そんなもの

「ああ……そうか。俺、またか……」

「……柊一、やっぱり最近変よ。絶対おかしい」

「失礼なことを言うなよ、“桜”」

俺はさっさと靴を履き替え、帰ろうとした。

目の前の桜から逃げるように、焦りを感じながら。

「ちょ、ちょっと待って！言いたいことがあるんだけどっ」

……どうやら、現実逃避はかなわなかったらしい。

ズンズン歩く俺のそばを、桜がマークしてきた。

「柊一さ、私のお父さんと仲良いつて……ホント？」

「んー、杯を交わし合った仲つてとこかな。けど、それがどうした

んだ？」

桜は急に言いよどみ、なぜかテンパっていた。

彼女にしては珍しい……いや、最近増えた、慌てた態度だ。

「な、なんかね、今度一緒に食事したいとかなんとかって……私は別にどっちでもいいんだけど、とにかくお父さんが、柊一に会わせるってうるさいのよ」

「……それで？」

「だ、だから！その……なんて言うか、こう……アレよ、アレ！」

アレで意思の疎通ができるほど、俺は人間的に卓越していない。

代名詞だけでなんとかなれると思うなよ。

日本語はそんなに甘い言語ではないのだから、もっと言い方があるだろう。

「と、とにかく！黒塗りの高級車には気を付けなさい！」

そんな物騒極まりないことを叫んで、桜は走り去ってしまった。

それを桜の親父さんが言うと、シャレになんないからなあ……。

こう、アメリカンポリスに『撃つぞ!』と言われてる気分だ。

「……夜は出歩かないようにしましょう」

心に誓い、周囲の気配に集中しながら家路を急いだ。

「ただいまー」

居間でくつろいでいると、我らが神谷の姐さんのお帰りだ。

しかし、時刻はすでに六時を回っている。

いくらなんでも遅すぎるだろう。

「遅くなってゴメンね。すぐに夕飯の支度するから」

大きな買い物袋を二つも抱えて、妃奈は居間に現れた。

「たく、何度言えばわかるのか」

「……妃奈。買い物に行くなら一緒だって言っただろ。そんなに重い荷物を抱えて、仕方ないヤツめ」

俺は買い物袋を奪い取り、中身を冷蔵庫に次々と放り込んだ。

袋の中には卵や野菜や肉類、調味料といった様々な食材が詰まっていた。

さぞかし重かったろうに……って醤油を冷蔵庫に入れても仕方ないか。

あ、アイス買ってきてる。

……抹茶味は譲れんな。

「あ、ありがと……」

妃奈は頬をほんのりと赤く染めた。

あー……手が触れたとかで照れてるならバカにしてやる。

「あつ！ やっちゃった！」

「やっちゃったのか！？」

袋と一緒に漁る妃奈が変なことを言うので、ついお茶目に言い返してしまった。

決して分かりはしない超高度な冗談だ。

「ああ、もう……またやっちゃった……」

……また、なのか？

経験アリなのか？

「……なにをそんなにやっちゃったんだ？」

返答次第ではビックリレベルがアンノウンだ。

「……福神漬け、買い忘れちゃった……。今日カレーなのに……」

「な、なんですと!？」

ビックリレベル、アンノウンだ。

福神漬けのないカレーなど、水のない海も同然。

俺は多少の既視感を覚えつつ、居間を飛び出した。

「隊長! 急いで買ってくるであります!」

「うう……ごめんなさいでありますう……」

情けない声をガソリンに、コンビニという名の敵艦へと突っ込む俺。

夏は暗くなるのが遅いが時間が時間、隊長に行かせるわけにはいかない。

ならばこの俺が、大日本帝国の旗を掲げて特攻するしかあるまい。

神風に加護を受け、赤札を受け取った時から覚悟していた死を、俺は乗り越える。

大日本帝国、バンザイ!

「……アホか、俺は」

高ぶる心を制し、冷静なツツコミを入れておいた。

神速で買ってきた福神漬け入りコンビニ二袋を片手に、家路をのろのろと辿っていく。

「あー、やっぱり暗いなー。妃奈に行かせなくて正解だ」

コンビニ袋を振り回しながら、久々に口笛を吹いてみた。

「む……ヘタクソになってる。どうしよう……」

くだらぬ悩みを抱えて、すっかり夜型になってしまった町を闊歩する。

辺りは本当の夜のように、人通りも皆無だ。

暗く、冷たく、寂しい夜。

かすかに聞こえるエンジン音に耳をかたむけて、初めてそこに人がいるのだと確認する。

拍動するように重く響く駆動音が近くなり、安堵の息が出る。

少しは涼しくなった暗い夏の中を、俺は歩いていく。



ふと。

なんとなくだが、身体がぞわりとした。

まるで、標的を定められた草食動物のよう。

胸が締め付けられ、途端に周囲が怖くなる。

電信柱の影が怪しい。

曲がり角の向こう側が怪しい。

しかし、どんなに訝しんだところで原因はハッキリとしない。

ハッキリとするならそれは、肉食動物の姿を発見したその時のみ。

「……………ん？」

さっきまで聞こえていた車のエンジン音が、急に激しくなった。

まるで暴走するような……………まるで何かに突進するような……………。

まるで、草食獣を捕食しようとする肉食獣のような。

「っておい……………マジか……………」

町には、姿を隠そうとする肉食獣はいなかった。

かわりに、俺に向かって直進してくる漆黒の車が数台……。

明らかに尋常ではない。

「そこらのチンピラならいいんだが……ああ、俺が何をしたってんだ……」

あっさりと俺を包囲する高級車の群れ。

その数、約四台。

「おいおい、ガキひとりに大げさだね。最初から穏便にすまずつもりはないってか？」

ぞろぞろと車から出てくる屈強な男たち。

その顔つきからして、タバコをくわえてバイクにまたがるヤンキーとは格が違っていると判断した。

言うなればそれは、プロの顔。

カツアゲをするのとは次元が、一般人とは住む世界が違う極道の証だ。

「

」

物怖じせぬ俺に感嘆したか、頭と思われる男が少し空気を変えた。

必要なこと以外口にしない寡黙な戦士。

多分、素手でやり合っても負ける。

今の俺なら、サシでナイフを持とうと勝てはしない。

ならば、することなど決まっている。

「

」

距離を詰められる前に、一気に駆け出した。

ただの一般人なら怯えて動けもしないだろうが、俺は違う。

呆氣にとられる黒服たちを背に、そのまま車のボンネットを飛び越えようとし

「ああ、くそっ……」

目の前に立ちふさがる、あの頭にようやく気が付いた。

ゆらゆらと、体が揺れている。

それはもちろん車内にいるからで、俺が拉致られたからでもある。

「……ちくしょう」

小さく呟き、体の力を抜いた。

両隣には黒服のコワイおじさんが二人。

運転手と助手席も合わせて全部で四人。

無論、助手席のオジサマはミラー越しに俺を見つめている。

サングラスがカッコいいぜ……。

かれこれ十数分、俺は息苦しい地獄のドライブを満喫している。

向かう先は山か、湾か……。

そんなことを気にしているうちに、先頭の車が停止した。

左右の窓はお茶目なギミックが凝らされており、中から外が見えない。

フロントガラスから見るに、どうやらお屋敷に到着したようだ。

それも、特大の武家屋敷。

先頭車両から降りたお頭は、インターホンのなもので何やら交渉している。

すごく気になるけれど、今飛び出せばトカレフが火を吹くかもしれない。

うわあ、めっちゃコワいんですけどお……。

「出るぞ、ボウズ」

おじさんがハスキーボイスを震わせる。

俺も体を震わせながら指示に従う。

見渡してみれば、黒服さんがみな、勢揃いしていた。

皆さま一様に膝に手をつき、頭を下げている。

あ、逃げるチャンスかも？

カタリ、と小さな音がした。

大きな門のすぐ横にある小さな扉が開いたようだった。

そこから、俺より小柄な誰かが参上し

「カエルぴよこぴよこみぴよこぴよこおおおッ!」

黒服一同が、突如としてコメディアンと化した。

「え、何!? 早口言葉!？」

息のあつた発声は百点満点。

大合唱となって俺の耳をつんざいた。

「あはは、おかえりー。それといらっしゃい、柊ー」

パニクる俺をさらに追い込む誰かさん。

小さな扉から現れたその誰かさんは、俺の知り合いによく似ていた。

腰にまで届く、長く麗しい黒髪。

凜とした雰囲気を漂わせ、いつになく柔和に微笑んでいるその姿はまさに美妙だ。

ああ……なんで気が付かなかったんだ、俺は。

ほら、すぐそこに……表札があるだろ？

カッコイい名字じゃないか、西園寺だなんて。

「あのぉ……ボクは一体、何の落とし前をつけさせられるんでしょ  
うか……」

「……落とし前？くだらないこと言っていないで、早くこっちに来な  
さい」

そう言っつて桜さんは、奥へと消えた。

……状況が、驚くほどに理解できない。

というのはウソで、実は結構わかってきた。

桜が帰り際に残した不吉な言霊。

西園寺さんが俺に会いたがっているという厄介な事実。

そして、あの表札……。

どうやら俺は、犯罪まがいのお出迎えに遭ったらしい。

「非常識な人たち……」

今さらなことを呟いて、俺は桜の後を追った。

扉をくぐり抜けるとそこは、ただの庭。

学校のグラウンドとあまり変わらない広大な敷地が広がっているだけだ。

もう驚かないさ。

拉致被害者なんて大抵そんなもんだよ。

「はいはい、こっちょ。迷ったら面倒だから付いてきて」

桜が数メートル先で手招きしていた。

……たしかに、迷ったら大変だ。

侵入者用のトラップが設置されてたりして……。

「……なあ桜、あの人たち何だったんだ？」



恐る恐る、訊いてみた。

とりあえず正体を確認せねばなるまい。

「ああ、よく解らないけど、良い人たち。私が生まれたときから居ただけど、みんな私に親切なの」

「……そうか。それだけ聞けば十分だ。悪いけど、もう一つ訊いていいか？」

「?ええ、どうぞ?」

俺は手に持ったままのコンビニ袋を掲げ、胸を張り、堂々と口を開く。

「晩メシを……食べようとしてたんだがな。どうすれば帰してくれるかな」

「それは大丈夫。ちゃんとご馳走してあげるから」

いや、そうではなく……。

「それじゃ半分しか答えてないだろ。……帰る方法を教えてくれな  
いか？」

「さあ？それは私の決めることではないわ。私の父が決めることよ。  
……でも、私の機嫌を損ねたら一生帰れないでしょうね」

なんてバイオレンス……。

俺は生と死の淵に立たされているのか。

「……よし。ならもう一つ。……さっきの早口言葉はなんだったん  
だ？」

「あれは挨拶よ、挨拶。あの人たちに言い聞かせておいたの。これ  
からああ言いなさいって」

桜が決めたのか……。

お嬢！ただいま帰りました！なんて言われるよりは幾らかマシでは  
あるが。

にしても広い……。

この屋敷にホームレスがやってきてもおかしくないぞ。

庭の中心には大きな池……それを囲むように、コの字型に屋敷が繋がっている。

土蔵もあるし、探せば宝の地図でも埋まってるんじゃないか？

それと……池のすぐそばに植えられた数々の木々。

何の木かは知らないが、花を咲かせば花見ができる。

いやあ、少し分けてくれないかなー。

「あ、そうだ。妃奈に連絡しなければ」

俺はズボンのポケットからケータイを取り出し、アドレス帳を開こうとする。

ガシッ、なんて擬音語はよく出来ている。

桜が俺の手首をつかんだ瞬間そんな音がした。

「……なんで、妃奈に連絡する必要があるの？」

「いや、そりゃだって一緒に住んでるんだから当

」

……しまった。

これは口外しない約束だったのに

「然」

呆然としているのは桜も同じ。

俺の腕を掴んだまま、機能停止している。

「今　　なんて……」

「いや、早く行こう桜。桜のオヤジさん待たしちゃ悪いだろ」

「　　待ちなさい」

さっさと歩き出そうとする俺を、桜は制止した。

桜の手に力がこもり、腕が圧迫される。

「あなた……妃奈と一緒に住んでるの？」

冷たい桜のソプラノ。

不意に、ふたりの間をつむじ風が吹き抜けた。

庭の芝は風になびき、またもとに戻る。

桜は顔にかかった髪を払おうともせず、じっとこちらを見据えていた。

その眼差しは俺を貫き……返す言葉をただ待っている。

「……どうでもいいだろ、そんな事」

桜の強い視線に耐えきれず、ふいと目をそらしてしまった。

それでも桜は睨みつけるように、俺を凝視する。

「……お願い、答えて……」

いさめる風でもなく、桜は静かに言葉を紡ぐ。

悲しみすら含んだその言葉を、俺は無視することが出来なかった。

「……ああ。住んでるよ」

低く、小さく言葉を返した。

なんの感慨も込めず、ただ淡々と……。

そらした目を戻すことはなく、桜の表情はうかがえない。

……だというのに。

どうして俺は、桜が辛そうだななんて予想しているんだろう……。

「……そう、そういうこと……」

なにを納得したのか、桜はゆっくり手を離した。

俺は視線を桜に戻したが、桜は顔を伏せてしまっていた。

「……桜？」

「結構まえから、一緒に住んでるでしょ？」

桜はパツと顔をあげた。

予想していた表情とはかけ離れた明るい笑顔だったが、未だ辛そう

だという予感に頭にこびり付いたまま離れなかった。

「え？ま、まあ二、三週間ぐらい前からかなあ……………」

「そっか…………じゃあ悪いことしちゃったわね。今度お詫びするわ」

「…………悪いことって、なに」

「あんたを今日連れてきちゃったコト。あと…………遊園地のコト」

「俺を拉致したことは反省してほしいが…………遊園地のコトってなんだ？」

俺はしてはいけない質問をしてしまったのか。

桜は心底あきれた表情でため息をついた。

「…………筋金入りの鈍感ね。いいわ、もう。あんたと話してるとイラついてくる」

そう言って、桜は俺に背をむけた。

そしてそのまま歩き出してしまった。

……なぜか、桜の唇が震えていた気がする。

「お、おい桜……待てってば」

「うるさいわね、喋りかけないで」

喋りかけないでっ……俺を強制的に拉致しておいてそれはないだろう。

「待てってばっ」

ずんずん突き進んでゆく桜の手首を、俺はガシッと捕まえた。

さっきとは真逆の立場。

だが

「触らないでっ！バカ！」

その反応すらも、真逆でしかなかった。



桜は振り返ると同時に、俺の腕を思い切り振りほどいた。

情けないことに、俺はかなり怯んでしまった。

腕を振り払われたことに、ではない。

「桜……お前……」

桜の瞳はいつも、黒く深い色をしている。

闇のように暗いのに、光のように輝きを放っている。

俺はその瞳を見て、愕然としてしまったんだ。

今の桜が、俺を睨んでいるから？

否。

男にも女にも、睨まれることには慣れている。

しかし

「泣い……てるのか……」

瞳に涙を溜めながら睨まれたのは、初めてだった。

「別に……泣いてなんか……ない」

俺が言い当ててしまったせい、今まで溜まっていた涙はポロポロと零れてしまった。

桜の頬を伝う、幾筋もの水滴。

表情が崩れた、とでも言うべきか。

涙だけではなく、その泣き顔や泣き声にすら俺はたじろいでしまった。

「な、なんで……なんで泣いてるんだよ……」

おかしいだろう。

普段の桜ならまず、泣きはしない。

それに、涙が零れてしまったのならそれを隠す。

泣き顔を見られたくないと……必死に隠そうとする。

俺をぶん殴ってでも、泣いてしまったという事実を隠蔽するだろう。

なのに何故？

何故……今の桜は隠そうともせず、ただ涙を拭ってなんかいるんだ？

「教えてくれよ……。なんで、泣いてるんだ……」

「うう……わ、わかんないわよ……」

ほら、まただ。

隠そうとなど、微塵もしない。

まるで子供のように、桜は嗚咽をもらして泣いている。

どんなに拭っても止まらない涙と悪戦苦闘するのみだ。

ただ　泣いているだけ。

「……桜は、ずるい」

俺はふと、そんなことを言い出していた。

「なんで泣いてるとか……なんでそれを隠そうともしないのかとか……。俺は何もわからないのに、桜は何一つ答えてくれない……」

俺は、解らなくてはいけない。

いつからか 失ってしまった、俺の人間性を補うために……。

「教えてくれよ……！俺、バカだから……わからないんだよ……」

俺はいま、泣き出しそうになっている。

何故？

それすら解らない。

俺は理解しなくちゃいけないのに

「……ばか……」

桜の姿が一瞬、見えなくなる。

黒髪がふわりと舞い、ようやくどこにいるかわかった。

「  
」

……桜は、俺のすぐそばにいた。

ぽふ、と俺の胸に飛び込んだのだ。

腕を回すことはなく、ただピッタリと、俺にすがるように抱きついてきた。

「ばか……本当にばか……」

俺の鎖骨に触れる桜の手が、暖かい。

俺はここでようやく、するべきことを見つけた。

「……泣かないでくれよ」

俺は、そつと桜を抱きしめた。

桜がそうして欲しそうだったから……。

俺がそうしたかったから……。

それに、俺は桜に泣いてなんかほしくない。

ずっと笑っていてほしい。

「だから……」

「…………え？」

俺の胸の中で、桜が呟いた。

どうやら桜は、ひどく赤面しているようだった。

表情は見えないが、耳が真っ赤になっている。

「好き…………だからよ」

「…………へ？」

「だ、だから…………私が柊一のこと…………好きだからよ」

…………隙？

いやいや、隙ではなかった。

桜の言った『スキ』は、紛れもなく『好き』だった。

で、それが桜の泣いてる理由なのか…………？

「……桜、俺のバカさ加減は承知だろう」

俺は本当にバカだ。

人の気持ちが解らぬ部門第一位どころの話じゃない。

「桜がどうしても言いたいこととか知りたいことがあるなら……どんなに言いづらくても俺に直接、ストレートに言ってくれ。じゃなきゃわかんない……」

心の底から、桜には悪く思う。

でも、わからないのだから仕方がない。

数学のように、公式を当てはめれば解けるものでもないし。

「……そうね。私が悪かったわ。そのまま丸ごと伝えないと、柊一はわからないものね……」

自分から言っておいてだが、なんだか悲しい。

他人に認められちゃうと、すごく心が荒む……。

「私は……柊一のことを好きよ。ずっと前から。でもさっき……妃

奈と一緒に暮らしてるって聞いて……すごく辛かった……」

なぜ、桜は辛かったのか。

それは            俺のことが好きだったから……？

「だってそうでしょ？好きな人が、自分以外のほかの女と暮らしてるなんて……辛いに決まってる……」

まるで頭の上にランプが百花繚乱。

中学の時に経験して以来途絶えてしまった、あの数学の問題が解ってしまった時の快感。

桜の気持ちがいっと……わかった気がする。

「ご、ごめんね柊……。妃奈とのこと聞いてたのにこんなこと言っ……。ほんと、私って最低……」

桜は腕に踏ん張りをきかせ、俺の胸から脱出しようとした。

しかし。

「え……？ちよ、柊……？」



俺の腕は、桜を逃がしはしない。

がっしりと小鳥を閉じ込めた檻のように。

「……桜のなにが最低かは知らんが、俺の中で桜は今、最高だ」

「……………え？」

「だって、こんなにはつきり俺に解りやすく気持ちを伝えてくれたのは、桜が初めてだ！だから桜は良いヤツだ！最高だっ！」

桜は俺のことを好きだと言ってくれた。

だからこそ、つらいとも言ってくれた。

包み隠しもせず、ど真ん中のストレートで。

俺にとってこれほど、ありがたいことはない。

欠如してしまった人間としての機能。

あらゆる物事に対して、俺はバカになってしまった。

妃奈や桜を見て誰か解らなかったり、人の気持ちを理屈でしか説明

できなかったり。

そんな俺をカバーしてくれる人……。

それが今、目の前にいるんだ。

「いやー、俺は嬉しいよ、桜。ほんと、無敵だな」

「え。ちょ、痛いつてば！離してっ」

「うはははは！くらえ、死のローリングホース！」

強く抱きしめた桜を、そのままジャイアントスイングにもっていく。ぐるんぐるんに回してやると、桜は逆に俺の服を握りしめてきた。

ま、そうしてもらわないと飛んでいつちまうからな。

軽いし、体がもうすぐ地面と平行だし。

「ば、ばか糞ー！今すぐ止めなさい！危ないつてば！」

「大丈夫！その辺芝生だし、うっかり手を離してもケガしない！」

「ケガの問題じゃないわよっ！私が怖いからイヤだって言ってるのっ！」

何を言われようと、聞く耳持たねー。

前に妃奈にも同じようなことしたっけな。

あん時もイヤがられた挙げ句、最後は酷い目に遭ったっけ。

「さあ、音速でも越えるかなっ！」

「お願いだからやめてー！」

## 十三話 死ぬ罪

「ぐ……ぐへえええ……」

「自業自得よ……ばか」

芝生の上に座りこんで吐き気を催しているのは、一体だれだろう……。

あ、俺か。

ってこんなこと前にも経験したな。

「な、何回転くらいしたかしら……？」

「わからん……。百は超えただろうな……」

いやマジ、冗談抜きで。

ワンハンドレッドオーバー達成だ。

音速はまあ……無理だったかも。

「この大ばか者……すっかり夜じゃない……」

「なんだ？あんなに喜んでたくせにイチャモンつけるのか？」

「喜ぶわけないでしょう……あんなにイジメられて……」

「でも桜、笑ってた」

「……………」

「ほら、反論できない」

やっぱり桜は嬉しかった……って。

反論しない？

「……反論しないってことは……もしかして、イジメられて嬉しい人？」

「なっ……ななななな……！？どついう意味よっ！？」

「だから、ロウソクとかムチとか目隠しが好きかって訊い……」

「うるさーいっ！！」

どういう意味かと訊いておきながら、拳で俺をだまらせる桜女王。

顔の造形が歪んだのは、どこのドイツ人だぁい？

アタシだよ！

「怒った！ものすごく怒った！もう屋敷から出してやんないっ！」

どうやら俺を殴っただけでは気がすまない模様。

ブンブンに怒りながらひとりで歩きだしてしまった。

……ひょっとしてエマージェンシー？

「やば………」

こんなところに置き去りにされては、白骨化してしまう。

もしくは愉快的オジサマ方に蜂の巣にされてしまう……。

俺は立ち上がり、耳を真つ赤にしている桜に歩み寄った。

「おーい……怒ってますか？」

「……そうね、ご機嫌斜めといったところかしら」

なんとわかり易い。

斜めどころか垂直？

「どうやってたら機嫌は平行線に……？」

「生け贄でも捧げてもらおうかしら。それよりほら、もう着いたわよ」

さらっとダークな冗談をいただいってしまった。

心の底から、冗談だと信じております……。

「お、お邪魔します……」

桜に続き、玄関へと進入。

予想していたオジサマたちは、どうやら居ないようだった。

「おお……普通の空間……」

しかし、玄関とはいえ広さは十分。

我が家の約五倍はあるのではなからうか。

「西園寺家の人間がみんな、あんなだとは思われないからね。追い払っておいたよ」

……え？

桜さん、いつの間に男性へと性転換なされたのか……。

こんなに男らしくなるなんてちょっとビックリ……って。

「こ、こんばんは……？」

思わず語尾を上昇。



疑問文へと変化してしまった。

入った時は、俺と桜だけでしたよね……？

「ありがとう、兄さん。夕飯はまだ？」

「ああ。どうやら間に合ったようだね」

桜が兄と呼ぶからには、兄なのだろう。

だれも居なかったはずの上がり框を踏んでいるのは、俺よりも幾つか年上の男性。

大学生くらいだろうか。

「けど、急いだほうがいい。父さんが待ちくたびれちゃってるからね」

「そう、わかったわ」

「それで……そちらの方は？」

桜のお兄さんの視線が、俺へと注がれる。

紹介が遅れてるからなんか気まずい。

「あ…… 皐月柊一です。申し遅れましてどうも……」

こういうのは、桜がきっかけを作るもんじゃないのか……？

そこら辺の教育はしていないのだろうか。

「いや、失礼。僕は桜の兄の、西園寺 吹雪<sup>ふいふき</sup>。そうか、君が柊一くんか……。会えて嬉しいよ」

そう言って、吹雪さんは手を差し出した。

…… ちよつと感激。

まさか西園寺家にも普通の人間がいようとは……。

俺は快く握手を交わし、普通の人間関係を噛みしめた。

「ほら、早く行きましょ」

「あ、ああ……」

桜に急かされ、さくさくつと廊下へ突撃。

「……柊くん、ちょっと」

桜には聞こえないボリュームで、吹雪さんがなにやら呟いた。

おいでおいで、みたいな手招き付きだ。

「な、なんでしょう……」

こちらにも小さな声で応答する。

クロスレンジまで近づくと、吹雪さんは俺に耳打ちする。

「君、さっき庭で桜とじゃれてたよね。縁側から丸見えだったよ」

「は、はあ……」

吹雪さんは嬉しそうに囁いた。

笑っているところは桜にそっくりだ。

「桜が家に友達を連れてくるのは、これが初めてなんだ。昔からひとりで遊んでばかりだったから少し心配だったけど……どうやらもう心配ないみたいだ」

なんと妹想いなお兄さん。

けど、昔の桜ってどんな感じだったのだろう。

あんがい引つ込み思案だったのかもしれない……。

「でね、桜は大事な妹なんだ。桜は君のことをだいぶ気に入っているみたいけど……今度、桜を泣かそうものなら、僕は君を許さないからね？」

表情はさっきと変わらないはずなのに、俺はその笑みがとてもニヒルなものに思えた。

冗談などではない、とういうのがひしひしと伝わってくる。

……この人は本気で桜を案じている。

少なくともそれだけは理解できる。

「あ、それから、他のひとに桜が泣かされるようなことがあっても許さないからね。君が桜を守るんだ。これは男としての義務、だろ

？未来の義弟くんおとうこ」

最後に邪悪な単語を残して、吹雪さんは俺の背中を押した。

俺と桜との距離はかなり長くなってしまった。

気付いてもいいようなもんだが、桜はずんずん進んでいく。

俺は吹雪さんに頭を下げ、小走りで桜を追った。

この屋敷で迷っても、死亡率は高いだろう。

無人島でサバイバル生活を送るぐらいには高いはずだ。

……ふと気になったが、あんなところで立ち尽くしてどうするのだ  
ろう、吹雪さん……。

私は優秀だ。

そう確信している。

如何なる英傑であろうとも今の私に勝りはしないだろう。

あんな……………。

あんな爆弾発言のあとで、こうして平静を装うことが出来る人間なんてそういない。

そう、私は確信している。

「……………迷ったらきつと自力じゃ抜け出せないな、ここ」

となりからそんな呟きが聞こえて、心臓が飛び跳ねた。

……………まだ、顔を直視できるかどうかはわからない。

もしかしたらあまりの恥ずかしさに爆発してしまうかもしれない。

ひとつ、疑問があるとすれば。

なぜこいつは、私の一世一代の愛の告白を受けてなお、平然としていられるのだろう……………。

私もこの手のことには疎いけれど、さすがにこの態度はあり得ないのではなからうか。

抱きついたり抱きしめられたりしたら誰だって、心中穏やかではないられない。

なのにこの男ときたら、照れもしない。

こっちは今も心臓が踊り狂っているというのに気楽なものだ。

あんなに強く抱きしめられて……まだその感触が残っているというのに。

「ん、ここか？つて襖ふすまデカ……」

どうやらうちの襖は大きいらしい。

ほかの家の襖なんて見たこともないからわからない。

私は襖に手をかけ、深呼吸する。

ついに……この時がきてしまった。

西園寺が異性を親に紹介するこの時が。

「おおっ！来たか！」

襖が開くと同時に西園寺パパの声がした。

豪快、無敵、最強、鬼神といった単語がよく似合うお人だ。

そしてその向かい側に鎮座していらっしやるのは吹雪さん。

この屋敷には隠し通路でもあるのだろうか。

「ご無沙汰して……」

「さあさあ、まずは一杯」

挨拶をするひますら与えられず、となりに座らされて杯を受け取る。

少し変わった香りのするお酒をいただき、一気にあおってみた。

「あ、うま……」

「そうかそうか！君も気に入ったか！」

なんというか……洋酒のような日本酒？

ウイスキーやテキーラの風味をかしつつ、それでいて澄んでいて喉越しがよい。



今までに味わったことのない奇妙な酒だ。

そして、今までに味わった酒をことごとく淘汰するほどの美酒。

こんな飲み物がこの世に存在したとはな。

さ、ラベルをチェック開始！

「……『グレイプニル』……？」

あまりにへんぴなネーミングのせいで声にだしてしまった。

グレイプニルって、北欧神話に登場するあれのことか？

「それはうちが作ってるお酒だね。変わった名前だろう？ 神話からとったんだよ」

グラスをかたむけながら吹雪さんが口を開いた。

飲んでいるのはもちろん、グレイプニルだろう。

「グレイプニルっていうと……フェンリルを縛った紐ですよね？」

「おお、存外に博識よ」

存外は余計です、西園寺パパ。

「え、なにに？私わからないんだけど……」

興味を示したらしい桜がいざってやってきた。

名前を知ってる人は多いと思うけど、神話そのものを知ってる人は少ないのではなからうか。

「北欧のほうに伝わる神話に出てくるんだ、グレイプニルって魔法の紐が」

「フェンリルというのは悪神ロキの子供でね。小さい頃はアースガルズというところで育てられていたんだ。けれど、日に日に大きくなるフェンリルと不吉な予言も相まって、神々はフェンリルを拘束しようと決意した」

どうやら北欧神話に詳しいらしい吹雪さんは、上機嫌で語りだした。

「どんなに強力な鎖を鍛えてもフェンリルは簡単に引きちぎってしまった。困り果てた神々は小人たちの力を借りることにしたんだ。」

そして完成したのが、グレイプニル。この魔法の紐を使って神々は見事フェンリルを岩に拘束することに成功するんだ。一時的にだけ」と

最終戦争ラグナロクが勃発するころにはフェンリルの拘束は解け、主神オーディンを飲み込んだ。

ずっと拘束されてたわりに案外強かったんだな、フェンリルは。

まあ結局、その直後にオーディンの息子であるヴィーザルに殺されてしまうんだけど。

「へえ……。でも、どうしてこのお酒の名前がグレイプニルなの？ 関係あるの？」

「そもそもグレイプニルとは、猫の足音、女の髭、山の根、熊の腱、魚の息、鳥の唾という六つの材料から出来ていたんだ。そのおかげでとり尽くされてしまい、今の世には残っていないともされる。このお酒も六つのとても貴重な材料をつかっているんだ。それで、グレイプニルと名づけられたわけ」

なるほど、そういうことか。

俺はてっきり、巨狼すら縛り上げるほど強い酒なのだとばかり思っていた。

しかしこの不思議空間はなんだ……？

会っていきなり酒を振舞われた挙句、神話の話で盛り上がるなんて……。

さすがは西園寺の人々といったところか。

「さ、話が長くなってしまったね」

吹雪さんはグラスを置き、姿勢を正した。

改まった表情で桜と西園寺パパに視線を送る。

「ようこそ柊くん。僕たち西園寺家は君を歓迎するよ」

そう言って、にやかな笑みを俺に送ってくれた。

……西園寺家。

言われてみれば、ここには西園寺家の面々が集結している。

桜に吹雪さんに、西園寺さん……。

たった、それだけ。

俺が言えたことではないが、この家族には決定的な存在が欠けてい

る。

今日はたまたま居ないだけなのかもしれないが、その実真相は闇の中だ。

俺と妃奈……それに桜。

気味が悪いほどに共通しているのは、単なる偶然なのか……。

もつとも、偶然では片付けられないからこそ気味が悪いのではあるが。

「……こちらこそ、招待して頂いて嬉しくおもいます。それで……」

こればかりは訊いておかねばなるまい。

俺だって、人間性の欠如に目をつぶれば馬鹿じゃない。

うすうす感ずいているさ。

俺を取り巻くこの環境は……。

俺の周りに居る人々は……。

普通の世界に比べて、完全に狂っている。

「俺を呼んだ本当の理由……教えてくれませんか？」

「？」

「……なに、そう大したことではない。少しばかり忠告をと思ったまで」

……忠告。

桜を利用してまで……そんなに大切な忠告なのか。

「柊くんには必要ないと僕は言ったんだけどね。手遅れになってはいけなと、父さんが危惧しているんだ」

いけない。

この先の話を聞いてはいけない。

聞けば帰れなくなる。

俺の平穏な日々……みんなとの大切な日常に。

「……桜、席を外してくれないか？」

「吹雪。桜とて西園寺家の一員であらう」

桜の退室を希望した吹雪さんを、西園寺さんが制した。

……彼女も無関係ではないのだ。

「……真つ先に訊いてくる辺り、君も感じてはいたか。こちらとしては最後に言いたかったのだがな」

俺は……感じている。

あの日……俺の祖父が訪問した時から狂いだしたんだと思う。

俺の死を予言したあの日。

改めて他人から言われたせいで自覚した、俺の体。

“切り替わる”とかそんな難しい話は抜きで、俺の体は日々蝕まれ、腐っていく。

それがなんのせいかは知らない。

けれど確実に、俺の体は着々とおかしくなってる。

その理由を、俺の父と祖父は“切り替わる”せいだと言った。

俺の心には二種類あり、本来生まれてくるほうを陽性、生まれてこ

ないほうを陰性というらしい。

そして皐月家の人間は決まって、この両方を持って生まれてくるのだ。

しかしそのどちらかが、幼い頃に消滅するのだとか。

俺の場合は、今でもこの両方を持ち合わせており、それらが“切り替わる”ことで体に物凄く負担がかかり、最終的には死に至る……。

そんな……まるで不治の病のような体質が、本当に存在するのか。

それは俺自身がよく知っていることであり、答えなど言うまでもない。

……でなければ、俺が死を予感するほど体がおかしくなったりしないはずだ。

……そんな俺の苦悩も知らず、この西園寺の人間は一体なにを忠告しようというのか。

桜にさえ明かしていないというのに……。

「君は……自分の体のことを知っているのだろうか？」

「！」



……やはり、この話か。

俺の体が限界に達し始めたこの時期に言うからには、西園寺さんも俺や皇月を知っていたんだろうな。

「そろそろ限界だ。今のうちに手を打っておかねば、その命、無残に散らすことになる」

「……だから、どうしたんですか？俺だってこのままでなんかいたくありませんよ……！」

「そうだろうな。だからこそ、今日きみを呼んだ」

「……………え？」

「そのまま死にたくないのだろう？ならば、西園寺の者として、生きる術を君に示そう」

これはどうしたことが。

生きる術を……示す？

それは、俺がまだ生きられるってことなのか！？

「……俺の父や祖父は俺の体のことを知っていて、わざと放置しています。俺が生きようが死のうが、無関係ですから。血縁関係もない貴方に、俺を助ける理由などないはずですが？」

簡単な話だ。

俺の命を救ったところで、西園寺家にはなんの利益もない。

ならば、捨て置くが必定。

一般人とは違う血筋の人間は、やはり一般的な考えなど通用しない。

「  
気に食わないね、その態度」

会話の中に割り込む吹雪さん。

凜とした態度で俺を睨みつけてくる。

「僕だって、君たちの家系のことぐらい知ってるさ。たとえ親子だろうが憎しみあうんだってね。だが、西園寺は違う。皐月と同類にはしないでくれないか。僕たちは、必要とあらば身を挺してでも身内を救う。  
それに」

吹雪さんの言うことはもっともだった。

……たしかに、俺は皐月の視線でものを言っていた。

それはやはり、西園寺家を侮辱したことに繋がる……。

「血は繋がっていなくとも、将来姻戚関係になる相手を放ってなどおけないだろう?」

……まだ言っのか、桜の兄。

俺の伴侶はもはや決定されたい。

嬉しくないと言えは嘘になるが、俺にだって少しぐらいは選ぶ権利がある。

「はっはっは!それもそうか!」

あれ、完全に家族公認……?

「いや、陰鬱な話はここまで。せっかくの料理ゆえな」

酒しか呑んでないのに何を言うか。

と、俺が胸の中で突っ込んでおくと、唐突に西園寺さんが手をたた

いた。

あれはもしや、伝説の召喚術。

俺の予想を裏切らず襖がスツと開き、仲居さんが登場した。

西園寺さんがひそひそと耳打ちすると、かしこまってまた奥へと消えた。

……無茶苦茶だな、西園寺の人々よ。

「おやおや、杯が乾いてしまっぞ」

そしてまた一杯。

名前こそ珍妙かつ不恰好だが、味は一品なのでいただいておく。

「……………」

あとは、全く話が理解できていない桜をどう説得するかだな。

それは保護者の方々にお任せするでしょう。

早めの夕食に舌鼓を打ったものの、酒だけは止まることを知らなかった。

俺と西園寺さんとが酔っ払った拳句、大暴走。

吹雪さんと桜は身内にもかかわらず傍観を決め込み、歯止め役がないまま暴れまわったという俺と西園寺さん。

後に、この騒乱はラグナロクと呼ばれることとなった。

「うっはああ……」

体中の力を抜き、床に敷かれた布団へと倒れこむ。

時刻は午後十時。

燃料がきれた暴走列車は運行をストップし、うそのように眠りこけたという。

目を覚ました俺は時間が時間ということもあり、西園寺家にご厄介になることにした。

入浴前に妃奈にメールを送ってはいたが、返事はなし。

ちなみに明日は学校がいつものようにあります。

いえ、考えたくないので無視を敢行します。

ひとつ言えることは、良い子の素行とはかけ離れているということだけ。

良い子はマネせず、悪い子は見なかったことにしましょう。

「ああ……まだ頭がクラクラする……」

風呂に入ったせいか、酔いがなかなか醒めない。

今日はこのまま寝てしまおうと決意した矢先、人の気配がした。

「柊……起きてる？」

障子の向こう側から、聞きなれた声がした。

一瞬だれか判らなかったが、今度はすぐに思い出した。

「……桜か。どうした？」

「えっと……中、入るね」

すうつと障子が開き、すでにパジャマ姿になった桜が姿をあらわした。

いつもなら乗り込んできそうなものだが、なぜか今の桜は少し違った。

どこか緊張しているようにも思える。

「ふーん、女子って寝巻き姿を見られるのがイヤじゃなかったんだ。勘違いしてた」

「わ、私だってイヤよ！でも、今は仕方ないから……」

まあ風呂上りなら仕方あるまい。

もつとも、俺は風呂上りはパンツにＴシャツ一枚という恰好だが。

妃奈が来てからは改革が行われてしまい、パジャマの着用を義務付けられてしまった。

ちなみに今の俺の服はすべて吹雪さんのものである。

西園寺秋羅さまのものではないと断言しておこう。

「それで、何しに来、ただ……？」

「……なんか言葉ヘン」

まだうまく舌が回らない。

視界も歪んでいるし、酒がまだ残っているようだ。

「……気に、するな。話を続けてくれ」

「え……まあ、そうなんだけど……」

どこか煮え切らない。

桜はもじもじとして、なかなか話そうとしなかった。

「料理……おいしかった？」

なにを言い出すかと思えば、そんなこと。

が、そこで俺は閃いた。



桜が夜な夜なやって来てまで訊きたいこと……そしてこの発言！

一般人は見逃すかもしれないが、名探偵である柊一さまは欺けないぜ。

「ふっ……読めた。あの豪勢な料理、桜が作った……もしくは手伝ったな？」

「うっん、全然。私は柊一となりで出来たての料理を食べていたわ」

名探偵皐月柊一……玉碎。

ここは蝶ネクタイで俺のふりをした少年にたのむしかあるまい。

「それに、私は洋食派よ。和食は作れないの」

「……洋食派？」

意外や意外、西園寺の武家屋敷に住まう一見大和撫子な桜さんは、洋食派ときたか。

その割には刺身をペロツと平らげていたが……まあ、訊かぬが華と  
いうことで。

「特にお菓子作りなんかは得意かしら。アップルパイは生地から作るし」

「生地からって、それがふつつなんじゃないのか？」

「生地から作るとすごく手間がかかるのよ。けど今は冷凍で売ってるわ。少し大きなスーパーに行けばあるんじゃないかしら」

パイを生地から作る、というのはふつつじゃないらしい。

それに、こうして話をする桜は楽しげだ。

本当に好きなんだろうと思う。

ま、人間ひとつは可愛いところがあってもおかしくないか。

「今度ごちそうしてあげるわ。マドレーヌとか、ケーキとか」

「……………」

「……………って、なんで睨みつけるのよ」

「いや、なんていうか……命にかかわることだから言わない」

「……どうせまた、お前にそんなの似合わないーとか、ちゃんと作れんのかーとか言うんでしょ」

そんなこと思ってもいないのに疑いをかけられるとは、俺も落ちたもんだ。

今までの言動が悪いんだろっな、きつと。

「……やっぱ可愛いなーと思っ

」

と、視界が突然真っ白に。

何事かと思いきや、桜が俺の布団の上にあった枕をフルスイング。

そして俺の鼻っ柱へジャストミート。

驚くほどのスピードとパワーで、俺を殴りつけたのだ。

補足させていただくと、ばぶん、なんて生易しい音はしなかった。

コンクリートを思わせる効果音が響いたのだから、たまったもんじやない。

「な、なに言い出すのよ！そ……それに、やっぱってなによー！」

ほーら、命にかかわる。

俺のカンをよくあたるんだ。

「いやー、初めて会ったときから思ってたんだよ。こっ、頭からかじりたくなるほど可愛いなと」

俺は最後まで言い切ることが出来なかった。

理由はもはや語るまい。

「ま……また言った……！」

「ほほう……なんだ、恥ずかしいのか？自分を『可愛い』と言われることが」

「……………っ！」

もちろん、第三回目の襲撃。

すでに予想していた俺は両腕でガードした。

「照れるな照れるな。そうやってムキになるところも桜らしくて可愛いとおもっぞ！」

「うるさいっ！黙りなさいっ！静かになさいっ！」

顔を真っ赤にして繰り出す必殺三連撃。

完全に体勢がくずれてしまった俺は、布団の上へ仰向けに倒れてしまった。

それでも攻勢を止めようとはしない桜。

俺の上にまたがると、枕でラッシュラッシュラッシュ　　！

これを、馬乗りなどと呼んではいけない。

ほんとうの武闘家がひとの上にまたがれば、それはマウントポジションと呼ばれるのだから。

「どうした、息があがってるぞ？女の子らしくて可愛すぎて、体力もないのか」

すこし無理があるが、とにかく『可愛い』という単語につなげなく

てはならない。

桜に殴りかけられない俺の唯一の武器……そう、言葉だ。

この言葉で、たまには桜に反撃せねば。

「ハッ  
暴力でなんでも解決できると思うなよ、『可愛い』  
桜ちゃん！」

大きく上に振りかぶってから振り下ろされる凶器と化した枕。

見事に防ぎきる俺のダメージは、無に等しい。

「……ひとつ気になることがあるんだがなあ、桜」

「言わなくていいっ！死人に口なし！」

俺はまだ死んでないし、これから死ぬつもりもありません。

それに、言っておかねばならぬ気がしなくてもない。

「桜、風呂から出たばかりだろ。髪がまだ少し濡れてるぞ」

「だからどうしたー！ー！」

「いや……風呂からあがったばかりの若い男女二人が、夜二人きりで戯れているのは如何なものかと。しかも、男の上で女が息遣いを荒くしながら上下運動をくりかえしているなんて、人に見られては一巻のおわりかと」

「  
」

石化してしまう桜さん。

枕は天高く振り上げられたまま、動こうとしない。

……いや、プルプルと震えていた。

ラッシュの次はダッシュ。

桜は勢いよく俺から飛び退いた。

二メートルほど離れ、枕を両腕で抱きしめながら座り込んでしまった。

背を向けて女の子座りされると、だれなのか判らなくなる。

「それと、いま気が付いたことがひとつ。桜がしたのは完全な、夜伽ってやつだ」

「  
」

はたして耳に届いたかどうか。

鼓膜すら石化して聞こえていないのではなからうか。

「ま、気にするな。ミスはだれにだってある。それに今は、からかい過ぎた俺の落ち度だ」

俺も気にしていないから落ち度も気にしてないがな。

だって、ミスはだれにでもあるだろう？

「……ねえ、柊」

「……な、なんでしょう？」

どうしてそう冷淡なのか。

桜は改まって俺の名を呼んだ。



「……早い……のかもしれないけど……」

ドクン、心臓が高鳴った。

こうして桜を見ていると

「私こういうことわからないから、言い辛いんだけど……」

強く、賢く、可憐な桜がいま、目の前にいる

ひとつのイノチとして優秀な存在が

ああ……たまらなく惹かれてしまう。

俺のなかの欲求が爆発しそうで……そそられるのを理性でおさえつけて。

「答えを……聞かせてほしい」

今にも殺したくなる衝動を  
殺したいくらい。

必死でおさえつけている自分を

「答え？なんの問いの答えだ？」

はて、と首をかしげてしまう。

いきなり『答えはなんだ』と訊かれて答えられるヤツがいるとするなら、それはきつとエスパーの類だ。

「庭で言ったじゃない。……その、あんたが好きとかなんとかって」

ああ、あれか。

で、一体何を答えればいいんだ、俺は。

好きだと言われて何か返さなければいけないのか？

だとしたら……。

「……ありがとう、か？」

俺に思いつく答えはこれしかない。

それを聞いた桜は、顔だけ振り向いた。

「……………」

いや、なんでそんな変な顔するんですか。

スネてますか？

それとも怒ってますか？

まさか、あまりの感動で泣きそうですか？

「どうしてそう……的外れな答えを……？」

……どうやら、憐れみの表情だったらしい。

「解説を要求する」

「……女性に告白されたら、同じように自分の気持ちを言うのがマナーなのよ」

「へえ、赤面しながらどうもありがとう」

「だ　だれのせいだと思ってんのよ！ふつうこんなこと、相手に言わせる！？マナーというより常識よ！常識！あんたがあまりに能天気でバカだから、私がこんな目に遭ってるんじゃない！小学生でも分かるわよ、こんなこと！」

「い、いや　　落ち着いて……？」

「あんたがぜんぶ悪いのよ！何もかも、森羅万象すべて！」

突然あばれだす西園寺のご令嬢。

殴りかかられないだけでしたが、すべて俺のせいになっている。

「腹立つわ！あんた見てると！今に思い知らせてやるから、覚悟しときなさい！」

せ、宣戦布告……？

軍事大国に宣戦布告された小国は、さつさと降伏するに限るのだが……それも許されそうにない。

ああ……羞恥の赤面と憤怒の赤面はこうも違うのか。

さつきまで沸き起こっていた嗜虐心は消し飛んでしまったよ。

なんだかとっても、もったいない気がする。

あんな桜は……今日一度見たが、もう見られないかもしれない。

思えば、俺は桜の問いに正解をだしていない。

桜が俺に何を伝えたいのか……。

それを俺は理解したと思う。

桜は告白をしたのであり、独白とはちがう。

返事が欲しいと言うなら、俺は返さなければいけない。

好きだと言われ、だからどうしたというのか。

俺にはそれが解らないが、いつか……返事を返したい。

時間はあまり……残されていないのだから。

覚悟はできている。

だが俺は、最後まで生き抜いてやるという覚悟もしているつもりだ。

どんなに無様で、醜く、異常だとしても、生きたい。

ただ、生きたい。

なぜなら俺は、死にたくないから生きているのではなく、生きたいから生きているのだから。

生命としての義務……現代の人間に本能がどこまで残っているかは知らないが、そんなことは関係ない。

生きて、生きて、生きて

大切な人たちのためにも生きたい。

だから                    その大切な人たちを犠牲にしても、俺は生きたい。

その点では、食事と大差ないと思う。

様々な命を犠牲にし、自分の命を長らえる。

価値観の違いはあれど、それは俺の主観。

客観的に見れば、何も変わりはない。

生きるためなら                    桜や妃奈、泉と水野までも、俺は殺してしま  
うのか。

それが当たり前だと感じているのに……。

それはとても、悲しいことだと思う。

もし決断を迫られた時、俺はどうするのか。

想像する自分はいつもバケモノじみていて……まるで悪魔のよう。

俺はそれが……二番目に怖い。

死の恐怖の次に怖い、と感じてしまうことが怖い。

ああ……だからこそ。

俺はこうして頑張ってるんじゃないか……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6171c/>

---

Only You !

2010年10月28日07時08分発行